



目次

自作・ジ・エンド	1
コラージュ・ルポルタージュ	2
チリコンカン	6
母は少年のように爺さんと遊ぶ	7
名前を付けて保存	13
支流	14
不都合な忍術	24
割とキリギリス	25
ファシリティ	39
死ねるおまえら	52
やましたの戦争	69
未だ曾て有らず	74
俺には土地がない	82
無期限活動停止中	83
孫を待ち構える	86
妻が好きでたまらない	87
おまえらが大切にしかたがない	88
イチゴのチョコレートはうまくない。	90
諸国民の中の正義の人	92
ほめられたくて文化干し	101

自作・ジ・エンド

麦わらの農夫然とした男は、畦畔に腰を下ろして、日照りの続く枯れた田んぼを眺めていた。

「いや、あいつは死んでねえよ」

国葬にしろだの聖和（ソニファ）式にしろだの国中が叫んでいた。メディアを通じて目にしているものがどこまでもディープなフェイクだと思えることもできる。職場に行けばあの人が殺されたことに関して誰も話題にしない。俺が聞いた（実際には目で読んだ）市民の声はSNS上を飛び交っていたものに過ぎない。

「爺さん、さすがにあんた悪い情報の拾いすぎだよ」

「あの人はね、特定秘密保護法をつくって、外国の特殊工作員が政府機関に夜間こっそり侵入して、施錠された金庫から特定秘密を入手するような事件を未然に防いだんだよ」

いまだき特殊工作員を送り込むほどの国に興味を持ってきている外国があるのかね。田舎もんはいつまでたってもこれだから間拔けな政治家が蔓延る。一票の格差がどうの、野党が共闘しないからなどと言われるが、一人区の奴らはどこまでも盤石で決まった顔しか目にしない。

実は死んでいないのではないか。俺もそんなことを考えたことがあった。あの人にも良心があるならば、あんな生活を終わりにして一からやり直したいと思うだろう。1年足らずで終わった一次内閣。短命だったことを叩かれたから、意地になって8年近くも続けてしまったのではないのか。

「あの人はね、集団的自衛権の行使を容認することで、悪うい中国やロシアからこの国をまもううとしてくれたんだよ」

「最近じゃ、戦争は自衛目的ではじまると言うよ」

爺さんは生温くなった「なっちゃん」ペットボトルのキャップを捻り、唇を尖らせる。俺はサントリー広報部の言葉を思い返していた。

「会の開催については、a b議員事務所から教えていただきました。多くの方が集まる会だとお聞きし、弊社製品を知っていただくよい機会と考え、無償で協賛させていただきました。いつからいつまでということに関してですが、16年については、弊社の担当者ですでに退職しましたが、協賛した事実があったということでした。17年から19年に関しては、詳細は言えないんですが、協賛しました」

あれだけ掻き回してくれた人が、個人的な恨みだけで手製の銃によって逝ってしまった。夫人は本当に辛いだろうよ。笑顔ばかりが記憶に残っている、仲よさそうな夫婦だったじゃないか。

爺さんは枯れた田んぼを見つめたまま立ち上がった。

「いずれにいたしましても、繰り返して申し上げますが、私も妻も一切、この認可にもあるいは国有地の払い下げにも関係ないわけでありまして」

不意に流暢に喋りはじめた爺さん、俺は面食らう。

「私や妻が関係していたということになれば、まさに私は、それはもう間違いない総理大臣も国会議員もやめるということははっきりと申し上げておきたい」

そして、畦道の向こうから、かつて見たショートカットの笑顔が歩いてきた。

コラージュ・ルポルタージュ

東京駅近くの小さな画廊、割といい頻度で山下菊二の作品展が開催されている。時折思い出したように「山下菊二」とSNSを検索すれば、その画廊の情報にぶつかる。そんな時は比較的仕事に余裕のある時期で、有給休暇をとってはふらふら足を運ぶ。

「ヘーさん、へをひれ、ぷっとひれ」

仕事で出向く機会などない千代田区、まずは農林水産省の食堂で鯨肉を食らう。汗して働く役人でも見物してやろうと企むが、意外とそれらしき人間よりカジュアルな男女が多い。腹が動き出したら便所へ向かう。人間は陶器から食べて陶器へ出すものだって。

東京地裁の傍聴抽選に並ぶ。中身はなんだったよかった。肝っ玉の小さい俺にギャンブルの趣味はないが、抽選で傍聴券を手にした時の快感はたまらない。柵で仕切られた法廷内の儀式的なやり取りは、無料で見られる芝居としては上等だ。裁判官が現われると礼ではじまる。儀式に順ずる少しの緊張感もまた一興。しかし、今回はどうやらハズレくじだったようだ。裁判官の注文通りに原告が淡々と話をするばかり。被告席は無言を貫き、なんの議論もなく幕が下りた。この訴えはまだ裁判に至っていないのだという。原告適格があるとかないとか、次回は三か月後。

不満を抱えたまま東京地裁を後にして、四〇分も散歩しながら画廊へ向かう。国会議事堂、皇居外苑、何度か歩いた道ではあるが、芝居小屋を想像するだけで飽きない。

山下菊二の作品は大きく二つに分かれる。あの小さな画廊では、前期の油彩と後期のコラージュを交互に展示していた。今回がコラージュ展だと知ると、どこか損したような気持ちになる。コラージュなどというものが本当に芸術なのかしらと訝っている。自分がまだ餓鬼だった頃を思い返していた。親父が買ってくる『週刊ビッグコミックスピリッツ』のコマを切り抜いて、いい加減な物語を再構築する。あの頃、そんな創造紛いが何より楽しかった。

陰鬱で不可思議、観るものを圧倒する山下の油彩。なぜコラージュせざるを得なくなったのか。切り貼りしてみたなら楽しかったという俺と同じ気持ちも少なからずあったのではないか。最近になってその切実な背景を知った。それは国立（くにたち）で開かれた、警察車両の並ぶ仰々しい展示会だった。

宿痾としての山下の脊髄性進行性筋萎縮症は、一九七〇年ごろから急激に悪化し、油彩制作を困難なものにした。ことばを奪われたに等しい状況で、山下は、戦時下での悪夢にうなされる日々が続いた。そのなかで手に入れた表現が、本作品にみられるカラージュであり、切り取られた数葉の〇〇こそ、BIB云々そのものである。

散歩を終えて、平日の小さな画廊にたどり着く。いつもの通り誰もいない真っ白な箱。半球形のオブジェに僅かな気配。壁三面に一五点程度のカラージュが並ぶ。箱の中ほどに立って目を閉じる。両の耳に手を添える。

「ヘーさん、へをひれ、ぶっとひれ」

囃しながら歩き出す幼少のわたし。

「僕は軍人大好きよ、今に大きくなったら、勲章つけて剣さげて：」

ものごころがつくと、大声をはりあげて、戦争ごっこに打ち興ずる少年として育ちました。

「女は穢らわしいから征伐するんじゃ」

ガキ大将が声をはりあげれば、その号令一下、集めておいた馬糞や石をいっせいに投げつけては一目散に逃げだします。道に迷って通りかかった農家の庭に、筵を日干しにしていた人のよさそうな老人が一人。近づこうと新聞紙をまたげば突然の大声にびっくりさせられました。

「生神様の天子様を踏みつけるとはなにごとだ！ 罰あたりめが！」

足元を見ると、白い馬にまたがった大元帥の写真が、靴先からのぞいているではないか。

「絵の勉強をするんだったら、東京にいかなければ駄目だぞ。学校にいかなくても、いろいろと独学をする方法もある」

駄目だということはわかっていながら、もう一度両親に泣きつきました。

「それならいっそ、中国大陸に渡り、パリを目指せばいいではないか」

母は肩からかけるようになった小さな布袋を作ってくれました。

「この袋の中に三社の土を入れて、肌身離さず持っていて、もし戦地で、難儀な病気などで困ったときに嘗めるとよいから」

子どもの頃は、本殿の裏で小便をするとちんぼが腫れると言いつつ用を足した。そのあたりをさけ、よさそうなどころの土をおしただきました。

「生きて帰ってこられたら帰っておくれ」

母は何故「死なずに帰ってこい」と言ってくれなかったのか。

《この部落は日本の憲兵隊によって宣撫されているので、徴発など一切の行為を禁ず》

老人が握る竿の小旗にはニホンノコトバが記されていました。それでも上等兵は一向に耳を貸そうとしないばかりか、その老人を殴る蹴るの暴行をくわえ牛や豚を掠奪したのでした。

「命をかけた行為とはなんだろうか。何のためにだったら本当に死ねるのだろうか」

殺しの日常が問いかけます。老人の死は、幼少期のわたしを感動させたヘーさんの勇気あるダイナマイト自殺を踏み越えたところの《死》というものを、突きつけました。

「そうだ、そのとうりだ！」

血糊でおおわれた大地の底からの声。わたしはか細い声で、あの絶対的な命令の軍隊では、どうしたって仕方なくやらざるを得なかったのだと、自分を弁護しようとします。

「おまえはその老人の行為を心の中の美しい出来事として心に留めておくだけで、人が殺されようとしているとき、自分は手も汚さずに救ってやろうなど考えるだけなら、最初から何もできませんと手を上げる」

小さい時から、天皇の赤子として恥ずかしくない生きものとなるよう教育されてきたのですから。

「もしおまえが本当に人間らしい生き方をしようと思うならば、おまえは他民族を圧殺しようとしている皇軍の手下になることを拒否することができるのか！」

手足を縛られた逃亡者の首より下が、くねくねと叩き込まれるように、その穴の中に土とともに搗き固められて、首だけが地表にぽつんと置かれたように埋められました。

「おまえがはっきりと拒否の行動をとることによって、どのような苦境に、そして死につながるということを知っていれば知っているほど、その決断には大変な勇気が必要とするのだ！」

その頭から、鼻を、そして耳を、順番に手渡しされる刀のように切れる兵器用シャベルで、この手で切り落とさなければならぬのだと思うだけで体内から消えてゆく気力とは反対に、反抗的な私の視力は、遙かな地平線を射竦めるほどに冴えわたっていて、その逃亡者の眼球の中で方向転換をして、絶対に許せない者に与える視線でもって、私の心臓を射ち抜いてしまっているだろうに：シャベルは打ち下ろされていた。

「適切な方法で行動にうつしたとしても、そこにはその行為が人間性に深く根ざしていればいるほど、大きく自己が犠牲にならなければならないということを、国家権力はお前に叩きつけるのだぞ！」

《天皇の軍隊》に魂を売りわたしたわたしは、そのような非道いことをしても、非道いことをしているとは思ふことのできない人間の姿をかりた生き物になっていました。

「そこでは戦場で対峙する敵との距離の遠い近いによって、勇気の度合いに差があるなどということを超えてしまった次元の、確固とした信念がなければならないのだ！」

がっくりと折った首の上から、馬の寝蓐がかけられ、その上に石油がふりかけられて火がつけられた。焼けぼっくりのようになった鼻の穴が「フー」と灰まじりの怨気を吐くのをわたしは見ました。

脂汗を垂らしながら画廊をあとにする。嗚呼、明日にはまた労働が待っている。農地を耕すトラクターは有事になれば戦車へと生まれ変わった。化学肥料の開発によって空気中の窒素を固定化することを可能とし、火薬が生まれた。ドローンだって四つ足のロボット犬だって次々に死の商品へと姿を変える。この戦争しやすい仕組みについて考えながら、明日の労働を拒否する理由を探っている。

特別軍事作戦と呼ぶことにしたウクライナ侵攻が続く。カメラを前にした各国の老人たちは戦火を絶やさぬよう油を注ぎ続ける。世界的な軍事振興がはじまる前、一席ぶったプーチンの言葉に二つほどお気に入りの箇所がある。

世界覇権を求める者たちは、公然と、平然と、そしてここを強調したいのだが、何の根拠もなく、私たちロシアを敵国と呼ぶ。確かに彼らは現在、金融、科学技術、軍事において大きな力を有している。それを私たちは知っているし、経済分野において常に私たちに対して向けられている脅威を客観的に評価している。そしてまた、こうした厚かましい恒久的な恐喝に対抗する自国の力についても。

ロシア語なんか《スパシーバ》と《ニエツト・ヴァィニエ》しか知らない。プーチンの声を読み解けるはずもない。日本放送協会のニュースサイトを信用しているのだよ。

しかし謙遜する必要はない。アメリカは依然として偉大な国であり、システムを作り出す大国だ。その衛星国はすべて、おとなしく従順に言うことを聞き、どんなことにでも同調するだけではない。それどころか行動をまねし、提示されたルールを熱狂的に受け入れてもいる。だから、アメリカが自分のイメージどおりに形成した、いわゆる西側陣営全体が、まさに「うその帝国」であると、確信を持って言えるのには、それなりの理由があるのだ。

列車に揺られ、明日の労働を拒否する理由がどこかに隠されているのではないかと、先人たちの言葉を反芻する。労働はできる限り拒否したい。そいつは面倒くさくて仕方がない。休み明けにやらなければならぬ労働は決まっている。やってやれない労働ではない。そして恵まれたことに正社員だ。そして恵まれたことに日本の平均年収よりやや高い。上の中ではないが、中の上だよ。

「そうだ。おまえは恵まれている」

「そうか。おれは恵まれているか」

老若男女、LGBTQ+、VWXYZ。そんな中で誰よりも好待遇とされる中年男性。なにより忌み嫌われる中年男性。老人が起こした戦争によって、若者たちを戦場へ送り込む中年男性。

話に聞くばかり、資料で読むばかり、映像で見ると臭いのないの出来事が目の前を通り過ぎていく。「おまえは恵まれている」と、念を押されて押し黙る。俺には労働の面倒くさを上回るほどの重荷が背負わされていない。

「何が社会貢献かって、会社が儲かって納税することが一番の社会貢献なんですよ」

目をキラキラさせて述べる役員ども。あのひとたちはなんでそんなことをしゃべりはじめたのだろう。こちらからなにを尋ねたわけでもなかった。社会に貢献することが大人として素晴らしいのだという発想がある。金儲けをしたいただけではないのだという主張が必要である。そして、そいつが俺のような輩に労働意欲を掻き立て、《恵まれている》と納得させるに好適だと考える。社会貢献のための労働、解放のための軍事振興、前置きしなければ行動が起こしにくい時、その前置きが間違えであることを誰より本人が理解している。

嗚呼。それにしても労働は面倒くさい。俺にも気の利いた前置きをくれよ。最近では節々が傷んで仕方がない。一日立ち仕事はしんどいと言っていたコロナ渦以前。近年では一日座り仕事でしんどい。休日には地面を踏みしめながら買い物へ出向く。歩くことがレクリエーションだと思えるようになったのはいつからだ。「散歩に行こう」などと言われて心躍らせる餓鬼はいない。手をつないで女と歩くように

なっからかしら。花を見るためだけ、電飾を見るためだけ、そんなためだけに街を歩くことも悪くないと思うようになったのは色恋がきっかけだったような気がする。

なにより忌み嫌われる中年男性となった今、女と肩を並べることもなく、むしろ孤独に《歩く》を嗜むようになった。折角の有給休暇だというのに四〇分も歩き通すという体たらく。こいつを本当に休暇と呼ぶのか。裁判傍聴だってレクリエーションだったか。美味くもない鯨肉になんの愉悦を得たか。

帰途の車窓に西日が差しはじめる。俺は有意義な有給休暇を過ごすことができたのか不安で落ち込む。明日から再開される労働を拒むための心地よい前置きがまとまらない。気づけばまた労働の日々に追われているのだろう。そして、三か月もすれば、有給休暇でも申請しようかしらなんて考えは始める自分が目に浮かぶ。

東京駅近くの小さな画廊、割といい頻度で山下菊二の作品展が開催されている。あの陰気臭い油彩やコラージュが、わけも分からず俺を惹きつける。俺は決して優れた観覧者ではない。あの白い箱には、もう一つ重要なポイントがあった。監視カメラと思われる半球形のオブジェが置かれている。ただ一人、箱の中ほどに立って目を閉じる。両の耳に手を添える。俺はそのカメラに写り込むことでわずかな快楽を得る。その先にある、そっと覗きこんでいるような意地悪い視線を感じているとき、あれは確かにレクリエーションだった。一時だけでも解放されたような気分になれるのだ。

チリコンカーン

戦後、飢える列島に再来した黒船は、脱脂粉乳と小麦、そして給食を置き土産にして帰っていった。

教科書にはそう書かれていたはずだが、海の玄関口であるこの都市には、いまだに中学校給食が存在しない。子供たちにスティグマを与えないということが完全給食の原則であるならば、ハマ弁という名の冷や飯はそれに値しない。

そして、献立表が届くとはじまる論争。

「頼むから週二はハマ弁で堪えてくれ」

親は眉を垂らして俺を拝む。

「カレーは絶対外してくれ」

俺は毅然とそれに対峙する。

「カレーが嫌なのか？ 普通、盛り上がるだろう？」

「冷たいカレーなんて誰が食いたいと思う？」

飯が冷めている問題は、1960年代、当時の文部省『学校給食のしおり』においても、センター方式の給食問題として指摘されている。

「教室に電子レンジがあればいいのにな」

ハマ弁に至っては冷めているのではない。冷やしているのだ。食中毒が出ては困る大人たちがいるから。

「コンビニだって弁当は温めてくれるよ」

昼休みは45分程度、そのうち昼食の準備時間が5分、実際に食事する時間が15分程度の学校がほとんどだ。電子レンジ案が通過するなら、各教室に5台は用意してほしい。

「チリコンカーン？」

戦後の統治者たちは、コメの食べ過ぎが栄養的な偏りの原因だという説を広めてGo Home Quickly。その後、この国の給食に立ちはだかった最大の壁が当時の大蔵大臣池田勇人だった。

「所得の少ない人は麦を多く食べ、所得の多い人は米を食うというような、経済の原則に副ったほうへ持っていくたい」

所謂「貧乏人は麦を食え」発言である。そして、この都市では「子どもは冷や飯を食え」とされている。確かに餓えの不安はない。未だ昼休みになると姿を消す子どもがいるこの国では、冷たい飯でも食えれば文句が言いにくい。

それでも、そのまずさが問題となって、給食廃止論が持ち上がったことだってあるという。

「政府は子どもの食事まで強制するのか。まるで共産主義と同じではないか」

どこか論点がずれている。

戦後の黒船がこの国を統治していたころから、共産主義的な理想と一線を画し「自立した個人」を育成するためとして、無償給食の制度化は否定され続けている。

「いまなお欠食児がいるのは政治の責任」

新聞で目にした『岩手の辺地にかおるスズラン給食』の報道が、心ある首相の胸を打つことだってあった。全国の僻地まで温かい給食を届けるべく、予算4億円を緊急支出することを決めた。

毎年1000ヶ所以上の子どもの食堂が拡がり続ける昨今、菊の花だけで2000万円、総額37億円の葬式だ。キャリーオーバー中の宝くじでも当たったか。

俺たちは行動する。中学校の正門にタテカンが現われた。水玉のポップな看板には「ハマ弁阻止」と書いた。

母は少年のように爺さんと遊ぶ

2016年03月某日、

「次私、また私、はい私、UNOっ！」

リビングルームに顔を出せば、母は必死の形相。何が楽しいのか爺さんと一対一のカードゲーム。スキップ、リバース、スキップで、ワイルドドロー4。

「リバースはまた私なのか？」俺は母に問う。

「じゃないと役札の意味ないじゃない」

「ママは強いなあ」

爺さんは柔和な笑みで呟く。そして、億劫そうに腕を伸ばし、震える指先で山札から四枚のカードを引いた。

「親父い、私、あんたのママになった覚えはないよ」

何度聞いても母の「親父い」には違和感がある。

母は少年のように爺さんと遊ぶ。きっかけはある著名人らの言葉だった。それは本に書かれていたものであるとか、テレビやラジオで聞いたものであるとかではない。たまたまSNSのタイムラインに流れてきた呟きであった。

知っている人が亡くなると、せめてハグだけでもしておくだったと後悔するが、生きている人にはなかなか言い出せない。

@yoshimuramanan

2016年03月14日 19:37

「私はやるよ」

母はスマートフォンを投げ捨てて立ち上がった。そして、布団にくるまっていた爺さんを無理矢理抱え起こし、その骨と皮ばかりの頬に肉厚な頬を寄せた。続いて、痩せ細った老体に丰满な胸を押し付けて両腕を巻きつける。爺さんは驚いて「ホイ」だの「ヤイ」だの声をあげる。あらん限りの力で母を振り解こうと試みるが、爺さんは直ぐにあきらめ脱力した。

「まだまだ死にやしないから」

母はようやく落ち着きを取り戻し、腕を解いた。北風と太陽の話と思う。ちょっと違うか。

美味しそうな手作りシフォンケーキにおしっこする夢で目が覚めた。

@makotoaida

2016年03月15日 05:20

「本当は馬鹿な息子が欲しかったんでしょ」

母は爺さんを問い詰める。爺さんは布団にくるまったまま、じつくりと言葉を選んだ。

「そんなことはない。確かに、おまえの次は男の子がいいかなとも思ったよ。でも、こればかりは授かりもんだからな」

「やっぱり、そうなんじゃん」

「娘と息子、両方の親をしてみたいと思っただけのことよ」

母の息子化が進んだのはそれからだ。俺がまだ幼かった頃のことを思い返し、それを再現する。

「遊ぼうよ」

布団をバンバン叩く。爺さんは眉を顰めて半身を起こした。

「何がしたい？」

遊びたい一心で声を出してみても、幼い餓鬼は何をしたいのか分からない。家の中で親父と遊ぶ手段
といえば、相撲に、チャンバラ、トランプ／UNOに、双六に。

「相撲するよ」母は無茶を言う。

爺さんはため息をついた。それでもこの国の畳に布団の文化は素晴らしい。親子で相撲をとるために
なくてはならない。ベッド文化であったなら親子相撲は成り立たない。慎重深いこの国の親子はスキン
シップする術を無くしてしまう。

「よし、やろう」

思いがけずやる気を示した爺さんは、拳を突き出し、親指を立てた。

「指相撲？」

母は眉を顰めつつもその手を掴み、同じように親指を立てた。俺は杓文字を掲げて行司を務める。

「はっけよい」

組まれた拳に力を込められる。

「のこったあ」

途端に拳が暴れだした。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇っ」

爺さんは唇を突き出して一気にテンカウント。まさかの勝利。

母は呆氣にとられたような顔から、不意に涙を浮かべて目尻を垂らした。

「私は親孝行でしたか？ 子供を一人しか産まない女なんて、少子化のこの世界じゃなんの足しにもな
らないなんて言うのもあるけど、私はあんたにとって自慢の娘ですか？」

「俺だっておまえしか授からなかった」

母は首を傾げる。

「で、自慢の娘なのかよ？」

「そりゃ、もちろん」

「私、息子を産んだよ」

「そうだな。嬉しかったよ」

「じゃあ、もっとこいつと遊べよ」母は俺を指差す。

「もう身体が言うことをきかん」

爺さんは再び布団に潜り込む。

「私たちは二世代で二人しか子供ができなかったんだね」

爺さんからの応答はない。ただ母を憐れむかのように天井に向かって目を細めた。ひょっとしたら眠い
だけなのかも知れない。年寄りにはあまり眠らないものと聞いていたが、爺さんはよく眠る。俺はその都
度、寝顔を見下ろしながら爺さんの見る夢を想像した。

僕は才能のある人しか好きじゃない。それが例えダメ人間という才能だったとしても。才能は自覚して
活用して初めて才能になる。

@ishikawakoji

「親父い、あんたの取り柄ってなによ？」

時折、思うことがある。母は爺さんに問いかけるフリをして、実は俺に問いかけているのではないだろうか。

「指相撲、か？」

俺は渴いた笑いを漏らす。

「一度勝っただけだろう。なんか、これがあるから俺です。これだけは譲れません。なんてものは無いわけ？」

爺さんが口を開きそうになると、母は先回りする。

「私たちだとか、つまらないこと言わないで頂戴よ」

爺さんは眉を垂らして視線をこちらに向ける。そこで俺は助船を出航させた。

「爺さんは俺の想像力を掻き立てる」

母は眉を持ち上げる。

「あんた、たまには面白いこと言うじゃない」

その満足げな表現に母の面影を見る。母が爺さんの息子にかなれるわけがない。

「そのシミだらけでブツブツだらけの顔がいい。薄い毛が静電気で立ち上がっているところもいい。今となっては骨と皮ばかりなのに、人殺しが賞賛される戦争事態を体験しているところが凄い」

そんなこと口にしていいのか。自問する前に発声を試みた。

「人殺しなんて威張れるもんじゃない」爺さんは言う。

「偉そうに言うな」俺は言う。

「偉そうか？」

「年寄りってのは、それだけで何を言っても偉そうなんだ。気をつけな」

母は、俺と爺さんのやり取りを好ましく眺めた。

「若いつてのは大した取り柄だ」

爺さんの言葉はやはり偉そうだ。そして、俺は問う。

「爺さんが今もし若かったら、何がしたい？」

「やりたいことは沢山あるさ」

「例えば？」

「そうだな。まず焼いた貝が食いたい」

「貝？」

「蛤、蛸、栄螺。焼いてチョロツと醤油を垂らしたものだったら浅蜷でもいい」爺さんはゴクリと唾を呑み込む。「嗚呼、歯の無い骨皮筋太郎でも食い意地が張れるもんだ」

「爺さん、貝が好きだったのか？」

「最近テレビで見たせいだろう。栄螺だったよ。網焼きにした巻貝に醤油をチョロツと垂らしてさ、グツグツいい出したら、串で刺してクルクルと緑色した内臓の先まで巻き取るのよ」

俺はグロテスクなそれを思い浮かべる。貝の内臓など好まない。しかし、その硬い身をしゃぶりながら日本酒を舐めるのは悪くない。

「しかし、爺さん、あんたは酒を呑まないだろう」

「炊き立ての白米が欲しいね」

「貝はおかずになるのか？」

「ならないか？」

「ならないな。牡蠣フライだって、俺は豚カツの添え物だと思っている」

俺は新宿さぼてん『カキフライと健美豚ロースかつ定食』を思う。

「若いつてのは大した取り柄だな」

先ほど、古館さんのニュース・ステーションで、ドイツのワイマール憲法の教訓「緊急事態条項」の危うさ。たいへん興味深く見ました。「ドイツのワイマール憲法がいつの間にかナチの憲法に変わっていた。あの教訓に学んだらどうかね」という麻生発言が、鮮明によりがえりました。(((;.T.)))

@sasakikensho

2016年03月18日 22:56

「今夜の古館伊知郎は攻めてたね」

母はうつとりする。お陰でこっちはすっかり目が冴えてしまった。緊急事態条項の危うさ、古館伊知郎の気迫も然ることながら、ブーヘンヴァルト強制収容所で山積みされた死骸やら、餓死寸前の人間たちが裸で行進する姿やら、そんなものを二二時の地上波で流されるとは思わなかった。

「UNOでもするか」と言い出したのは爺さんだった。

母の息子化に伴って爺さんは日毎活力を取り戻しているようにも見える。時折、俺は爺さんの死に際を思い、どのように立ち振る舞うべきか思案する。しかし、どうやらそれはまだまだ先のことになりそうだ。

母はケースからカードを取り出し、慣れた手つきでシャッフルしはじめた。寿司でも握るようにヒンズー・シャッフル。カードを二つに割ってリフル・シャッフル。そして、七枚ずつカードを配り、山札を中央に置くと一番上のカードを引いて表に向けた。赤の6。数字の下には9と見紛わないよう横線が引かれている。

前回、爺さんに勝ったからであろう、母は誰に断るでもなく一枚目のカードを場に差し出す。

「古館伊知郎、三月までだっけ？」

赤の2。

「キレッキレだったな」

時計回りに俺は赤のリバース。「おうっ」と爺さんは小さく声を漏らす。

「緊急事態条項だっけ？」

半時計回りになって母は赤のドロ―2。「おうっ」と爺さんは再び小さく声を漏らす。

「特定機密保護法を通して、安保法案も通して、万能感で脳味噌沸き立ってるんだらう」

爺さんは山札から二枚を引いて黄のドロ―2。俺は鼻を鳴らす。

「まわりが騒ぐから尚更ムキになってんのかもな」

俺は山札から二枚を引いて黄の8。

「自民党草案の緊急事態ってさ、外部からの武力攻撃とか、大規模な自然災害とかだけじゃなくて、もう一つ内乱ってのも入ってるじゃない。あれ引くかかるよね。オウムみたいなカルトを想定してるんならいいけど、SEALDsみたいな子たちも封じ込めたいってことなんじゃ、な、い、の？ 緑っ」

母はワイルドドロー4を叩きつける。「ひんっ」と爺さんは雌山羊のような声をあげた。

「二〇世紀の民主主義憲法の典型だって言われたワイマール憲法でも、『緊急命令発布権』一つでナチの意のままになっちまったってんだからな」

爺さんは山札から四枚を引いて緑のスキップ。母は緑の5。爺さんは緑のドロ―2。俺は二枚を引いて緑の7。しばし無言の勝負。母は青の7。爺さんは赤の7。俺は赤のリバース。話題の多くは古舘伊知郎の受け売りだ。そうそう御託は並ばない。

それでもどうしたって理解ができない。

「あいつらは一体何がしたいんだ？」

「どんだけ嫌われても、政権取るからには一度くらい独裁してみたいものなのか？」

「嫌われるつつつても内閣支持率って四割くらいあるわけじゃない。国会議員の選挙投票率が五割くらいだとしてよ、内閣支持してますって言い切るくらいの奴らはやっぱり投票に行くんでしょう。大した数だよな」

「UNOっ！」

爺さんが声を裏返した。俺と母は肩を揺らす。いつの間にやら爺さんの手には最後の一枚。俺は恐る恐る黄の3。母は赤の3で色の変更を試みる。すると、爺さんは顔をクシャクシャにして最後の札を場に捨てた。それはワイルドカード。

「ええっ、それってありか？」

俺が声をあげれば爺さんは首を傾げる。

「ワイルドカードで上がっちゃいけないんじゃないかった？」

「駄目なの？」母も首を傾げる。

「だって核爆弾みてえなもんだろ。否応なしにハイ終わりっ」

「日本国憲法も核兵器を禁止してるわけじゃないらしいよ」

母は不敵な笑みを浮かべる。不敵というより不適。すると『核兵器』という単語に爺さんの反射中枢が応答する。

「核武装して地球をぶっ壊すくらいの覚悟があるなら、自衛官全員で丸腰になって腹踊りでもしてみせろってんだってんだっ」

俺と母は肩を揺らす。そして、荒ぶる爺さんへ恐る恐る視線を運んだ。

「爺さん、あんた総理大臣やんなよ」

「親父い、あんただったら緊急事態条項もありかと思うよ」

爺さんは、そのシミだらけでブツブツだらけの顔を、今まで無いほどしわくしゃにして頬を赤らめた。薄い毛はますます立ち上がる。

あれ？

俺は目を疑う。逆立つ薄毛は静電気のせいではなかったのか？ たまに耳とか鼻の穴とか自在に動かせる奴いるじゃない。俺は爺さんの頭皮に目を凝らした。

母は手元に残った札を広げて溜息一つ。

「もう一度聞くけど、親父には、これがあるから俺です。これだけは譲れません。なんてものは無いわけ？」爺さんが口を開きそうになると、やはり、母は先回りする。

「私たちだとか、そんな悲しいこと言わないでくれよ。絶対」

俺は想像の中で網焼きにした栄螺に醤油をチョロツと垂らす。

「大丈夫。爺さんはいつだって俺の想像力を超える」

グツグツいい出したら、串で刺してクルクルと緑色した内臓の先まで巻き取る。硬い身は俺のもの。柔らかでグロテスクな内臓は爺さんのもの。そして、その両端から恋人さながらに齧りついたりもするのだ。

名前を付けて保存

肛門に違和感を覚え、風呂で尻を洗っていると指先に真珠のような滑らかな触感とともに僅かな痛みが走った。いぼ痔という言葉が浮かんだ。その翌日には北のミサイルが発射された。俺が肛門に真珠を見つけた時、首相はその動向を見守るべく官邸に泊まっていたかもしれない。

これが本当にいぼ痔であるのかは知らない。今のところ真珠と呼ぶことにする。なによりはじめてのことなのだ。肛門の指の届くエリアに滑らかな異物が存在する。いぼ、おでき、ふきでももの、しこり、腫瘍。それが俺の組織からなる隆起物であることは確かだ。腫瘍という言葉が浮かんでふと不安になる。良性、悪性、肛門に悪性腫瘍ができることなんてあるのかしら。

いぼ痔と検索すれば気に入った情報に頼ってそれをそれと納得させることができるかもしれない。病院に行けば病名が確定して俺は患者として治療を受けることができるだろう。センセイとは名前を確定することができるニンゲンのことを言う。

小学生時分の嫌な記憶がある。担任のセンセイにとって、俺のされている行為はいじめだった。俺はどこか抜けていたのかもしれない。最近の言い方をすれば発達障害かしら。当時、そんな障害はこの国の社会に浸透していなかった。少なくともセンセイは俺に発達障害という名前をつかうことはなく、俺はいじめられっ子に分類された。それによってまわりが多少気を遣うようになったような気がする。俺自身いじめられっ子という認識が薄かったから、正直なところセンセイが名付けたことによる効果はあまり実感していなかった。グレーゾーンのいじめられっ子がクラスにいる。センセイは先手必勝を狙ったのだろう。俺をいじめている親分格とされたのは、恐らくテツヲ（仮）とヤマヂ（仮）。そのほかに

も二人に追従するやつらや一步引いて笑っている不特定多数がいたから、そいつらにいじめっ子という名前がつけられることはなかった。テツヲなんかとは放課後二人きりで遊んだりすることもあったんだよ。あいつの家に遊びに行けば派手なお母さんがお菓子をもって出迎えてくれる。テツヲはいつまでもお母さんのことをママと呼んだ。あの時、名前が付いたのは俺だけ。俺をいじめられっ子と認定したセンセイの顔を覚えている。

思考は散文的で、頭の中にいくつものレイヤーが出来上がる。俺は一体何を考えていたのか。北のミサイルが日米の軍事ビジネス発展させるためのドラマトゥルギーだというお話だったかしら。肛門の真珠が疼くから今日のところはペンを置く。否、名前を付けて保存する。

支流

一級河川。暮らしや産業の発展にとって欠かせない川。国土交通省や都道府県が管理する川。美しく立派な川である必要はない。鯉や亀などの外来生物ばかりを馬鹿デかく育む川であろうとここ早濑川は一級品だ。

俺は紀之と二人、そんな一級河川に沿って自転車を走らせている。

「あどどのくらいだろうな」

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

川幅は狭く、晴れた日の水量は少ない。川底に溜まったヘドロのお陰で輝きはない。それでも水の流れは緩やかで、臭いの割に透き通っている。川辺に蔓延る雑草以外にも生命の気配がする。泥の色した太い鯉、誰かが放ったミシシビアカミミガメ。そして、欄干にもたれる冴えない男。理由も無く川を見下ろしたくなる気持ちはよく分かる。つまらない景色が延々と流れた。

「腹減ったな。何か食いたいもんあるか？」

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

源流は雨水、生活排水、工業排水、そいつらの受け皿となる側溝や暗渠だと聞いた。

「赤潮って勉強したか？」

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

一級河川は、窒素やリンを大量に含んだ汚水を東京湾へと流し込む。海水温の上昇と相俟って真っ赤な海をアヴァンギャルドに演出する。嗚呼、一級品。俺は顔をしかめて首を振る。それでも悪い気分はしていなかった。

「おまえ、さっきから何言ってるんだ？」

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

クソ餓鬼が。

一時間ほど前には、早濑川親水広場に架かるセンター橋の欄干から鯉を見下ろしていた。丸々太ったそ

いつらにアライ君などと名前を付けてはヘラヘラ笑う。そして、ハンドタオルを巻いた三五〇ミリリットルのアルミ缶を叩いた時、青い看板が目についた。

『一級河川・はやぶち川』

その下には「河口から一・四キロメートル」と記されていた。川の距離は出口から測るものなのか。「河口まで一・四キロメートル」と記したほうが自然じゃないかしら。そんなことを思いつつ、意外と近いじゃないかと川下へ目を細めた。

「そんなぼっちで海に出るのか？」

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

おまえは面倒なサイクリングになることを、はじめから予見していたのだろう。川治いを進む単調な道。一・四キロメートルとはこんなに長いものか。紀之は自転車の速度を緩めた。

「疲れたか？」

「なんかいるぞ」

おまえは川治いのガードレールに自転車を寄せて首を伸ばす。なんてことはない。カメが一匹、岩の上で甲羅干ししていただけだ。

「でっけえミドリガメ」

「アカミミガメな」

「赤耳？」

「そうだ。耳んところが赤いだろう。アメリカがペット用に運んできたんだよ」

最近フォーカスが合いにくくなってきたボンコツの目には、実際に赤耳を確認することはできなかった。それでもこんな川にいる大型のカメなんて無責任に放たれた外来種に決まっている。

「ホントだ。ちょい赤い」

素直なリアクションが心地よい。

「祭りの出店で亀すくいなんてのがあるだろう。あのチビを放っておくとこんなになるんだよ」

「亀すくい？」

「知らんか？ 金魚すくいの亀ヴァージョンだよ」

「スーパースクールすくいならやったことあるよ」

「そんなもんすくって何が楽しいんだ」

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

都合が悪くなると直ぐそれだ。頭をひっぱたきなくなる気持ちでグッとこらえた。

「あいつは何だっけ食うから気をつけろ。下手に食いもんあげると無尽蔵に増えるからな」

「なんでもって？」

「草なんかも食うけど、カルガモの雛とかハトまで食うらしいぞ」

「ハトお？」

「川辺で水を飲んでいるハトを襲って食うんだよ。理科で教わらないのか？」

「あんなのろいカメに、ハトが捕まるわけないだろう」

俺たちはしばらくカメを眺めていた。時折、スズメが降り立つこともあったが、すっかり甲羅の干さ

れたカメは、肉も干からびてしまったのではないかと思うほど微動だにしない。野鳥に喰いつくカメを紀之に見せてやりたいが、そう都合よくはいかない。

紀之はカメを眺めながら、またいい加減なおっさんが適當なことを言ってやがると思っているだろう。俺のためにも頑張ってくれ。カメよ。

「ハトって、うまいのかな」

「羽まで丸ごと食うってんだから、ちょっと気が知れんな」

「うまくないもの食って、石みたいな甲羅背負って、岩の上でジッとしているのか」

「ハトを食うカメと、ハトに食われるカメ、どっちがいい？」

「俺がハトならカメなんかに食われない。鳥いいじゃん。飛べるし。虫とか食いたくないけど」

「ハトはマメ食うんじゃねえか」

「ならいい。鳥になるなら虫食わないやつがいい」

「腹減らないか？」

「Lチキ食いたい」

「なんだそりゃ？」

「ファミチキでもいい。コンビニの唐揚げだよ」

「おまえ、こんな話ししてる時に鶏肉食うのか」

「カメも悪くない」

コンビニを求めてチャリンコを進める。海が近づいてきているのだろうか。走りはじめた頃と比べれば水嵩は増し、川幅いっぱいには広がる水の悪臭はいくらか和らいでいる。

橋の向こうにスリーエフの看板を見つけた。ホットスナックに唐揚げは無いらしい。山賊焼きなるチキンの串を二本、俺は発泡酒、紀之はコーク・ゼロ。大して肉などついていないくせにカロリーを気にするのか。

「黒の方が格好いいだろう」

「そんなもんか。」

「今日は俺のおごりだ」と、主張しておく。

コンビニ袋を前カゴへ放り込み、川辺に戻る。わざわざ臭い風を吸いながら鶏肉を食う必要もないが、せつかくのサイクリングだ。川の流れや外来生物でも眺めながら飲み食いしたいではないか。川の両脇には雑草が蔓延り、整備された土手があるわけではない。俺たちは仕方なくガードレールに腰掛けた。

その日二缶目のブルタブを鳴らすと、川面が大きくうねりはじめた。目を疑う巨大生物の影。街外れの屈曲な川沿いだ。ニンゲンを除けば、野良犬以上に大きな生物と出くわすことを想定していない。鼻から脅かしてやろうという魂胆だったのだろう。あの女もまったく性格が悪い。そして、一匹と言うべきか一人と言うべきか、半人半魚が跳ね上がった。

突然のことに紀之は目を剥いて大声を上げる。全身を硬直させて、山賊焼きとコーク・ゼロを高く放りあげた。俺だってさすがに驚いた。全身の穴という穴をおっぴろげて野太い声で吼え散らかした。それでも煌めく魚体に目を細めれば、自然と口元に半笑いを浮かべていた。

女は身体を捻ると、高飛び込み選手さながら瀏へとノースplash入水。紀之は人魚との遭遇が初

めてだったようだ。カメがハトを食うどころの騒ぎではない。女は川面から首だけ出して、俺に小さく微笑んだ。

「やっぱり。力人じゃない」

二〇代の頃がフラッシュバックする。

「随分久しぶりだな。晴美」

紀之はガードレールに掴まって恐る恐る川を見下ろした。

「何その子？ あんた、ついに誘拐したの？」

「人聞きの悪いこと言うな」

俺が鼻を鳴らすと、紀之は唇を震わせながら目一杯に強がった。

「この俺が誘拐なんかされるわけ無いだろう」

「あら、随分可愛い子ね」

何年ぶりだろうか。まだ三流大学に在籍していた頃、少しの時間を共にした。晴美は半魚、檻樓アパートに同棲とはいかない。若者らは暇を持て余し、寄り集まってあり余る時間を潰す。親の仕送り、講義をサポートするアルバイト、安い学食、学生には金がある。アルコールは解禁され、肝臓もまだ柔軟だ。夏場になれば、河原に足を運んで花火やバーベキューに興じた。ヒト付き合いが得意でなくせに孤独を愛することができない。馴染めないながらも集団に紛れていることで得られる安心感がある。そして、居心地が悪くなれば、缶ビール片手に集団から離れて川岸に立った。

はじめてその姿を目にした時、そりゃ随分驚いた。それでもワニのように四つ足で襲ってくる心配はない。何よりその姿は美しく、その場から逃げ出す理由はなかった。冴えない日常に目を奪われるような女が現れれば、たとえ半魚であれ、黙って見過ごすわけにもいかない。

しばらく密月が続いた。河原の大岩に腰かけて、歯の浮くような甘い言葉を交わしたこともあった。それでも、あいつは水棲生物だ。学生生活を終え、あの土地を離れることが決まれば、別れを選んだ。

いつまでも半魚人と付き合っていられない理由は他にもあった。なにせ下半身が魚体である。やっぱり体外受精なのかしら。人魚を人生の伴侶とするなら、生涯を童貞で過ごす覚悟がいる。二〇歳を過ぎても女性経験のなかった俺にとって、それはとても酷な選択であった。

「人魚なんだよね？」

紀之の震える声で青春時代から目を覚ます。俺はあいつの放り投げたペットボトルを拾い上げ、自分の山賊焼きと一緒に手渡した。

「そうだな」

晴美は甘い笑みを浮かべる。

「人魚はじめて？」

紀之は小さく頷いた。

「理科の授業で習わないのか？」

俺の問いに人魚のトーンは下がる。

「せめて社会科にしてくれる？」

「近年、世界中で急激に増殖しております」

俺の悪のりに、紀之はミシシピアカミガメを思い出したのだろう。

「特定外来生物？」

「入れない、捨てない、扱げない」

晴美は頬を膨らませた。

「ちょっと、ヒトをミドリガメみたいに言わないで頂戴」

「アカミミガメは野外で無茶苦茶に繁殖しないから、まだ特定外来生物ではないのだ」

「どうでもいい」

晴美は水面から身体を伸び上がらせると、怒った様子で拳を腰にあてた。所々泥にまみれた身体ではあるが、臍のなくびれた腰回りは今でも魅力的だ。紀之は山賊焼きに齧りつくと、次第に目の前の人魚に慣れてきた様子で、仄かに顔を赤らめる。

「おっばい、ホタテなんだね」

「当たり前でしょ。人魚なんだから」

「アワビより可愛いじゃねえか」

晴美は藪の中に落ちた山賊焼きを見つめている。俺はそいつを拾い、川へ放った。晴美はイルカの曲芸さながら尾鰭を使って軽く伸び上がる。

「ニンゲンの食べ物って、久々」

両手で肉をキャッチするとそれを勢いよく食べる。俺はその姿に眉を顰めて発泡酒を呷った。

小腹が満たされ、再び自転車漕ぎ進めた。

「ところで、あんたたち何処向かってんの？」

「ただのサイクリング」

「河口に行くんだよ」と、紀之は付け足す。

「河口って、早瀬川の？」

併泳する晴美は少しだけ前に出て、そんなところに行ってしまうのだという目で俺の顔を窺う。男のマロンだと言いかけたところで口を噤む。対岸で少女が手を振っていたから。

「人魚ちゃん」

柔らかい髪を揺らす少女は驚く様子もなく満面の笑みだ。晴美もそれに微笑みで答える。最近はこの辺りに定住しているのか。

「人気者だな」

「そうよ。人魚は人気者。力人が教えてくれたんじゃない」

「そうだったか？」

そうだった気もする。俺たちが出会った頃、晴美は汚い川でビクビクしながら情けない表情を浮かべていた。人魚なんて女の子の憧れなんだから、もっと自信を持って優雅に泳ぎなよ。そして、全裸だった晴美に、乳首の無い貧乳はホタテで隠したほうがいいと貝殻を与えたのも俺だった。学生当時、和風居酒屋でアルバイトをしていた。ホタテの貝殻ならゴミ捨て場からいくらでも拾えた。

一・四キロメートルが読み間違いであったことには、さすがに気づいている。一四キロメートルと書かれた標識に、何処かの馬鹿が嘸み終えたガムでも貼り付けたのだろう。

晴美は顔を顰めながら川面に浮かぶポリ袋を拾い上げ、河辺に投げ捨てる。そして、息を切らす俺に尋ねた。

「あんた、まだ足場売ってんの？」

「は？ 何でそんなこと知ってんだ？」

目を丸くする俺の隣で、軽快にペダルを漕ぐ紀之は首を傾げた。

「アシバってなんだ？」

「私にはあんまり縁がないものね」

「ってか、力人、働いてんの？」

「当ったり前だろう。パチプロだとも思ってたか？」

「パチプロってなんだ？」

なんでもねえよ。

「で、晴美は何でそんなことを知ってんだよ？」

「あんた、別れ際に足場を売ることになったって言ったじゃない」

「で、アシバってなんだ？」

「私にはあんまり縁がないもの。よっぽど私に愛想つかしたんだなって」

晴美は眉を垂らして口元で笑う。

「ってか、力人、働いてんの？」

「当ったり前だろう。パチプロだとも思ってたのか？」

「パチプロってなんだ？」

なんでもねえよ。

「で、アシバってなんだよ」

こんな退屈なサイクリングでも紀之は愚痴一つこぼさずペダルを漕ぎ続けた。晴美は優雅に泳ぎながら、時折、川底に手を伸ばして何かを口へと運ぶ。タニシだろうか。そいつで頬を膨らませては口の中でコロコロと転がした。

再び対岸に手を振る人影、また人魚ファンの女の子かと思えば背中を丸めた爺さんだ。

「元氣？」

爺さんはボブルヘッドのように首を揺らす。

「知り合いか？」

「あの子非道いの。小さい頃よく私に石を投げてきた」

俺は困惑する。思えばあいつの容姿は俺が記憶していた頃とまるで変わりが無い。

「おまえ、いったい何歳なんだ？」

「鯉って、二〇〇歳以上生きることあるってね」

晴美は飛び跳ねて笑う。

「おまえ、鯉だったのか」

「ところでこの子はなんなの？」

そいつを話せば長くなるが、時間はいくらもあった。都合の悪いところはなるべく端折りたい。俺た

ちの出会いはいは曖昧に。妙に紀之のことばかり話し過ぎてしまったかもしれない。あいつは口を挟むこともなく舌先で頬の内側を押した。

「ふうん。あんたも大変なのね」

晴美は両手を後頭部に添えたまま背面泳ぎ。

「別に、なんでもないよ」

「今度は友達ができるといいね」

何気ない一言が餓鬼のプライドを傷つける。

「弱い者いじめが悪いなんてことくらい俺だって分かってる。でもさ、馬鹿ばっかなんだもん。ぶっ飛ばすくらいしかさ、あいつらとは遊びようがないんだよ」

空気を読まない餓鬼は恐ろしい。晴美は目を見開き、水面を揺らしながら咽頭菌をギリギリと鳴らした。

「私、あんたなんかにやられないよ」

俺は何故か二人の仲裁に入る。

「なに言ってるんだ。二人で喧嘩でもおっぱじめる気か？」

続く紀之の発言には、随分拍子抜けさせられた。

「人魚とやり合う気なんかないよ。俺、泳げないし」

「は？」俺は阿呆面を晒す。「おまえ、泳げないのか？」

晴美は水面を叩く。

「なんだよ。笑うなよ」

紀之が餓鬼らしくむくれて見せても、笑いが止むことはない。この気丈な餓鬼に苦手なものはないと思いついていた。学校に行っても同級生をぶっ飛ばすくらいしか楽しみのない餓鬼。

「おまえは俺なんかといて、楽しいのか？」

「なんだよ。今更」

「今更気になったんだよ」

「最初は力人から声かけてきたんだろう。金借してくれてそれを言ってくれるな。」

「悪いと思って色々奢っただろう」

「だから使えるおっさんだって思ったんだよ」

俺の価値はそんなものか。

「ホント可愛げの無え餓鬼だな。泳げもしねえくせに」

「関係ねえだろう」

「あんた、泳げないと人魚にモテないよ」

「別にモテたかねえよ」

西日が強まり、自転車は長い陰を引きずる。晴美は時折タニシを拾い上げてガリガリ噛み砕く。顔を真っ赤に照らされた俺は、無尽蔵に広がる世界に目を細めた。乳酸の溜まった大腿四頭筋に限界を感じはじめ、永遠とか、無常とか、馬鹿にしみつけたれたワードが脳裏をちらつく。

「俺もおまえもいつかは死ぬんだよ」

「なんだよ急に」

「自分が死ぬなんて信じられるか？　でも、フツーに生きてたらキョンキョンよりは長生きするんだ。つまり、キョンキョンが死ぬところを見届けてから俺は死ぬんだな」

「誰だよ？」

「花の八二年組だよ」

「死んだらどうなるんだ？」

「紀之は人魚に問う。」

「知らないよ。わたし死なない気がするし」

「そいつも厄介だな」

ちようどこいつくらいの頃だったかもしれない。人生に終わりがあるってことが酷く気になって、腹の中にどうにもならない真っ黒な虫たちが渦巻いた。

「分解されてなんにも無くなっちゃうんじゃない。身も心も」

晴美は顔を顰めて死んだギンブナをつまみ上げた。それは餓鬼にとって一番マズい答えだろう。紀之はペダルの上に立ち上がり、二、三強く漕いだ。

「でもよ、世界ってのはなんにも無いところから生まれただよ。そう思うと、なんでもありだよな」
知った風なことを口にすれば、真っ赤な夕焼け空に紀之の雄叫びが響いた。

加速する紀之に続いて、晴美もぎやきやと声あげながら水飛沫をあげた。俺は懸命にペダルを漕いで追いつこうとする。

「力人も叫んじやいないよ」

「なんでだよ」

「足場売っても、大していい生活をしているわけじゃないんでしょう。強がってんじゃないよ」

俺はペダルを踏み外し、危うく紀之と接触しそうになる。

「おまえに何が分かる？」

「こんな子供にお金借りたんでしょう？　人間は不便ね」

たばこを買うのに小銭が足りなかっただけだ。たった五〇円でこんな惨めな思いをするはずではなかった。

「人魚はどうなんだ？　最近じゃ、タニシも減ってるだろう」

「ジャンボタニシが増えてるから平気。私、ザリガニでもなんでもいける口だから」

「力人も叫んじやえよ」

「おまえも言うか。」

「気持ちいいぞ」

紀之は風を切りながら、ひどく子供じみた声でもう一度雄叫びを上げた。そいつに晴美も共鳴する。パチンコで大負けした日だって、叫び声を上げたことはなかった。時折、店内で奇声を発している輩もいるが、俺はせいぜい舌打ちしてパチンコ台を蹴るくらいだ。

紀之がゆっくりと自転車に寄せてきた。あいつが雄叫びをあげた理由。それは死への恐怖なんてもう、もっと現実的な苦しみだった。

「明日さ、俺のお別れ会があるんだってよ」

乾いた笑いが赤い風に流される。俺が餓鬼の頃にも、転校する児童を見送るイベントというものが存在した。最近の餓鬼どもがどれだけ気の利いたパーティーを企画するか知らない。どうせフルーツバスケットだろう。どうせ寄せ書きの贈呈だろう。どうせ無理矢理思い出を語らされて、最後に担任から有り難いお言葉を賜ったら、校門の前で一人一人と握手をしながら送り出される。紀之の立場を思えば背筋が寒くなる。

「サイテーだな」

「シジョーサイテーで学校なんか行きたくねえよ」

おまえは沈んでいく太陽にバカヤローと叫ぶ。それなら話は別だ。俺は太陽に向き合って大きく息を吸う。そして、あらん限りの声を張り上げた。

「沈むんじゃねえぞおっ」

ペダルを漕ぐ足に力が入り、俺たちは更に加速する。晴美を残してグングン進んだ。長く伸びた陰すら切り離し、真っ赤な空へと飛び込んでゆく。サイテーな明日がいつまでもやって来ないように、太陽が沈むつもりならば俺たちが追いついてやる。

なんだよ。

「川か」

川かよ。

「川だな」

俺はライターを擦って、大きく息を吸い込んだ。鼻から紫煙が漏れる。

河口が海につながっているとは限らない。早渕川は鶴見川水系の支流。早渕川の河口は、その本流である鶴見川へつながる。俺は西日の照り返す川面に目を細め、口を窄めて大きく吸い込んだ。

「腹減ったな」

「そうだな」

少し遅れて晴美が河口へ辿り着いた。

「わお、大きい川って久しぶり」

人魚は本流へ向かって川底へ潜り込むと、続いて、大きくジャンプした。強い西日は水飛沫を煌めかせ、晴美のシルエットを浮かび上がらせた。

「人魚、楽しそうだな」

紀之は自転車をおりて芝が敷かれた土手の斜面を下る。その途中に腰を下ろした。俺はその横に立ち、ホープを燻らす。しばらくイルカのように跳ね回る晴美を眺めた。川岸には奇声をあげる幾つもの人影。人魚をはじめて見たのだろう。

「海じゃなかったな」

俺は言う。

「どっちにしたってただのデカイ水たまりだ」

冷めた口調のおまえに、俺は乾いた笑いを漏らす。

「つき合わせて悪かったな」

「別に」

しばしの沈黙の後、おまえは問いかける。

「なんでこんなとこまで来たんだっけ？」

「なんでかな。なんか面白いことが起こるんじゃないかなって」

紀之の返事はない。

岸辺の馬鹿どもが晴美に向かって石を投げている。俺は少しでも面白いものを見せてやろうと、大声をあげながらそいつらをどつきまわした。戦利品のスナック菓子を持ち帰り、俺たちは土手の斜面で横になる。

「おまえ、何してるときが楽しい？」

隣で寝転がる紀之に問いかける。

「なんだよ。今度は」

「いっつもつまんなそうだからよ。何が好きなかなあってさ。友達ぶん殴る以外な」

紀之はアルミ蒸着ポリ袋に手を突っ込んでポテチを摘まみ上げる。

「こんなん食いながらスマホでユーチューブでも観てんのが一番だよ。でも、そういうのって親がうるさいだろ」

つまらない餓鬼だ。

「早く大人になるといい。好きなだけ好きできるぞ。ある程度てめえで金を稼げばな」

「サイクリングも悪くない」

「おまえ、割と氣い使うよな」

陽が沈みかけ、辺りは薄暗くなる。これからのことは考えなくなかった。同じ道を帰るのかと思うとうんざりする。疲労が眠気を誘う。頭上にはいつの間にかやけにでかい月。見つめていれば吸い込まれそう。俺は両のこぶしを突き上げる。

「このまま月まで飛んで行きたいもんだな」

おまえは走ってきた早瀬川の上流を指差した。

「あの丘の向こうにUFOが下りてきた」

「UFO？」

いずれにしても戻らないと駄目か。鶴見川に満足した晴美が戻ってくると、紀之が指さす方へ視線を向ける。

「川のはじまりを見に行こうとか言うんじゃないよね？」

俺は寝そべりながら首を振る。

「丘の向こうでUFO見たんだってよ」

晴美は眉を潜める。未確認飛行物体を訝る半魚人。

「人魚がいるんだからUFOくらい飛んでるだろ」

紀之だって同じことを思う。

「変なものと一緒くたにしないでくれる？」

「ごめーん」

紀之は土手を駆け上がり、自転車の手前を握った。前輪を持ち上げ、自転車を丘のほうへ旋回させる。明日を迎えるまでに俺たちは地球を飛び出さなければならない。

「今夜もUFO下りてくるか？」

おまえはペダルを踏みこむ。

「知らんべったんゴリラの餅つきや」

俺も土手を駆け上がり、僅かな期待とともにサドルに跨がった。

不都合な忍術

隣国の発射した九発のミサイルのうち、その五発が我が国の排他的経済水域に着弾したと思われた。

カメラの前に立ったの背広組の男は、指を舐めながら使い古されたノートをめくって定型文を口にする。

「これは国連安保理決議違反であり、決して許されるものではなく、厳しく非難し、抗議する」

制服組の女が駆け寄り耳打ちをした。男は慌ててノートを捲る。

「さきほど不適切な発言がございました。訂正してお詫び申し上げます」

記者倶楽部に動揺が走る。シナリオが変わると誰も質問を読み上げることができない。背広組の臨時会見は速やかに終了し、放送局は慌てて過去のミサイル発射映像を引っ張り出した。

「また出たわね。ちょっとSNSでもチェックしてみて」

報道ディレクター映像スタッフの女はため息をつく。

「#忍法迎撃の術ニンニンのハッシュタグが乱れ飛んでいます」

報道フロアー音響アシスタントの男は得意げにスマホの画面を突き出した。女は舌打ちをしながら白馬に跨った男の背後でミサイルが発射される映像を加工する。

「新しい素材を送ってもらわないと、いい加減に茶番がばれる」

加工映像が全国に流れた。

「これトマホークじゃないっすか？」

官邸でミサイルの軌道を見守っていた面々も苛立ちを隠せない。今年に入ってミサイルが着弾しないのだ。軍拡増税の年明けだというのに、ミサイルは悉くレーダーから消えた。その都度SNS上では#忍法迎撃の術ニンニンが溢れる。SNS上の仕掛け人は特定されず、甲賀市、伊賀市は、ホームページを通じて自治体とは一切関連がないと発表している。ふるさと納税は止む気配がなかった。

官邸に怒号が飛び交う。あいつらはちゃんと撃っているのか。ここで危機感を煽っておかないとマズい。増税の前に国民の是非を問うなんて言っちゃったじゃないか。ニンニンじゃねえよ。

「何発撃ってもいいからちゃんと着弾させろ」

背広はノートを叩きつけた。

「昔、EEZみたいなアイドルグループいなかった？」

ケンイチ氏はわけの分からんことを申す。拙者はどんぐりまなこへの字口を結ぶ。晴天に無数のミサイル。ニントモカントモ。ニンニン。

割とギリギリス

「みんな買うって言ってるよ」

「郁子のみんなって三人くらいでしょう」

四人だもん。私を入れれば。

「スマホは早めに持ったほうがいいんだよ。どうせいつか持つんだから早めに覚えたほうがいいって、先生が言ってたよ」

「先生がお金出してくれるわけじゃないでしょう」

お金の話を出されると手に負えない。高校に入ったら絶対にバイトしてやる。諭吉一枚でも家計に入れば文句ないでしょう。私は湯気の立つ皿を受け取ってテーブルに着く。

「俺、ジャワカレーのほうがいいんだけど」

「文句言うやつは食べないでいいよ」

そんな言葉を口にしたのは私なんだから笑っちゃう。どうしても脊髓反射であの人の味方をしてしまう。お母さんは口元で笑って眉を垂らす。その表情で何かを伝えようとする。言いたいことがあるなら声に出しなさい。

最近のカレー粉から作るカレーに凝っているらしい。玉葱の値段が一時期より大分戻ったんだって。前から一度やってみたかったんだって。実験台になるのは私たち。私と樹生しかお母さんのご飯を食べる家族がいないから。

「玉葱シャキシャキだし、水っぱいし、バターがきつい」

樹生はお母さんのやることに容赦ない。でも、言いたいことは分かる。玉葱なんて跡形もなくなるくらいクタクタにしてほしいし、もっとトロトロしていたほうがいいし、バターは減らしたほうがいい。要するに私もジャワカレーのほうが好きだ。

「明日になればもっとおいしく馴染んでる」

「そうそう。カレーは二日目がおいしい」

お母さんは席について「いただきます」と自分の料理に手を合わせる。私と樹生も手を合わせた。お母さんの視線を感じてもう一つ感謝を込める。口を動かすはじめると樹生は文句を言わない。食事中は黙したままが我が家の作法。テレビも付けず、スプーンが陶器の皿を打つ音だけが響く。今はもういないお父さんの言いつけだった。お母さんが作ってくれた食事に感謝して、食事中のテレビは許さない。今時、観たいテレビなんて好きな時間に再生できる。樹生に至ってはユーチューブを観るばかりで、そもそもテレビなんかに興味はない。

それでも会話の一つくらいはすればいいのに。お母さんの料理に感謝するのならば、美味しいねとかさ、どうやって作ったのかさ、なんかお母さんの喜びそうな言葉の一つでもかけたいじゃない。沈黙にお父さんが浮かび上がる。それもなんか嫌だ。お酒臭かったお父さん。一緒に寝るには暑苦しかったお父さん。食事中に緊張感を醸し出すお父さん。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうしました」

いつも、いつものお母さん。

樹生はリビングにある一体型パソコンを起動して、激辛カップ焼きそばを食べる四人組に大笑いしている。私は洗濯カゴから自分の服だけをたたんで部屋に連れて帰った。もともとはお父さんの仕事部屋だった。いつまでも新型と呼ばれるウィルスが流行りはじめて頃、日中だって部屋を締め切ってパソコンと向き合っていた。あのラップトップは会社支給だったから、ここにはもうない。埃を被ったセカンドディスプレイだけが真っ黒な画面のまま机に置かれている。椅子に腰かければ私の顔を映しだした。本来の用途は無くしてしまったけれども、ここには一枚板を置いておく必要がある。お母さんが不意に部屋をノックして入ってくるかもしれない。樹生に至ってはノックすらしない。そんな時、頭を隠せる一枚が必要でしょう。

九時半までは樹生がパソコンを使う時間。私はしかたがないから本棚から参考書を引っ張り出す。勉強でもして時間を潰す。英語の教材に Snow White and the Seven Dwarfs。それが中学生としてあるべき姿なんだって。そう思っているのはなぜだろう。

「ディスプレイよ、ディスプレイよ、ディスプレイさん」

言いくいいたらありゃしない。お母さんに心配をかけず、今日も私はいいい子です。だから、一日でも早くスマホが手に入りますように。

ある日、学校から帰ったらスマホが机に置かれている。そんなある日を夢見ている。冷たく滑らかな端末を手にして目を丸くする。

「どうして？」

「いつか持つんだから早めに覚えたほうがいいでしょ」

そうだよ。先生だって言ってたもん。嘘。本当は香瑠愛のお母さんが言ってた。香瑠愛なんてラインもやって、学校のみんなとつながっているよ。

「あなたの言うみんなって三人くらいでしょう」

分かんない。実際、そんなものかもしれない。

九時半が過ぎたら私には樹生をパソコンの前から追い払う権利がある。

「はい、どいたどいた」

「これ終わったら」

「無理」

ユーチューブを強制的に閉じてお尻で弾き出す。なによりメールをチェックする。朱莉と香瑠愛とハシムニカ、そして、私、四人のグループメール。朱莉は田舎のおばあちゃんちにいるんだって。びっくり。田舎のおばあちゃんちってそんなに近くないよね。明日学校だよ。今日中に車で帰るって。車か。い

いよね夜のドライブ。ハシムニカはほとんどメッセージを送ってこない。香瑠愛はきつとスマホで自分のベッドからメールしているんだ。今日もチャレンジしたけど駄目だった。なにを？ スマホ買って攻撃。香瑠愛のお母さんがいいこと言ってたじゃない。それを言っても駄目だった。先生が言ったってことにしたんだけど。なんで先生にしたの？ なんか、そのほうが効き目あるかなって。香瑠愛のお母さんのほうが効き目あるでしょ？

ないよ。だって、香瑠愛んちはお金持ちじゃない。ってこれは言えない。

ヤッベエめっちゃウケる。あんたは急に何なの。ペヤング獄激辛にんにくやきそば一気食い。マジ臭そう。男子ってそういう動画好きだよな。うちの弟も見てた。リンクとか送ってこないでいいから。

私はリビングでカタカタとキーボードを叩く。お母さんは鏡台に向き合って割り箸を咥えながら首筋を伸ばす。いい匂いの化粧水をいっぱいコットンに染み込ませていくつも顔に貼る。納戸からは樹生の裏声が聞こえる。あいつ、暇になるといつつもなにか歌ってる。声変わりしていないから、地声なのかもしれない。

夜が更ける頃、自分の部屋に戻って布団を敷く。去年まではお母さんとお父さんが一緒に部屋で寝ていた。まだ樹生が生まれる前、その間に私が眠っていた。お酒臭くて熱い身体から逃げるように、いつだってお母さんに顔を向けていた。それはいつしか樹生に代わり、今となっては三人とも別々の部屋で眠っている。お母さんきつと寂しいよね。時折、寝ぼけて泣きながら樹生がお母さんの布団に潜り込む。たまにそういうのがあったほうがいいと思うよ。あいつ馬鹿だけど可愛いところあるから。

朱莉は遅刻することなく学校に来ていた。

「支持率が下がると言うこと聞く聞く。必要なのは政権交代ではなくて、支持率三〇パーセントの維持なんじゃないの？」

この国の聞く耳が少しずつ若い活動家の声に反応するようになる。それでも気候危機には適応と緩和による二本柱だと聞こえのいい言葉しか返ってこない。

「一〇年も生きない人間が未来を蝕む」

誰かが言いはじめた言葉が共感を呼ぶ。誰もが私の声だという。何度もその言葉を口に出しているうちに自分が言いはじめた言葉じゃないかしらなんて思いはじめる。私は朱莉が広めたんじゃないかと思っている。あの子は本当に地球の未来を憂いているから。

身近で分かりやすいもので言えば隣町で裁判にもなっている石炭火力発電設備二基の増設。我が県が誇る気候危機のシンボル。朱莉に誘われて建設反対のスタンディングにも行った。「石炭火力反対」STOP気候危機」と書かれた横断幕を広げてみんなで声を合わせる。朱莉と香瑠愛は大声を出すことに何の抵抗もないから、気持ちよさそうに喉を振るわせていた。香瑠愛の場合は目立ちたがりなだけだけれど。ハシムニカはヌボーっと突っ立ってるだけ。私はと言えば、朱莉のコールにボソボソと呟きのレスポンス。ここに立つだけでなにかの役に立っているんだって言い聞かせていた。きつと朱莉がやっていることは正しくて、きつと私たちの未来は危うくて、それでも大きな声を上げることができない。正直、いまいち実感がないんだよね。川に飲まれる街はいつだってテレビの向こう側。建設中の石炭火力がどれだけ私を苦しめるのか、その未来が想像できない。

ぼんやりと誰も住めなくなった地球を思い浮かべる。海に沈んで太古の姿に戻るのかな。ニンゲンが駄目なことをしてきたのだから、いなくなってしまう方がいいのかもしれない。それが私たちに渡されたバトンなの。お父さんやお母さんが勝手なことをしてきたせいで、私たちの未来が海に沈む。とても不平等なことだけれど。必死に稼いで、作ってくれたカレーを食べて生きている。私はまだお母さんによって生かされている。高校でバイトするようになったら、もっと上手に怒れるだろうか。

「須賀田」

「あ、はい」

不意に先生に呼ばれて、顔を上げる。黒板には連立方程式の問題が書かれていた。禿でチビ。数学の木村を表現するにはそれが一番わかりやすい。黒板だって下半分しか使わない。私は立ち上がって、机の並ぶ隙間を抜ける。不意に朱莉が小さな紙きれを手渡した。目の前の連立方程式はそんなに難しい問題ではなかった。チョークを手にとって黒板をコツンと叩く。計算を始める前に朱莉のメモを開いた。「田舎のおばあちゃんちに行こう」なんだよこんなタイミングで。田舎のおばあちゃんちってけっこう遠いよね。電車賃いくらかかるのだろう。私はチョークを粉受けに戻した。

「どうした？ 分かんないか？」

チビで禿で声が高い。まだ一〇年以上は生きるかな。

「はい」

ハシムニカが手を上げた。指される前に黒板に向かって歩き出す。私はすれ違いざまに紙切れを渡した。あいつはそれを開くこともなく難なく問題を解いた。

給食にはすっかり黙食というスタイルが定着した。もともと一五分しか時間がないから、集中しないと食べ切れないんだよ。

昼休み、あの紙切れは香瑠愛に渡っていた。

「これ見た？」

香瑠愛が私の机にやってくる。女の私が見ても可愛いと思う顔。憧れとかそういうのとはちょっと違う、お人形みたいによくできた顔。

「ハシムニカのおばあちゃんち行く？」

「え、朱莉じゃなくて？」

私は朱莉に渡されたからてっきり朱莉のおばあちゃんちだと思っていた。実は朱莉も誰かに渡されたメモだったりして。

「行こうか」

ハシムニカがやってくる。こいつはきっと私のおばあちゃんのちだと思っている。だから先に言っておくけど、

「多分、朱莉のおばあちゃんちだと思うよ」

朱莉のおばあちゃんちでなにより驚いたのは、物々しい日本家屋以上に、玄関を開けるとは立派なキリギリスが佇んでいたことだった。

「さあ、入った入った」

自ら鍵を開けた朱莉は、ギリギリスのことなどお構い無し。外へ逃がそうともしない。ギリギリスもギリギリスでそこが自分の生活空間であるかのように佇む。ひょっとしてギリギリスの置物かしら。私のマンションに紛れ込む虫と言えば黒い彗星。アダンソンは益虫だから殺さないでいいと教えられたハエトリグモ。秋になればカメムシが網戸に卵を植えつける。

「お邪魔します」

私はギリギリスに小さく頭を下げる。

「あのさ？」

スニーカーを脱ぐ私の頭を超えてハシムニカは朱莉に尋ねる。

「なに？」

「おばあちゃんは？」

「この前死んじゃった」

で、あの日おばあちゃんちだったんだ。死にたてのホヤホヤ。馬鹿みたいな言葉が浮かんで首をふる。

「おじいちゃんは？」

「会ったこともない」

「誰もいないの？」

私はギリギリスに視線を落とす。

「いないよ」

朱莉は鍵を振った。

「何しに来たの？」

香瑠愛は細い首を傾げる。

「遊びに来たんじゃん。おばあちゃんと遊びたかった？」

香瑠愛は私と目を合わせる。なにか言わないといけない。

「いいじゃん。広くて誰もいない家」

「でしょ。遠慮なく上がって」

ひんやりした床は音を立ててきしむ。暗い廊下を恐る恐る抜け、朱莉が居間の雨戸を引いたら目が眩んだ。大きな窓から陽が差し込む。すっかり枯れた畳、掛け軸のない床の間に木彫りの熊、据え付けの棚には小さな水車小屋の置物が置かれていた。

「まだあった」

朱莉は水車小屋を手にとってゼンマイを回した。水車は回りだし、オルゴールが悲しげな音楽を奏で始めた。なんだかいい予感。

「木彫りの熊って実際あるんだな」

ハシムニカはペタペタとその頭を叩く。

香瑠愛は広縁に置かれたロッキングチェアに揺れていた。スマホを手にして私たちにカメラを向けている。四股を踏みはじめるハシムニカ。カメラの向けられると何かしなければ気が済まない男子。

「腹減ったな」

昼ごはんのことは気になっていた。なんとかお小遣いをもらってきたけれど、近くにお店があるのか

知れない。

「ピザでもとる？」

香瑠愛は言う。

「とれんのか？」

私の疑問をハシムニカが口にする。

「駅前は割とひらけてたでしょう」

「無いこたないんじゃない」

香瑠愛は早速スマホで検索をはじめた。香瑠愛の奢りなんだと期待する。

「水は買っといたほうがいいかも。水道出ないよ」

「電気は？」

「夜は早く寝ましょう」

「トイレは？」

「行きたい人は一緒に水を買に行くよ」

なにより四人でスーパ―に向かった。

ピザは期待通り香瑠愛の奢りで、チキンやポテト、コーラ・ゼロまでついてきた。

「頼み過ぎじゃね」

夕飯までを考えれば足りないような気もする。枯れた畳に油にまみれた平箱たちを広げれば、おばあちゃんちの空気にチーズやトマトケチャップの匂いが溶け込んでいく。口を尖らせながら頬張る四人を木彫りの熊が眺めていた。

「かくれんぼできそうじゃね」

ハシムニカが言い出すと、朱莉がうつ伏せになってカウントダウンをはじめた。反射的に歯型のついたピザを戻して三方に散った。私は二階につながる階段を見つけて、暗い隙間を駆けあがる。思わず飛び込んでしまったけれど、暗いの嫌いだよ。軋む階段に耐えられず引き返そうとすれば、

「もういいかい？」

「もういいよ」

なに、はやくない？ 私はやむを得ず駆けあがる。部屋のふすまを引けば窓枠から僅かな光が漏れている。すぐに飛びついたけれど、雨戸が動かない。何でこの家は何処の窓も塞がれているのよ。引いても上げてもガタガタと音を立てるばかり。暗闇の中で僅かに生活の匂いが残っている。死にたてのおばあちゃんの匂い。朱莉も会ったことがないおじいちゃんの匂い。

「みっけ」

肩を叩かれて悲鳴を上げる。振り返れば涙を浮かべた私を朱莉は抱きしめた。

「大丈夫」

かくれんぼはすぐに終わった。軋む床に慣れない匂い。みんな光を求めて居間に集まった。トマトケチャップとチーズの匂いに救われる。赤と青の見慣れたロゴに安堵する。陽の当たるところを求めて転がれば、熱を帯びた畳が背骨を暖めた。いつだって四人でいれば完璧だった。

「帰りたくない」

朱くなりはじめた陽光が香瑠愛の足を照らす。

「学校で勉強なんかしたって、私たちが大人になるころには海に沈んでいる」

朱莉と香瑠愛はきっと違うことを考えている。

「この家と一緒に朽ちていくか」

ハシムニカは朱莉の声に乗った。

「六〇パーセント」

「なにが？」

「スマホのバッテリー」

「俺たちに残された時間みたいだな」

ハシムニカは木彫りの熊がすっかり気に入ってしまったようだ。我が子を抱くように添い寝している。

「五九パーセント」

私も何か言わなきゃ。

「きっと舟が売れるよね」

「なにそれ？」

「街が海に沈んだら舟が必要でしょう。舟作ってる会社に就職しようかな」

「舟作ってる会社も沈むんじゃない」

「舟で会社を浮かべればいい」

「あったまいい」

「思っでないでしょ」

朱莉の今の言い方は絶対思っでない。

「俺、昔水泳習ってたんだけどさ、もっとやっとならよかった。海潜って鰐で魚突ける人って最強じゃない？」

「私だったら山に逃げる。向こうに山が見えるでしょう。ここ盆地だから直ぐに沈むよ。あんた海潜って魚とってきてよ。私、山でお米でも育てるから」

「なに？ 朱莉、ハシムニカと結婚するの？」

「橋本朱莉」

ハッハッハ。橋本だからハシムニカ。

「五八パーセント」

「速くない？」

「郁子も一緒に山にきてよ。香瑠愛はクルーザーくらい買えるでしょう。なんとかかなりそうじゃない。四人でいれば最強。絶対に適応してさ、緩和だとかいいながら何にもしなかったお母さんとかに大声で文句言えはいいよ」

私はちよっと、

「お母さんに文句なんて言えない」

「俺も」

「変なの。じゃあ、私のお母さんでもいいよ」

「なんで香瑠愛の？ 無理無理」

「じゃあ、数学の木村とか」

ようやく笑えた。チビで禿げだったお陰だよ。太陽はすっかり朱くなっている。

「もう一回トイレ行っとく？」

「スーパー？」

「朝ご飯におにぎりでも買っておかないと」

一台しかない香瑠愛のスマホが生命線で（なんだかそういう決まりで）、翌日には私たちはそれぞれの家に帰りました。学校もあるし。

「ただいま」

お母さんは、通帳と電卓を交互に睨みながら定型文を口にした。

「おかえり。楽しかった？ 早くお風呂に入っちゃいな」

「楽しかったよ。おみやげないけど」

「郁子が楽しかったら十分」

「樹生は？」

「まだ外でボールでも蹴ってるんじゃない。帰ってくる前に入っちゃいな」

「靴あるけど」

「ああ、それ捨てるやつ。あの子いつも踵擦って歩いているからすぐ靴ダメにするのよ。サイズもすぐ変わるし、お金かかってしょうがない。あと一五年働いたらお母さんもう定年だからね。住宅ローンはパパの団信で片付いたけど、修繕積立金っていうのがあんのよ。あんたたちの進学とかも控えてるじゃない、あんた頑張って公立行つてよ」

お母さんは句読点の間に溜め息を挟む。私はああと発しながら両耳を連打、すり足で風呂場へ逃れた。私たちに言わせれば、あと一五年もこの地球が平常運転であるはずがない。鼻まで湯船につかって息を吐く。一五数えながら泡を吐く。苦しくなってきた時に限ってバスタブにお尻を滑らせる。溺れそうになって這い出た。溺れ死ぬにはまだ早い。

「やっぱりお米くらい自分で育てられないとダメだよね」

息を整えながら、おにぎりを買うに行ったときの朱莉の言葉を思い出す。気候危機には適応と緩和なんだって。緩和対策って頭のいいリーダーたちが本気出してくれないとどうにもならない。適応を本気で考えることは私たちにだってできるような気がする。やっぱりお米くらい自分で育てられないとダメなのだろうか。

バスタオルで頭を掻き回し、いつもならば今度はどんな手でスマホを買ってもらえるよう交渉をしようかと考える。どうもそんな気分にはなれなかった。

「みんな言ってるよ」

「郁子のみんなって三人くらいでしょう」

だから四人なんだって。私を入れれば。この地球が熱くなっているのはニンゲンの活動によるものなんだよ。黙っていてあげるけれど、もっと言えばあんたたちなんだよ。お母さん。あんたたちが欲に任

せていい加減なことをし続けてきたから、私たちがその被害を受けることになるって言ってるの。知ってる？ 一・五度を越えたら取り返しをつかないことになるって。

「ポイント・オブ・ノー・リターンだよ」

私は無力さに打ちひしがれながら小さく声にする。

「誰が脳足りん？」

お母さんは雪平鍋で炊いた大豆と昆布に味をつけていく。毎日のご飯を用意するだけで精一杯なことも分かるけど、あと数年もすれば取り返しのつかない事態になるんだって。お母さん、どうしたらいいと思う？ 今の政治家ってほとんどがお爺さんで、死ぬまでもうじきなんだって。もうじき終わる人生のことさえ考えれば、何にも困らないんだって。私だってあと一〇年で死ぬるならば地球の心配なんてしなくて済むんだよ。

顔に泥を付けた樹生が帰ってきた。済まないかも。

「おかえり」

「俺、甘い煮豆って好きじゃない」

相変わらず母親の食事に文句をつける。文句言うやつは食べなくていいと言いたところだが、副菜を残していいとなれば弟の思う壺だ。

「黙って食べろ」

甘い豆がおかずな気がしないという理屈は分からないでない。

「俺あれ好きなんだよね。給食で出る揚げた塩大豆みたいなやつ」

「なにそれ？」

拙い説明が益々混乱させる。

「郁子も食べた？」

私は首を傾げる。

「要するに揚げて塩かければいいの？」

「多分。しょっぱいおかし風」

そこがポイント。

「今度ね。早くお風呂入って」

朱莉が学校を休んだ。昨日、最寄りの駅までは一緒だったけれど。あれから朱莉は家に帰ったのだろう。行方不明と決まったわけではない。そんなことになったなら担任のティーチャー・淀川も黙ってない。休み時間には香瑠愛とハシムニカが談笑していた。なんだか絵になる二人。四人組ってなんとなく繋がりに太さの違いがあるじゃない。ペアになる時は大抵私と朱莉。あの二人を邪魔してはいけなからなんて変な気を回す。数学の授業ではまた木村が私を指名した。三角形の外角くらい分かるんだよ。一五分の黙食の後、昼休みは三人揃って朱莉の話題となった。

「珍しいね、朱莉が休みて。何か聞いている？」

私は首を振る。

「田舎のおばあちゃんちに戻ったんじゃないの？」

ハシムニカはあの家の細部を覚えている。冬休みまでには一週間くらい過ごせるようにリフォームしたいなんて、他人の家に勝手なことを言い始める。

「お風呂、お風呂」

「まずそこなのか？」

香瑠愛の優先順位をハシムニカは理解ができない。でも、冬だしね。お風呂は重要。

「お風呂ができたら割と何でもいけそうじゃない。水があって温められるわけでしょ」

「ドラム缶でも転がってれば、薪で焚いてなんとかできそうだけだな」

「ドラム缶に入るの？」

「入んねえよ。風呂から水循環させて薪ストーブで温めるんだよ」

ハシムニカには何かイメージがあるのかもしれないけれど私たちにはさっぱり。香瑠愛の丸い瞳と視線をぶつけて首を捻る。

朱莉の欠席は続いた。ティーチャー淀川からはコロナだって聞かされたけれど、私たちには感染していない。夜にメールを送っても朱莉からの返信はなかった。数日後には香瑠愛まで休むようになって、その夜に状況を知った。

香瑠愛からの写真付きのメールが届いていた。ヤッホー、朱莉と一緒にいるんだよ。背後には木彫りの熊が映っていた。田舎のおばあちゃんだということがすぐに分かる。

二人ともは元気なの？ 元気元気。ティーチャー淀川はコロナだって言っていたよ。お母さんにそう言っつけて言っつけた。わけが分からない。朱莉のお母さんは朱莉が田舎のおばあちゃんだって知ってるの？ 多分気づいてる。このカギ持ち出すの見られたから。お互いウンザリしてるから離れて暮らしたほうがいいんだよ。また喧嘩した？ 私たちに適応を求めているんならもっと本気出しなよ。って言ったの？ 街が水没しても三食ご飯が食べられる方法を教えてよ。って言ったの？ ガスがなくてもお風呂に入れる方法を教えてよ。って言ったんだ。やっぱりお風呂って重要だよ。お風呂が焚いたら割と何でもいけそうじゃない。同意。お風呂焚きたい。焚きたいよね。焚きたいよ。ドラム缶があればなんとかなるってハシムニカ言ってたよ。ドラム缶か、もらえるかな。なに？ 知り合いでもできたの？ 前からお母さんに聞いてたんだよ。この辺で農家やってる従妹のこと。朱莉の従弟？ お母さんの従弟。ちゃんと心配してるんじゃない。そりゃ親だもん。朱莉も信頼されてるんだよ。お母さんと同じ歳くらいって思うじゃない。違うの？ すっごい白い髭生やしたお爺ちゃんだった。ポム爺さんみたい。誰だっけそれ？ 米は素人には無理だって。まず大豆の育て方教えてもらうことになった。え、すごいじゃん。畑の牛肉。なにそれ？ あとお風呂ができたら最強じゃん。ハシムニカがつくってくれるんだよ。あんまりあてにならないけど。湧水が汲める神社があるらしいの。水なんてどうでもなるってポム爺が言ってた。最強じゃん。そういうハシムニカ入ってこないね。こっちに向かっているのかな？ え、私だけ置いてけぼり？

パソコンを閉じる前にポム爺さんを検索する。

「ああ」

翌日、教室にハシムニカを見つけて胸を撫で下ろした。

「昨日メールに入ってたじゃない」

「ドラム缶ストーブについて調べててな」

教室を見回してから声を潜める。

「朱莉と香瑠愛、田舎のおばあちゃんちにいるんだよ」

「俺の言った通りだろう」

「大豆育てるって」

大豆栽培にはあんまり関心が無いようで、ハシムニカはドラム缶薪ストーブでどうすればお風呂が焚けるのか、身振り手振りを交えて説明をはじめた。

「例えば俺がドラム缶で両手がなまし銅管だとするだろう」

頬を膨らませながら両腕を自分自身に巻きつける。なまし銅管にクエスチョンマークを立てながら、分かるような分からないような。ハシムニカの真似をしながら体をくねらせた男子が冷笑している。ちよつと恥ずかしくなるけれど、朱莉もいないし、香瑠愛もないし、このクラスで気兼ねなく話せる相手がハシムニカくらいしかない。

温水プールに通うようになったらしい。

「郁子も行こうぜ。おまえもどうせ部活やってないだろう」

銚をもってプールにやってくるハシムニカを思い描いて、遠慮したい気分になる。チャイムが鳴って、プールへのお誘いを曖昧にしたまま休み時間を終える。でも、これだけは確認しておきたかった。

「ねえ、週末、また行くでしょう？」

ハシムニカはこともなげに応えた。

「もちろん」

担任のティーチャー淀川による社会科の授業では、毎度時事ネタが登場する。新型ウィルス対策、東ヨーロッパでの戦争、カルト団体と政治の癒着、前向きな話しは日本人選手が海外チームで活躍したところくらい。

その日は、気候変動枠組条約締約国会議における日本パビリオンの紹介があった。冷房効率を二〇パーセント向上させるフィルム、二酸化炭素をカルシウムに固定させてコンクリートにする技術、人工光合成技術を活用して二酸化炭素を還元して再び液体燃料を製造する技術。何のことやらさっぱり分からないけれど、科学技術がクリーンなユートピアを用意してくれるものと刷り込まれる。

それでも私たちは簡単にはいかない。柴田朱莉に色々詰め込まれてリアルなディストピアが見えていくから。朱莉だったらなんて言うだろう。ポイント・オブ・ノー・リターンが五〇年後ならば、科学技術が支える素晴らしい未来を期待したいよ。到底間に合わないことを分かっているが新しい緩和策だなんて淡い期待を抱かせつつ、甚大な自然災害を前に適応しろと求める。よくもそんなことを。

「ティーチャー淀川よ、俺たちに適応を求めるなら、もっと本気だしてくれよ。水泳の授業でさ、銚握って海に深く潜る方法を教えてくれよ。糞から堆肥作って山で大豆作る方法を授けてくれよ。どうせ間に合わない緩和策で、どう適応していけばいいんだよ」

そうだそうだ。私は驚いて顔をあげる。教室の真ん中には拳を握って立ち上がるハシムニカの姿があった。教室が凍てつき、ティーチャー淀川は目を見開いた。

「橋本、いきなり吃驚させるな」

朱莉のように言葉が続かない。

「とりあえず座りなさい」

両手で仰ぐようにして押さえ込む先生の仕草に、ハシムニカは拳を握って項垂れた。座らないのが最後の抵抗。こんな時、先生はどうするか。こっちもそのパターンは心得ている。

「気候変動への取り組みについて、みんなはどう思う？」

自分で答えを出すよりも生徒たちで答えを導き出すことが美しいとされている。例えばそれがあんたたちの仕業だとしても。

突然のことに皆口を閉ざす。ハシムニカはちょっと変な奴だって思われているから同調しようなんてクラスメートはいない。正確には私も含めた四人組のことだけれど。朱莉も香瑠愛もない今、みんなは私がなにか言い出すと思っているだろう。反面、あいつには何も言えないと思っている。私がなにか言わないとハシムニカだけが変な奴で終わる。

変なのは私たち四人。四人でいれば最強。私は名前を借りて立ち上がる。

「柴田朱莉さんも、岡村香瑠愛ちゃんも、壊れていく世界に適応するために自分たちで勉強をはじめています。ここで勉強したことを活かせる未来なんて待っていないから」

教室がざわめく。みんなは二人ともコロナで休んでいると聞かされているから。

「須賀田、柴田と岡村はコロナ病欠中だ」

やっぱり私たちが変なのかな。どっちにしてもこの教室は居心地が悪い。

「ハシムニカ、もう行こう」

「おう」

私たちは黒板に背を向けて教室の出口を目指す。

「こら、二人とも席に戻れ」

ハシムニカは突然高笑いをあげる。そして、私の手を取って走り出した。その手は熱を帯びてとても力強く、私はお父さんを思い返していた。

再び私たちが田舎のおばあちゃんちの門戸を開けると、木枠で囲まれた筵の上で香瑠愛が寝ていた。

「おまえ何やってんだ？」

見下ろすハシムニカの顔に香瑠愛の顔が華やぐ。

「発酵ベッドは温かいよ。稲藁、落ち葉、米糠なんかを積み上げて水を撒いただけなんだけどね。放っておいたら火傷するくらいに熱くなる。だから、踏んだり、こうして押し潰してあげて適温にするの」

本当に眠っていたようで身体を起こして寝惚け眼をこする。

「ハワユ―？ 郁子」

「アイムファイン。アンジュ―？ 香瑠愛」

「なんでおまえら英語なんだよ。朱莉は？」

「ポム爺んとこで大豆の収穫手伝ってるんじゃない」

「もうできたのか？」

「まさか。種まきだって来年の春だよ。今のうちに堆肥を作って土づくり」

種まきが来年の春で、来年の今ごろが収穫時期ということか。随分先の長い話のように思えて、なんだか途方に暮れる。

「土壌って知ってる？」

香瑠愛が問いかける。

「土と違うの？」

筋の通った鼻の前で人差し指が振られる。そして、地球が生まれて、マグマが固まってできた岩の隙間に微生物が住み着き、動植物の死骸が分解されて堆積していくまでのストーリーを三十秒で語った。

「おまえ、変わったな」

「肩に掛けるのなに？」

ハシムニカは丸く束ねたなまし銅管を担いでいた。ゲームもトレカも漫画本も売り払って、ホームセクターで買えるだけ買ったという。

「おまえらのために風呂を作りに来たんだろ」

門戸の向こうから朱莉の声が響いた。

「郁子、ハシムニカ」

朱莉の横にはもう一人、真っ白な髭を蓄えた老爺がいた。一緒にドラム缶を転がしながらやってくる姿は一目でポム爺だとわかる。

「いいドラム缶あんじゃん」

それは焼却炉に使っていたという下小窓の付いたオープンドラム。ハシムニカはすぐに飛びついてポム爺と一緒にそれを起こした。

「なんかまた餓鬼どもが増えたな」

「お爺さん、お世話になります」

私の言葉に朱莉が両手で口をふさぐ。

「馬鹿言うな。これでも四二だ」

「嘘、お母さんより若い」

「嘘なんか言わねえよ」

「別に嘘つきだっけ言いたかったんじゃない」

「嘘つきから農業教わんのか」

なんだか面倒臭そうなヒトだ。朱莉と香瑠愛は目を合わせて苦笑いを浮かべている。ポム爺は木杵の筵をめくって、未成熟な堆肥を指先で崩す。

「枯葉でも集めてもっと嵩増やしておけ」

「へえい」

「土さえ作ってしまえば、大豆なんて適当に撒いておけば育つ。あいつは根粒菌と共生してるからな。空気中の窒素をアンモニアに固定して栄養にする。無駄に化学肥料なんて入れると、葉っぱばっか茂って豆がならない」

適当にやっても育つという言葉がなにより心強い。

「おまえは風呂を作るんだって？」

ハシムニカはドラム缶ストープになまし銅管をぐるぐる巻きにして湯沸かし器をつくる構想を語る。

「なんであれ男手ができてよかった。取りあえず水でも汲んで来い」

ポム爺が指さす先にはポリタンクの積まれたリアカーが置かれていた。湧水が汲める神社があると聞いていたけれど、日々の水を汲みに行かなければならないというかとか。

「けっこう歩くよ」

四人組はポム爺に見送られて、リアカーを引いて歩きはじめた。

「ご飯どうしてんの？」

「今は、ポム爺を手伝って食べさせてもらってる。香瑠愛がピザとか頼むときもあるけどね」

「帰らないの？」

「今は考えてない」

香瑠愛も頷く。親が許してくれるのが不思議でならない。ポム爺が朱莉のお母さんに連絡しているのかな。香瑠愛はスマホで連絡が取れているのだろうけど。

「ハシムニカは明日帰るよね」

「俺は風呂を作ったら帰るよ。プール行って素潜りの特訓もしなければならぬしな」

私はホッと胸を撫で下ろす。それでも、あんなことがあったからどんな顔をして学校に行けばいい。

「トイレはまたスーパー？」

「庭。全部かき集めて堆肥にするよ」

「マジ？」

さすがに驚いて私とハシムニカは声をそろえた。香瑠愛が寝ていたあの筵の下で発酵していたのだろうか。

「無理ならポム爺の家だってある。ちょっと面倒臭いヒトだけど」

私には朱莉や香瑠愛ほどの覚悟はない。お母さんを困らせることはあっても、越えられない一線がある。ハシムニカだってきっと一緒。

大人たちのやる気のない態度に憤る。反面、いまいち実感を伴わないこの危機が自分たちの思い過ぎであればいいと願っている。

ハシムニカは私と教室を飛び出した時のことを英雄譚のように話しはじめた。案の定、ハシムニカが気持ちよく話し終える前に、朱莉は憤りを爆発させた。国のシステムなんて戦争に負けるくらいインパクトがないと変わらない。この国で市民運動が実ったためしなんてない。全部、歴史の教科書に書いてある。これから起こる戦争に備えなければならない。東ヨーロッパ発の戦争じゃないよ。ニンゲン対シゼン。圧倒的不利な戦いに送り出された私たちはとにかく生き延びなければならない。その先にシステムチェンジと真の復興がはじまるのだから。

私には朱莉が怖い。

私にはまだ答えが出ていない。

私はただ右往左往しながら居心地のいい場所を探し求める。

ファシリティ

便所に籠って肛門に力を込める。

ふう。

一息ついて携帯端末を手取る。タイムラインを遡り世界を切り取る。閲覧注意の虫画像に手が止まる。オオキンケイギクの花弁にとまるツユムシ、どちらに注意すべきか。鮮やかな花を旺盛に咲かせる特定外来生物。栽培しただけで三年以下の懲役もしくは三〇〇万円以下の罰金。世間は妙なところに気を配る。著名人の死が報道されればお気軽にRIP。＃国葬反対のハッシュタグは消え、県民葬まで無事に執り行われた。

足下には脱ぎ捨てられた白のつなぎ。ここでは一年を通じて誰もが長袖・長ズボンのオールインワンを身に纏う。便所が不便でならない。個室ではそいつを脱ぎ捨て、くすんだブリーフを足首までずり下ろす。便座に腰掛けた自身の身体を見下ろせば、陰毛の上に積み上がる二層の肉塊。この絶望的なアングルを写真に収めてアップすれば、多少の反響は得られるだろうか。不愉快だろう。不道德だろう。

「頭痛がすれば芸術品」

香澄は言っていた。いい加減な妻だ。贅肉を摘まんで鼻を鳴らす一方、肉のアイデンティティーに僅かな期待を寄せる。頭痛がしはじめ、頬に往復ビンタを見舞った。

便所に何者かの足音が響く。未だ大便中に他人の気配がすると気を揉む。不惑を迎えたというのに青っ洩を垂らしていた頃と何も変わらない。耳を澄ませば小便器を打つ音。俺は唇を噛みながら懸命に気配を殺す。

「栗栖、うんこしてんのか？」

晴山の声が響き、肩を揺らした拍子に携帯端末が落下した。慌てて拾い上げれば、強度が売りのゴリラガラスディスプレイに蜘蛛の巣が走っていた。

「うわっきゃ」

腹の底からこみ上げる怒りを必死に押し殺そうとすれば猿の声が漏れた。

「サボってないで早くしな」小便に続く水洗面。「便秘には、一に運動、二に野菜、三、四が無くてコーラックだぞ」

捨て台詞とともに晴山は便所から消えた。

俺はひび割れた携帯端末を眺めながら奥歯を噛む。坊ちゃん刈りに白い顔。晴山をぶん殴る自分を思い浮かべるが、誰もが似たような面を下けているから、ひしゃげた白い顔は自分のようでもある。

あいつが余計なことを言いふらす前に、そろそろ出すものを出し切って便所が出るか。それでも鉛のように重い腰が上がらない。扉の向こうに魅力的な世界が広がっていれば別の話だが、この日常には苛立っていたい。

「便秘には、一に運動、二に野菜、三に水分、それでも駄目ならコーラックだったよな」

どうでもいいことを検索し、俺はもう一度ひねり出した。いつだって快便。醜い肉塊が腹に巻き付いていても体調を壊したことはない。体力は落ちたが裸眼で一・五。乳児期の母乳で免疫力をつけ、幼少期にいい飯を食わせて貰ったお陰だ。親に感謝。なんだかんだと健康な奴は重宝される。おまえならば灼熱の南国でもうまくこなしてくるだろう。おまえならば極寒の北国でも丸く納めてくるだろう。

かつては二流企業に勤めていた。明けることのない氷河期に三流大学から就職できたのは上出来だ。何事にも嫌な顔せずイエスと答えられる健康優良人。使い勝手の良い社員が重宝とされるのも束の間。株主様のご機嫌を伺いながら成長を続けなければならないシステムでは、贅沢を望まなくとも現状維持は許されない。

俺は三十半ばにしてこのファシリティに送られた。会社に置いても害はないが、大きな成功をもたらすこともない。先を急ぐ社会に並走できない輩が行き着く先。それがこのファシリティ。一点でも尖った技能を手に入れば世のシステムに組み込まれる。俺たちは大人しく訓練を積めばよかった。ここでは面倒を起こさない輩が何より重宝される。

「世が世なら番傘職人にでもなりたかった」

会社勤めをしていた頃、この一言で交際の女から縁を切られた。ファシリティ送りが目に見えていたから。ここは俺にとって居心地の悪い場所ではない。それでも、どこか苛立っていないと平静を保てない。

「おしり」をプッシュする。「前」を連打した。俺の肛門は一般的なニンゲンとポジションがズレているのだろう。洗浄位置を最前にしても噴水が肛門を射抜くことがない。深く便座に腰掛け、温水が吹き上がる方へと肛門を運んだ。

「うふう」

どうにかベストポジションを捜し当て、不拔けた声を漏らす。至福の時に目を細めた。

便所を後にすると、晴山が壁にもたれて腕を組んでいた。

「なにサボってんだよ」

言われる前に言ってる。

「便秘でもしてんのか？」

晴山は薄ら笑いを浮かべた。

「至って快便だ」

「あんまりサボってつと、いつまでもここから出られないぞ」

「出る気なんてない。何度も言ってるだろう。訓練をこなすだけで三度の飯が食えるんだ。何の不都合がある？」

「退屈するだろう」

「携帯でも眺めていれば」

それで十分だと言いかけたところで、ひび割れたディスプレイを思い出す。俺の溜め息に晴山は首を傾げる。構わず歩き出せば、あいつも肩を並べた。

「おまえに言っても全く自慢にならないかも知れんが、CPCへの出向が決まったよ」

そいつを垂れたかったようだ。

「めでたいな」

美容整形に再生医療技術が広まり、セル・プロセッシング・センターのテクニシャン需要が増えている。「栗栖ほどの技術はないけどな。思ったより辺鄙なところでもなかったから、志願してみたんだ。安アパートでも借りて細々やるさ」

「瑞樹は？」

晴山は目を丸める。

「そんなこと心配してくれるのか？」

「これでもヒトの親なんだよ」

「アンドロイドじゃねえかと疑うがな」

「機械が便所でサボるか？」

「そりゃそうだ」晴山の笑い声が廊下に響く。「瑞樹とはしばらくお別れだけだな。たまには外出届を出して遊びに来てくれるだろう。そうそう。あいつ、面白いこと言うんだよ。人生ってのは交通費を稼ぐことなんだって」

面白いかどうかは別にして、どこか引かかる言葉だ。

「ある程度蓄えができたなら、あいつを扶養に入れてさ」

晴山は両腕を持ち上げて関節を鳴らす。俺は自然と笑みになる。

「夢があるな」

「多少は自慢になったか？」

小さく頷けば、晴山は満足げな表情を浮かべた。

そして、俺たちは二重扉の前に立ち止まる。携帯端末をタッチして一枚目の扉を潜る。ディスプレイのラポコートを羽織って、不織布キャップを被ったら二枚目の扉を潜る。二三度に保たれた作業場でニトリルグローブをはめると、エタノールでこすった手を振った。

インキュベーターから取り出したディッシュを安全キャビネットに並べると、電動アスピレーターで液体培地を抜き取り、PBSバッファーで軽く洗浄、ディッシュの底に張り付いた培養細胞たちを酵素で剥がしとり、その一部を新鮮な培地とともに新たなディッシュへ植え継ぐ。二、三度繰り返しれば誰にだってできる単純作業だ。それでも、一日に一〇〇も二〇〇も繰り返し返すとなれば話は別、無心に成り下がるスキルがなにより必要とされる。

「訓練だっ、訓練だっ、訓練だっ」

連呼する指導員の声が、晩夏の蟬のように耳を打つ。アンドロイドなんじゃねえかと揶揄する晴山の声を思い返し、自分が万能細胞で造られた有機ロボットである可能性を考える。それでも幼少期の記憶がある。世界はどこまでも窮屈で、つまらぬ欲を出す。作業をこなすための有機ロボットならば、厄介なメモリーを大脳皮質に組み込まないでほしい。所詮、凡庸なニンゲン。ロボットに成り下がることは容易でない。一〇〇枚のディッシュをコンタミなく完遂させるとようやく終業のベルが鳴った。

腱鞘炎の腕を振ってラポコートを脱ぎ捨てると、再び晴山の声がかかる。

「お疲れ。香澄ちゃんは元気しているのか？」

自慢話の続きかと思えば、妻の名前が飛び出した。

「瑞樹の心配をしてもらったのに、これを聞くのを忘れていたよ」

そんな催促をしたつもりはない。ファシリティで知り合った妻は入籍した翌年に出ていった。別居生活も五年ほど経つ。

「寂しがつているだろう」

「克丸とのんびりとやってるんじゃないか？」

「あんまり寂しがりそうにもないか。でも、のんびりというのはよくない。またファシリティに戻される」

「あいつが戻ることはないよ」

「まだ描いているのか？」

俺が頷くと、あいつは思い出したように携帯端末を取り出した。流れるような操作に続いて、俺の端末が震えだす。ポケットからそいつを取り出せば、ひび割れたディスプレイから晴山の名前が読みとれた。

「やっぱり。さっき便所で携帯落としたろう」

俺は鼻を鳴らす。

「また始末書だよ」

「おまえ意外とそういうところあるよな。何度目だ？」

部屋に置かれたラップトップからワークフローを入力すれば交換品が届く。端末を破損させた場所や状況を入力する必要があるが、承認されなかったことはない。

「独房に帰って、始末書でも書くか」

作り笑顔を交わして別れた。部屋へ向かう廊下で瑞樹と三日月に鉢合わせる。指導員の三日月は、長いケツ顎を彼女の頬に突き刺さんばかりにして、嫌らしい笑みを浮かべていた。瑞樹は俺に気づくと、助けを求めるように声を発した。

「あ、栗栖う」

愛らしい声に自然と手のひらが踊る。三日月は瑞樹を背中に隠すように立ちはだかった。ケツ顎を撫でながら、こちらが望みもしない笑みを浮かべる。

「今日もいい仕事ぶりだったな」

やりがいのないことを評価されたところで、苦笑いしかない。俺は必死にそいつを噛み殺し、小さく頭を下げる。

「どうも」

「その『どうも』はどんな意味なんだ？」

『どうも』というのは、この国を渡り歩く上で非常に便利な言葉だ。時に『ありがとう』、時に『こんにちは』、時に『さようなら』、場面に応じて何とでも解釈される。『さようなら』だと思ってもらえればよかった。

「指導員様に褒めていただいたんだ。『ありがとう』に決まっているでしょう」

心にもないことを口にすれば、さすがのあいつも眉を顰める。

「おまえはいつになったらここを出るんだよ。あの技量があればすぐ出られるだろう。なんで一向に志願しないだ？」

ポケットから携帯端末を取り出して話題を逸らす。

「またやっちゃいました」

三日月は目を剥く。芝居じみた素振りで長い顔を手で覆い何度も首を振った。

「今年で何回目だ？ そんなんだからいつまでもここを出られないんだよ」

志願しないからではなかったか。

「すぐに始末書出します」

あいつに倣い、芝居がかった仕草で直角に頭を垂れる。

「いいからもう行け」

三日月は犬でも追い払うように手首を振った。俺はその暑苦しい顔を一瞥して脇をすり抜ける。瑞樹も後に続いた。

「あの指導員は好かん」

「背中に鼻糞でも付けてやりたい」

俺は小さく笑いをこぼした。

「ほじったら付けてきてやるよ」

好ましい回答ではなかったようだ。瑞樹は口元を歪めた。

部屋に戻り、コンピューターを立ち上げながら顔を洗う。始末書はお気に入りに登録されているからワン・クリックで辿り着ける。

「便所、不注意、で、なんか文句あるか」

どんな内容を入力しても、お咎めを受けたことはなかった。なんとか晴山のせいだというニュアンスを残したいが、便所で名前を呼ばただけだ。考えるのも億劫になって申請を上げた。続いて、外出届の承認状況を確認する。

「オッケー」

週末には外に出させてもらえるようだ。

テーブルに置かれた携帯端末が震え出す。ひび割れた画面には「香澄」と表示されていた。

さつき腹筋二七〇回したわ

妻からこんなメッセージが届いたらなんと返信すべきか。口を尖らせ頭を捻れば夕食を告げるチャイムが響いた。携帯端末を握って部屋を出る。いくつものドアが一斉に開き、白い顔に坊ちゃん刈りを載せた連中が廊下に溢れ出た。

「よう、栗栖。また携帯割ったんだってな」

隣室のタムケルがにやけた。晴山のやつ。あいつはデカイ形して無遠慮にデカイ掌を振り下ろす。俺は顔を顰めてタムケルを見上げた。

「肩が抜けるだろ」

「毎回少しずつ力を加えてみるんだが、意外と平気なもんだな」

「ヒトの身体で妙なことを試してくれるな」

デカイ顔に柔和な笑みを浮かべる。得な性格だよ。俺たちは肩を並べて食堂へ向かった。ひび割れた携帯画面をタムケルに見せる。

「バリバリだな」

「違う。メッセージを見てしろ」

タムケルは蜘蛛の巣に隠れた暗号文に目を細める。

「腹筋二七〇回？」

「妻からだ。なんて返信すればいいと思う？」

「俺は毎日五〇〇回してるぞ」

「おまえはいったい何を目指しているんだ？」

「単純作業に明け暮れていると、筋肉が疼くだろう」

筋肉馬鹿という四字熟語を必死に飲み込む。

「この前、廊下でジョギングしてたろ」

「指導員によく怒られるよ」

「小学生かよ」

「さっきのいいんじゃないか？」

「なにが？」

「おまえはいったい何を目指しているんだ？ 嫁さんにそう返してやれよ」

「なるほど」

すぐに香澄の返信が返ってきた。

私の筋肉が疼くのよ

最近流行っているのか？

食堂にはファシリティの連中が列をなす。専任のおかっぱが、一五〇グラムの白米、一六〇CCの味噌汁、一三〇グラムのコールスローを目分量で測り取る。ここに当番制というものはない。食事をつくる者、配る者、便所掃除であれ、廊下のポリッシャー掛けであれ、全てが専攻科目だ。未来のトングマスターが一切れのチキンを載せた。

長テーブルにタムケルと肩を並べて席につく。座る場所はいつも通り、視線の先には晴山と瑞樹がいた。二人は飽きもせず微笑みをぶつけ合う。あいつらと一緒に飯を食ったこともあったが、いつまでもダラダラ箸をしゃぶっているのに嫌気がさした。

タムケルは見た目を裏切らずよく食べる。二回転は常だ。俺たちは食器の音を響かせながら黙々と食い物を口へ運んだ。大口を開いて白米を放り込む。筋肉がエネルギーを欲するんだよ。さあ食べる。やれ食べる。満たされた俺は頬杖をついてあいつの大口に魅入る。世界を絞り込み、視界いっぱいタムケルの口元を映し出す。大きく開かれた口腔に白米が放り込まれ、窄んだ唇から味噌汁が吸い込まれる。強靱な顎と鋭利な前歯で鶏肉が切り取られ、窄んだ唇が引き離す。瞬時の判断で的確な動作が繰り返されていく。

取り込まれた食いは糖質やアミノ酸に分解され、タムケルは動きはじめる。細胞は肥大と分裂を繰り返し体躯は膨張を続ける。タムケルの満腹中枢は崩壊し、閃光のような笑みが迸る。それでもまだ足りないぞ。膨張の果てに収縮がはじまる。満腹中枢がもたらす強大な重力によってあいつは押し潰される。空間までもが歪みはじめると、ついには物体という物体はもちろん光すらも脱出できない奇妙な空間が生まれる。はくちょう座Xのように。銀河系中心のように。タムケルを中心に世界は渦巻く。おかっぱ

どもは打ち上げられ、俺も耐えきれず飲み込まれる。

ファシリティの重たいゲートが開くと、週末に吐き出された。人生ってのは交通費を稼ぐことだね。どこかで聞いた言葉を思い出す。俺は守衛に頭を下げて一步踏み出す。舗装された道の両脇には背を高くしたオオキンケイギク。克丸の顔を思い浮かべた。以前、あいつと何か約束した気がするのだ。ファシリティの僅かな収入と妻のパートタイム労働で、一人息子を養っている。香澄は訳あってファシリティを追いつけられた。俺たちは大きなジャンプを望まず、他人様に面倒をかけない存在であるべきだった。彼女には耐えがたいことだった。

「人生ってのは交通費を稼ぐことだね」

自動改札をくぐる度にそいつを呟く。駅構内にはクレヨンで描かれた乗車マナーのポスター。「譲られたら座ってあげよう」なんて教育が功を奏した標語。そのうち「座ってもらえなくても腹を立てるな」なんてポスターが出てくるだろう。

二回乗り継いで地元の空気を吸い込む。駅前の小さなロータリーでは『憲法十八条を叫ぶ会』とたすきが掛けした若者たち。男は肩掛けの小さなアンプにエレキギターをつないで聞き覚えのあるリフレインを弾いている。拡声器を握った女が虹色のアフロヘアーを被って条文を叫んでいた。

何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない。

簡素なアパートの鉄階段を上り、二度ノックしてからドアノブを引いた。小さな台所の向こうに首を伸ばせば、俺の帰りに気づいていないのか、香澄は克丸とじゃれていた。穏やかな笑みを浮かべながら息子の首に腕を回す。克丸は艶のある黒髪を見せたまま振り返ることもない。イーゼルに立てかけられたキャンバスには香澄が描いた不可解な油絵。女の股座から広がる宇宙。子宮からはじまる物語を一枚の絵にするとなんだか陳腐なものに仕上がる。

「克丸の中には六〇兆個の星があって、あなたの宇宙が構成されているの」

あいつは変わらない。俺が小さい時に思い描いた世界が香澄の中にもあること知った時は子供のようにはしゃいだもんだ。いつまでもそんな絵空事を聞かされていれば歯が浮く。いずれ総入れ歯になりかねない。

「まったく、人生ってのは交通費を稼ぐことだよ」

俺は靴を脱いで居間へ向かう。

「何それ？」

彼女は視線を上げた。

「香澄が言ったんじゃないか？」

「キミが言いそうだけど」

克丸の頭に手を伸ばすと大量の汗で濡れていた。

「調子が悪いのか？」

真っ赤な顔で寝息を立てている。

「熱出してね。さっきまで布団で寝てただけど、寝ぼけて起きてきた」

「そんな小僧に細胞が六〇兆個だとか、身体の中には宇宙があるかと話していたのか？」

「すぐ寝たけどね」

絵空事でもなにかの役には立つ。俺は発熱体を受け取って寝室へ運んだ。濡れた額を親指で拭って居間へ戻った。腕を組んで香澄を足元から眺める。

「なに？」

これと言って変わった様子はない。どんなマッチョに変わり果てたか楽しみにしていたが期待は外れた。香澄は女の股座と宇宙が描かれたキャンバスをテーブルの上に寝かせて、イーゼルを畳んだ。

「売れてる？」

「イラストの依頼が来たくらい。作品はなかなか」

「たいしたもんだ」

香澄はタイトなTシャツにガウチョパンツ。一枚のレコードに針を落とすと、素人には手拍子すら難しいフラメンコギター。香澄の身体は直ぐに応答した。背筋を伸ばし、小刻みにステップを踏む。

「あの子楽しみにしていたのに」

激しい舞踏（バイレ）、掻き鳴らされる六弦琴（トケ）、喉を震わせる歌唱（カンテ）、フラメンコはそれらの要素からなる総合芸術。

「前に帰ってきた時、鉄道博物館に行くって約束したじゃない？」

中世の蛮族侵入の時代に、ゲルマン系ヴァンダル人が攻め入ったことから始まるアンダルシア。

「克丸、弟と妹が欲しいみたいよ」

さらにはムーア人がもたらしたイスラム系・東方系の文化が交じり合い、独自の歌と踊りの国を作り上げる。

「いいお兄ちゃんになると思わない？」

そして、どこかオリエンタルな響きは、北インドのロマニ系ジプシーによるものだ。

「もう一回くらいなら産んでみたいとも思う」

異質、異教徒の流れ者となれば、迫害のまなざしを向けられそうなものだが、アンダルシア人とは馬が合った。やがて、彼らは民俗芸能の融合を果たすことになる。

「克丸の時、人工受精で帝王切開だったじゃない。普通にこなしてみたい。そんな思いもあるんだよ」

俺はソファに腰を下ろす。

「下唇を被るくらい辛いんだろう？」

弾けないギターを弾くんだけ。見えないギターを弾くんだよ。ステップを踏み続ける香澄。一見すると俺のギターに合わせているようだが、音楽の一瞬だけ先を踊っている。俺は伴奏をしているようで、香澄が俺を伴（つ）れている。スリリングな緊張感の中、三日月の嫌らしい笑みが紛れ込む。ふと怒りがこみ上げ、弾けないギターを振り上げる。見えないギターを床に叩きつけた。

ファシリティに戻ればなんだか空気が変わっていた。晴山が出ていったせいではない。おかっぱ頭が一人減ったくらい大した変化ではない。朝六時の起床ラッパには驚いた。ベッドから転げ落ち、何ごとかと廊下に顔を出せば、おかっぱ頭に白つなぎの集団がタオルを握って走っている。防災訓練でも予定していたかしら。目立ってはならないと皆に倣って行動する。部屋からタオルを引っ張り出し、おかっ

ばどにも続いた。

広場には男しかいなかった。皆一様につなぎを下ろして上半身裸になる。「一、二、一、二」と声を掛けながらタオルで乾布摩擦をはじめた。俺は状況を読み込めず、タオルを握って呆然と立ち尽くす。宿舍から大男の影が現れた。シルエットだけでタムケルと分かる。

「全体、気を付けっ」

野太い声が響き渡ると、おかっぱどもは乾布摩擦を止めてつなぎを正した。広場の東に立つおかっぱどもが南北へ一列に並びはじめる。

「右へ倣えっ」

続いておかっぱども右手を腰に当てながら東西に並びはじめる。マスゲームのような規律訓練ははじめてだ。

「皆、異常ないかっ」

「異常なしっ」

「皆、異常ないかっ」

「異常なしっ」

「そこおっ、声が小さいっ」

タムケルは鬼軍曹を気取ってフランクフルトと見紛う指を突き出した。俺はその指先から放たれた力にひっくり返る。

「腕立て伏せの姿勢を取れっ」

俺たちは操り人形。タムケルがカウントをはじめると、広場のおかっぱどもは揃って腕立て伏せをはじめた。二〇回もせずに崩れる落ちる奴がいる。三〇回を越えた頃に俺が蹲れば、タムケルは幾分満足したようだ。

「よし、立てえっ。皆、異常ないかっ」

「異常なしっ」

再びラッパの音が響く。今度は何だと見回せば、皆、弛緩し切った表情で宿舍へ戻っていった。俺は頭が混乱したまま、おかっぱどもを見送る。この状況を説明してもらいたいが晴山はいない。タムケルに聞いたところでまともな回答が得られると思えない。ひとまず部屋へ戻り、頼りのコンピューターを立ち上げた。予定表を見る限り変わりはないようだ。

「瑞樹に聞くか」

思いがけず運動を強いられ、久しぶりの空腹感で食堂に向かった。瑞樹の背中を探すが、嫌なものほどよく目につく。後ろ手を組んだ三日月が仁王立ちしていた。

「なんだか久しぶりに見る気がするが、おまえはまだここにいたのか」

「どうも」

俺は小さく頭を下げ、小走りにその脇を抜けた。「どうも」の意味を問われた気もするが、構わず食堂へ向かった。

「栗栖う」

瑞樹はいっただって期待を裏切らない。俺は急ブレーキをかけて笑顔で振り返った。弛緩しきった顔に

彼女は怪訝な表情を浮かべた。

「朝っぱらから三日月に会っちゃってな」

「あいつ暇そうにしてたね」

肩を並べて廊下を歩いた。

「晴山が出て行って、寂しくなったな」

瑞樹は口角を持ち上げて首を振る。

「会いに行けばいいだけよ」

「瑞樹は無駄が無いな」

「栗栖うだって香澄さんに会いに行ったんでしょ」

瑞樹がこのファシリティに送られてきた頃、香澄は既に追い出されていた。二人に接点はない。

ファシリティに送り込まれたばかりの香澄は、訓練が終わると誰に愚痴を漏らすでもなく部屋へ籠もった。はじめての会いは毎度のように俺が携帯を無くした夜のこと。廊下で出くわした彼女に携帯番号をコールしてもらったのだ。

「なかなかうまくやるもんだ」

晴山は感心していたが、そんなつもりはない。結局、携帯はベッドの上で見つかった。サンキューメールを送信すれば、妙な写真が送られてきた。スルーできるほどの関係性はない。気味の悪い絵画だと思いつつも賛美する。それ以来、香澄は作品ができるたびに写真を送ってくるようになった。

いつまでも部屋で大人しく絵を描いていればよかったのだが、ある日、白のつなぎを肌色に塗りかえ、乳房や局部を描いて食堂に現れた。誰もそんなことをする女だと気付いていなかった。気の迷いだろうと一週間の懲罰房で済まされた。処分が空けた日、裸体に真っ白なつなぎをペインティングして食堂に現れた。役人や俺を含めた全てのおかっぱは哑然、即日追放となった。ここは刑務所でない。追い出されたものは社会から見放され、あいつにはもう芸術くらいしか生きる術がない。

「人生ってのは交通費を稼ぐことなんだって？」

「晴山から聞いたんでしょ？」

「瑞樹が言ったんだろ？」

瑞樹は首を振る。

「晴山は言い張るけど、言っていないんだよ。ヒトが動くとお金がかかるって、お祖母ちゃんが言った。交通費を稼ぐのが人生なんて、そんな訳ないでしょう」

そんな訳ないのか。

食堂に辿り着けば一際大きなエネルギーを放つ男が目につく。デカイ顔に柔和な笑みを浮かべて、朝食に向き合うタムケオ。あいつの周りには指導員連中が取り囲んでいた。その中でも三日月は抜群に顔が長い。俺と瑞樹はプレートを手に取り、配膳の列に加わる。

「タムケオのやつ、指導員にでも志願したのかね」

「ここに送られる前は自衛官だったって聞いたけど」

そいつは俺の知らないタムケルの過去だった。

「栗栖うは、他人に興味が無いからね」

配膳の列は進み、一五〇グラムの白米、一六〇CCコンソメスープ、一三〇グラムのマカロニサラダが盛り付けられる。そして、トングマスターにより一切れのムニエルがのせられた。

「自衛隊に戻るのか？」

アタシガシッテルワケナイデショ。顔に描かれていた。ふと駅前で声を上げていた若者たちを思い出す。

「街は徴兵制度反対で盛り上がってんな」

元陸上自衛官の防衛大臣は、平和安全法制特別委員会で示された内部資料について、「法案の内容を丁寧に説明するとともに、今後、具体化すべき検討課題を整理したもので、統幕として当然必要な分析研究をした」と語った。SNSで摘まみ食いた情報だ。なんのことやら咀嚼し切れていない。

「今年にも徴兵制度法案が成立して、半年後には施行だって」

俺たちは向かい合ってテーブルにつく。

「憲法十八条を叫んでる奴らを見たよ」

「徴兵制は意に反した奴隷的な苦役じゃないらしいよ。国を守ることが苦役でどうするんだあって」

「苦役だなあ」

「栗栖うは、なんにも興味無いもんね」

反論の余地は無く、喉に米を詰まらせる。吐き出すよりもコンソメスープで流し込んだ。

「それで、元自衛官のタムケルは何するつもりか」

「私が聞きたいよ。本当になんにも知らないんだから」

罪悪感に包まれ俺はどうにか言葉を捻り出す。

「まあ、でも、なんだ。そのナンチャラ法案がらみの動きなんだろう。統合幕僚監部としては、当然必要な分析研究というものがあるらしい」

「なにほれ？」

瑞樹はムニエルを齧りながら首を傾げる。それ以上の言葉が続かずマカロニサラダを頬張った。いつだって言葉ばかりが先行し、何がはじまるのかその実情は当人すら知らない。中庸がウリの俺たちだ、分析研究の試料としては申し分ない。タムケルだって丸め込まれたのだろうが、何もかもが体制の言いなりでは面白くない。

大口を開けて飯を取り込むタムケルに視線を運べば、いつものように身体の肥大化と満腹中枢の崩壊が進んでいる。巨大な重力を獲得した中枢は、タムケル自身を押し潰し、取り巻きの指導員たちを次々と吸い寄せていく。空間が歪み始め、三日月ご自慢の顎が渦を巻きはじめる。発せられるがなり声はもうこちらには届かない。俺たちを取り巻く空間は引き伸ばされ、時間の進みが極端に遅くなっていく。食堂にいるおかつぱどもを巻き込み、否が応でも満腹中枢に引きずり込まれていく。途轍もない力を前にしても、時間の流れは緩やかで、どこか緊張感に欠ける。タムケルはまだ満ち足りない。

「ちょっとマズいんじゃないか」

ここにはいないはずの晴山が姿を見せる。

どうもバランスが悪い。

直ぐに来てほしい

俺は香澄にメッセージを送った。濃厚な気配に続いて、空を覆っていた雲が割れた。雷鳴のような音

を轟かせながら、空を覆うとてつもなく大きい女が、仰向けになって飛んでいる。首を後ろに折り、口からジェット噴射を吐き出している。翼のように広げられた両腕、蟹股に広げられた足、そして、爪先をぴんと張り、空飛ぶ航空母艦といった様相だ。

広げられた両腿の空間を股座と呼ぶ。帝王切開の傷跡が残るその先に広がる股座は空間と呼ぶには未成熟な混沌。ゼロにはならない確率で突如として規律が生まれ、俺たちは時間と空間が誕生の瞬間を目にする。たった六〇兆個の星からなる宇宙。星々をつないでいくと、克丸という名の銀河が現れた。俺は両腕を広げる。そして、産み落とされた小宇宙を、ありったけの愛情を込めて抱き止めた。

「射撃は自衛官の基本だから、訓練はもっと多くあったほうがいいんだ」

タムケルは満腹中枢から懸命に音を発する。

「軍行と言ったって高々一〇キロじゃないか。装備を担いで歩くにしても、こんな平地で一体何の訓練になる。富士演習場の山岳コースとは訳が違う。夜間だろうが山中を地図と磁石だけで歩くんだ。野営テントを張って、塹壕を掘って」

タムケルはなおも食料を詰め続ける。さあタムケル、どんどん食べろ。細胞の肥大と分裂が進み、身体は収縮に抗う。

「おまえ、妙な培養肉でも食わせたらう」

晴山が疑いの目を向ける。

「タムケルの才能の開花だよ」

食堂には奇妙な二つの天体。タムケルが全てを飲み込むブラックホールであれば、香澄は僅かな確率で物質を吐き出すホワイトホール。食堂に集まったおかつぱどもは、渦巻く天体の波にのまれて歪んだ空に漂った。俺と晴山は克丸の巨大な質量で、何とか踏みとどまる。未成熟な流れは嵐のように吹き荒れ、その中に一滴の涙が煌めいた。

「嗚呼、瑞樹が吞まれていく」

「瑞樹はとてもいい子だった」

「好きだと言えればいいじゃないか」

「馬鹿言うな。女房の手前だぞ」

俺が声を潜めれば、晴山は鼻を鳴らす。

「俺が許すと思うのか？」

「ならばどうする？」

晴山はバックパック式の火炎放射器を背負っていた。

「陸上自衛隊は日本住血吸虫の殲滅作戦だってやるんだぜ」

「おまえCPCじゃなかったのか？」

銃口を空高く香澄に向け、着火させたゲル化ガソリンを圧縮ガスで解き放った。大きな火柱が立ち上がると、巨大な香澄は次第に炎に包まれていく。俺は目を剥く。克丸を抱えて、トケ・フラメンコを奏でる。弾けないギターを弾くんだけ。見えないギターを弾くんだよ。燃え盛る香澄は克丸の謔言にあわせてバイレ・フラメンコを踏み出した。

フラメンコの語源には諸説ある。一説には、スペイン語で「炎」を意味する「フラマ」から派生した。

また一説には、ジプシーたちが使う言葉として「フラメアンテ」という隠語があり、それがいつしか「フラメンコ」に変化した。それは「派手な」「気性の激しい」「無頼で気取った」といった性格を示すもので、香澄は光さえ吸い込まれた世界を照らし出すフラメンコ。そして、香澄は音楽の一瞬だけ先を踏む。俺は伴奏をしているようで、香澄が俺を伴（つ）れている。

タムケルは夜空を無尽蔵に舞うおかつぱどもが気に入らない。

「全体、気を付けっ」

おかつぱどもは強大な力を前になす術がない。

「皆、異常ないかつ」

「異常なしっ」

「皆、異常ないかつ」

「異常なしっ」

タムケルは成熟していない。俺は声を張り上げた。

「異常はあるっ」

巨大な香澄に対して、あいつはまったくバランスが悪い。

「そこおっ、声が小さいっ」

タムケルは鬼軍曹の形相でフランクフルトを突き付けた。俺は放たれた力に、克丸の質量で持ちこたえる。

「異常はあるっ」

「もっと食べろ、タムケル。おまえはまだまだ熟していない」

高圧縮されたタムケルの中心には、物質同士の異常接近による特異点が形成される。

「いいぞ、タムケル」

あいつの周辺に事象の地平線が見えてきた。その時、晴山の背負っていたボンベの圧縮ガスが切れた。一本の炎で香澄とつながれていた晴山は、その反動で弾き飛ばされ、成熟しつつある流れに飲まれた。俺はそれを見送る。

「あそこを越えたら、物体という物体はもちろん、光すら脱出できない」

晴山は泣いていた。

「瑞樹は吞まれた」

晴山は地平線の向こうで引き伸ばされる。

「見ろよ」

空には香澄からタムケルへ一方向の流れが出来上がっている。おかつぱどもはタムケルに飲まれていく。規律が生まれ、世界が成熟しつつある。

「俺たちはどうなるんだ？」

適切な言葉を探していれば母艦から声がする。絵本を読み聞かせる母の声。

「たばたものは、きれいなどろになってでてきた。そうして、どこまでもひろがっていった。どこまでもどこまでも、やがてみどりのだいちになり、ずうっとむかしにもどってしまった」 ※『みみずのオッサン』長新太

克丸がキャッキヤと声を上げた。それはとても素晴らしいことだと思う。克丸が望む世界には帰り道が必要だ。

タムケルに飛び込んだものたちを、出口から拾い上げてほしい

俺は香澄にメッセージを送る。成熟しはじめたシステムを見渡す。香澄とタムケルが生み出す天の川には嫉妬する。おかっぱどもは大きな流れの先で事象の地平線を踏み越える。緩やかに引き延ばされながらタムケルの満腹中枢へ向かう。最小単位まで分解されたものは、きれいなどろになってでるだろう。そうして、どこまでもひろがっていく。どこまでも。どこまでも。鮮やかな彼の地で土になりな。おまえたちを肥やしにオオキンケイギクは咲き誇る。まだ若く、体の柔らかなツムシが跳ねる。

タムケルは極限まで凝集し、もうその姿を拝むことはできない。光も吞まれた空で香澄は大きく頬笑んだ。俺たちはもう離れることはない。どこまで行っても、空を見上げれば香澄がいる。克丸の手を取り歩いている。

「克丸、弟と妹が欲しいみたいよ」

「いいお兄ちゃんになると思うよ」

香澄はタムケルの出口とつながった。ゆっくりと広がる両腿。股座に生まれる新たな双子の銀河。たった六〇兆個の星からなる晴山と瑞樹。俺と克丸は夜空に両手を伸ばし、産み落とされる二つの命を抱きしめた。

「可愛いね」克丸は言う。

「可愛いな」俺は言う。

「あの子楽しみにしていたのに」香澄は言う。

俺は首を傾げる。

「この前帰ってきた時、鉄道博物館に行くって約束したじゃない？」

そうだった。俺たちは大人しく訓練を積みめばいい。このファシリティでは面倒を起こさない輩が何より重宝される。来月にはまたわずかな給料が振り込まれるだろう。そうしたら再び外出届をだそうか。人生ってのは交通費を稼ぐことなんだよ。

死ねるおまえら

羨ましい。もうすぐ死ねるおまえらのことが本当に羨ましい。これから起こるニンゲン対シゼンの戦争のことなんて何も気にする必要などないのだから。おまえらは宣戦布告したまま死んでいく。俺たちにツケを残して、甘い汁だけチューチュー吸って死んでく。俺たちが何をした。おまえたちの人生にしてみれば、五分の一度度しか存在していない俺たちだ。なんの力もない俺たちだ。おまえたちの年金を支えることもしていない俺に、文句を言う資格はないか。おまえたちに育ててもらった覚えもない。声を大にして言いたいけれど、おまえたちに生かされていることになっているらしい。そして、糞不味く

冷え切ったデリバリー型給食に耐え抜いて、俺たちはようやく義務教育を終える。

「これからどうすっか」

俺は椅子にまたがって背もたれに頬杖をつく。

「ひとまずココの墓参りに行こうよ」

「殺したやつぶん殴るか」

「のるかそるか」

田舎の婆ちゃんちに行った夏休み、ココは未曾有の豪雨による川の氾濫だか土砂崩れだかに吞まれて死んだ。海を見てくるなんて言い出したまま帰ってこなかった爺ちゃんを探しに外に出ちまったんだよ。婆ちゃんは止めたんだって言ってたらしいけど、止めらんなかったから死んだんだろう。ジルベはココに惚れていたからショックは俺なんかより遥かに大きい。

「ひとまずココの墓参りに行こうよ」

ジルベが言い出したんなら誰もノーなんて言えない。

「殺したやつぶん殴るか」

いつだって威勢のいいゴンゾーラだが、他人に暴力をふるった現場を見たことがない。

「のるかそるか」

メガロウは慣用句の使い方を間違える。

春休みにやるべきことは決まった。俺たちはココの墓参りに行く。

「どうやって行くかが問題だよな」

俺が芝居じみた顔で腕を組めば、ゴンゾーラはいとも簡単に解決する。

「ノガチンに車出してもらおうや」

技術の先生だ。だったと言ったほうが適切か。俺たちは国歌も市歌もレミオロメンも歌わされ、喉を嚥らして卒業したのだから。ネジには雄ネジと雌ネジがあって、なんで雄雌と呼ぶのか分かりやすく教えてくれた。頭はカリフラワーみたいで切手集めが趣味だった。俺も半年くらいはまったけれど、なんであんなものに小遣いを注ぎ込んでしまったのか、今となっては悔やまれる。

「おまえら世代はもっと怒っていい」

ココが死んだとき、担任以上に目を赤くして俺たちを諭してくれたのもノガチンだった。ココの墓参りに行きたいと言えば、車くらい出してくれるかもしれない。

「じゃ、頼むぞ。山岸」

ゴンゾーラは当たり前のように俺の背中を叩く。なんで俺がやらなければならない。

「こういうのは言い出しっぺがやるものだ」

言い出しっぺって、「これから何すっか」って口にしたただけだろう。

「ココの墓参りがしたいと言いだしたのはジルベじゃねえか」

ちらり視線を運べば、なんだよおまえ、もう泣きそうじゃねえか。

「善は急げだ」

メガロウは慣用句で押し通す。俺がノガチンに車を出すよう交渉する。その線に反対意見は出ないようだ。そりゃそうだろう。誰にとっても交渉というやつは面倒だ。俺にだってもちろん。

「大体、ココの墓ってどこにあるんだよ」

「ココが吞まれた親父さんの実家近くだ。場所は聞いてある」

糞、知ってんのかよ。面倒なことは明日に回したいが、校門を出たら俺たちはもう部外者だ。ノガチンが無理を聴いてくれるのも今日が最後かもしれない。

「ジルベは一緒に来いよ。場所知ってんのおまえだけだろう」

俺たちは教室を後にした。廊下には両手を取り合って涙する女子がいる。今生の別れじゃあるまいし大げさなんだよ。マコは一人ぼんやりと外を眺めていた。ココの親友だった。声をかけようかと思ったけれどやめておく。話がややこしくなりそうだ。

「なあマコ、ココの墓参りに行かないか？」

やめとけよ。

「え、行きたい」

ややこしくなりそうだ。ノガチンに車を出してもらうつもりだと伝えると、マコはココの思い出話をはじめ、ジルベの涙腺が決壊した。

「なんであんな日に婆ちゃんなんかに行くんだよ」

大概みんな婆ちゃんちって言うよな。なんで爺ちゃんちっていう奴はいないんだ。どうでもいいことが頭を廻る。

「お爺ちゃんを助けようなんてココらしいけどね。私なら絶対しない」

マコは爺ちゃんと一緒に暮らしていたはずだ。助けてやれよ。ココの話はいつの間にやらマコの爺ちゃんの話にすり替わる。自分の娘でもないお母さんの食事に文句ばかりつけるサイテーな爺さんだそうだ。どこにでもありそうな話だ。

「私がホットケーキ焼いてあげたら、そんなものは食わないなんて言うし」

ややこしい爺さんのようだ。ジルベの涙もすっかり枯れ果てた頃、俺たちは技術準備室に辿り着いた。

「いるかな。ノガチン」

「いるんじゃない。担任持ってないし」

ノックをしても返事がない。俺はゆっくりとドアを開けた。いるじゃねえか。ノガチンは万力で挟んだ金属片にヤスリをかけていた。

「先生」

さすがに本人の前でノガチンとは呼ばない。

「おう、どうした？」

俺たちが今日で卒業することすら知らないのではないか。

「何作ってんすか？」

目を細めるとそれは骸骨のように見える。

「すごいだろう。真鍮を磨いて作ったスカルヘッドだ。シフトレバーのノブにしようと思ってな」

センスの悪さが露呈しているが、ノガチンから車の話題が出てきたのは好都合だった。

「先生の車、乗ってみたいな」

ジルベが大きくうなづく。そして、マコが一気に詰め寄った。

「行きたいところがあるんですよ」

ノガチンはヤスリを置いて眉を持ち上げる。

「どこ？」

ジルベが口にしたその場所にノガチンの声が裏返った。

「めっちゃ遠いじゃねえかよ。一日で往復なんかできないぞ」

「ココのお墓があるんだよ」

ノガチンは大きく息を吸って下唇をかんだ。俺たちは言葉を待った。

「おまえら三人か？」

「あとゴンゾーラとメガロウも一緒だと思う」

「無理無理。俺の車、どう頑張っても俺以外に三人しか乗れないよ」

「軽自動車？」

「馬鹿言うな。RX-7だ」

「知らんけど」

「我が国が誇るスポーツカーだよ。後部座席は拷問部屋って呼ばれてるけどな」

ジルベは俺に振り返る。

「ゴンゾーラとメガロウは置いていこう。いいだろう、山岸」

なぜ俺を説得しようとする。卒業早々、仲間割れというのもなんだが気分が悪い。

「日帰りとか言うなよ。一泊するんだったら、親に許可とって宿でも探さなきゃな」

途端に気分が沈む。親の許可なんか取れるものか。宿代をノガチンが払ってくれるわけでもないだろう。面倒臭いバロメーターが振り切った。

「無理無理。やっぱいいわ、ノガチン」

眉間に皺が寄り、往年のヤンキー顔が浮かび上がる。

「なんだ？ そのノガチンてのは」

真鍮のスカルヘッドをシフトレバーに付けようなんて男だ。根が昭和のヤンキーである。俺は深々と頭を下げて技術準備室から飛び出した。

羨ましい。もうすぐ死ぬるおまえらのことが本当に羨ましい。これから起こるニンゲン対ニンゲンの戦争のことなんて何も気にする必要などないのだから。おまえらは呷るだけ呷って、軍拡増税の末に武器を買い集める。俺たちを戦場に送り出して、高み見物を楽しんだら暖かい布団にくるまれて死んでいく。俺たちが何をした。おまえたちの人生にしてみれば、五分の一度度しか存在していない俺たちだ。投票権すらない俺たちだ。おまえたちのシナリオを書き換える権利がない。おまえたちのシナリオに犠牲者は明記されない。もうすぐ死ぬものだから一年で目に見える成果を上げないと不安でならない。身内の誰かが褒めてくれればすぐに満足してしまう。糞不味く冷え切ったデリバリー型給食は笑い話で済ませてあげる。でもさ、もううんざりなんだよ。俺たちは金輪際おまえたちの教育を受けるつもりなんてない。

「これからどうすっか」

俺は朝礼台に腰を下ろして足を組む。

「ココの墓参りには行こうよ」

「金巻き上げないとな」

「あんたがノガチンを怒らせるから」

「時は金なり」

親に許可をとれなんてつまらないことを言いやがる。ようやく義務教育を終えたと言うのにどうして好き勝手させてくれない。ジルベはスマホでココが眠る場所をルート検索。車があったら九時間三二分だ。歩いて行ったら五日と一五時間。阿呆のように長かった三年間を思えば五日と一五時間なんて大したことでもないように思える。それでも流石に歩き通す気にはなれない。

「ひとまずココの墓参りには行こうよ」

ジルベが引き下がらないなら、誰もノーなんて言えない。

「金巻き上げないとな」

ゴンゾーラは威勢のいいことを言うが、あいつが他人から金を巻き上げたところなんて見たことがない。

「あんたがノガチンを怒らせるから」

マコに痛いところをつかれて俺は鼻を鳴らす。

「時は金なり」

メガロウの慣用句になにか答えが隠れているような気もするが、恐らく気のせいだ。マコと墓参りに行くなら春休みのうちに済ませる必要がある。俺たちには無限に時間があっても、あいつは進学が決まっている。春休みなんて二週間もない。歩いて墓参りに行こうなんてものならば、寝ずに歩き続けなければならぬ。

「夜行バスもあるな」

ジルベはあきらめない。

「いくら？」

「片道で八千円くらいだ」

結局、金だよ。金目のものがどこかにないかと考えれば思い当たるものがある。そんなことゴンゾーラだって思いつく。

「切手ってまだ残ってるか？」

俺たちはノガチンに乗せられて切手集めをしていたではないか。

「それだよ」

「それでしょ」

「よし、マコの爺さんに頼もう」

マコは目をまるめる。

「は？ なんなのそれ？ あんたらが勝手に売りに行けばいいじゃない」

「未成年がモノ売れるわけないだろう。俺たちはブックオフで漫画本一冊すら売れないんだぞ」

「自分の親に頼みなさいよ。なんでウチの爺ィに頼まなきゃなんないわけ？」

「親は無理だ」

「俺も」

「任せておけ。マコの爺さんには顔が利く」

思いがけないところから声が上がった。メガロウは腕を組む。

「あんた何言ってるの？」

「マコの爺さんとは将棋仲間だ。ふれあい地区センターでよく対局している」

「あんただったの？」

マコは小声で呟く。思い当たる節があるようだ。

「頼んだぞ、メガロウ」

「明後日だ。明後日の一四時に約束がある」

「じゃあ、おまえに切手を託すぞ」

「おう。明日までに全部かき集めてもってこい」

マコはため息を漏らした。

そして、俺たちは地区センターの体育室で卓球をしている。

「うまくいくんかいな？」

「多分、大丈夫」

思いがけずマコのお墨付きが出た。爺さんが最近頻繁に出掛けていくことにマコは気付いていた。そして、夜になるとご機嫌に対局成績を語った。誰もがその話はさっきも聞いたと思っているが、機嫌のいい爺さんが夕食の時間を溶かしていく。それでも余計な一言は忘れない。

「醤油変わったかね」

ジルベはシェークハンドの握りかたを指摘する。俺は不必要に距離を取ってサーブを打つ。ゴンゾーラはバウンドしても変化のない回転をかける。できないからこそやるんだよ。一回の予約で四五分しかプレイできない。短いなと愚痴をこぼしても、やりはじめると意外と長い。試したい技は尽きた。俺たちはラリーで残りの時間を潰した。

「ところで将棋ってどんだけかかるんだ？」

「翌日持ち越しとかあるよな」

「俺だったら将棋盤ひっくり返すな。爺さん強いのか？　メガロウとの対戦成績どうなってんのよ？」

マコは突然のスマッシュ。

「全勝」

機嫌のいい爺さんを思えば、どちらとは聞くまでもない。

「時間でえす。卓球台をアルコールで拭いてくださあい。ラケットはこちらで消毒しまあす」

球が跳ねるだけの卓球台を拭く必要があるのか。俺は卓球玉を伝って緑色の台へと拡がっていくウィルスの逞しさを感じる。

卓球を終えた俺たちは、壁に身体を寄せて地区センターの廊下を進む。そして、ふれあいルームをこっそり覗きこんだ。

「メガロウと爺さんはまだやってんのか？」

将棋なんて延々やるものと思っていた。

「いなくね？」

マコが首をのぼす。

「いない」

俺たちは顔を見合わせた。マコは下唇を噛み、ジルベは下あごを突き出す。ゴンゾーラはぽかんと口を開け、俺も何かしなければと鼻の下を伸ばした。それでも慌てる必要はなかった。メガロウがうまくやっているのであれば、駅前ビルの「たからじま」に向かっているはずだ。線路の向こう、栄えていない北口に、宝石・ブランド品の買い取り専門店がある。スマホをスクロールすれば切手だって買い取ってくれると書いてあった。

線路をくぐって再び白い太陽を浴びると、雑居ビルから下りてくる人の姿があった。

「メガロウだ。爺さんもいる」

「ジルベ、おまえ目がいいな」

「五・〇」

「マジで？ 俺、一〇・八」

俺は三〇・六と言いかけて止めた。メガロウが俺たちに気づいて手を振った。マコは咄嗟に俺の後ろに隠れる。それだけで俺に惚れてんのかなと思う。

「何百万円だった？」

「果報は寝て待て」

メガロウは爺さんの一歩後ろを歩いてくる。

「で、いくらなんだよ」

「査定を待つて、金額は明日だ」

マコの爺さんは応えた。ジルベは深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

そうだった。何より礼が先だ。俺とゴンゾーラもジルベに負けないほど頭を垂らした。隠れていたはずのマコが顔を出す。

「見覚えのあるのがあるな」

爺さんは無表情で、マコも取りあえず頭を下げる。

「友達の墓参りをしたいというのは感心だ。でも、あまり期待しないほうがいいかもしれんぞ」

「最近、切手集めてる人少ないからねえ、なんて言われちゃったよ」

メガロウが付け加えた。爺さんは俺たちの横を抜けて歩き続ける。

「もう一局やるか」

メガロウは俺たちに手を振って地区センターへと戻っていった。

全部で一万円にもならなかった。

「切手集めなんて随分と古臭いことをしていたもんだな」

加齢臭のする爺さんに言われたくない。

「マクドナルドでも行くか」

奢ってもらえる予感に俺たちは顔を上げた。各自ドリンク一杯と全員でポテトのLサイズ一個。マコは爺さんに見えないよう手を合わせる。そして、済まなそうに眉を垂らした。奢ってもらえるものならば文句はない。爺さんはコーヒーを美味そうに啜る。ヒトの飯に文句を垂れるような爺さんには見えなかった。

「一〇〇円でおかわり自由なんてありがたい」
そんなサービスは聞いたことがない。俺たちはポテトを摘まんてからテーブルに金を広げる。何度数えたところで金額に変わりはない。

「八七六〇円」

切手収集は小さな美術館を建てるようなものだと言っていた。絵画の価値は落ちない。乗せられた俺たちが馬鹿だった。毎月のお小遣いを切手につき込んだ日々は何だったのか。「見返り美人」や「月に雁」への憧れ。男子たるものいつだって収集に熱中する。俺たち四人はトレカでもスニーカーでもなく、こんな時代に切手集めだった。

爺さんはコーヒーを啜って息を吐く。

「こいつは夜行バス一人分だぞ」

「一席に五人座ればOKか」

「俺たちはジルベの荷物だと言いつけるか」

「俺、ジルベのペットでもいいぞ」

「マコはジルベの愛人な」

「愛人は乗車賃かかるだろう」

爺さんの視線が刺さる。マコは明後日を向いたままだ。

「レンタカーという手がある」

思いがけず爺さんからの提案があがった。しかし、誰が運転するというのだ。切手を金に換えることができない。ハンドルを握ることも許されない。俺たちに足りないものは大人のライセンスだった。それでもテーブルに視線を落とせば切手が金に変わっていることに気付く。俺は顔を上げた。先ほどの問いを口にしてみる。

「誰が運転するというのだ」

爺さんは口角を持ち上げて親指を立てる。そいつを自分の胸に突き立てた。途端、マコの声が響いた。

「お爺ちゃん、免許返納しなかったの？ この前、事故起こしたじゃない。ダメダメダメ。絶対ダメ」

「この前って、何年も前だろう。あれはマコトの整備が悪かったんだよ」

マコのお父さんってマコっていうんだな。お母さんか？

「事故起こしてから何年も乗ってないってことでしょ」

俺たちの視線は右往左往。爺さんはポケットから取り出したライセンスを印籠のように突き出した。

「認知機能検査も高齢者講習も一発パスだ」

爺さんはマコを助手席に乗せてドライブした時、縁石に乗り上げる事故を起したそう。まだ小学生の頃だというから三年以上は昔のことらしい。通行人がいなかったから自損事故で済んだが、縁石がなかったら助手席のマコがただでは済まなかった。

「どうせブレーキとアクセルを踏み間違えましたって、あれでしょう？」

「あれはマコトの整備が悪かったんだ。そもそも最近のハイブリットナントカってのは無駄なものが多すぎるんだよ」

整備の問題ではなさそうだ。ジルベが立ち上がる。そして、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

マコは目を見開いた。

「あんた死ぬよ」

「ココのところにいけないのであれば構わない」

その意味する行先に不安を覚える。啞えたポテトが口から落ちた。

「開いた口が塞がらない」

爺さんも立ち上がる。印籠をポケットに戻すと、ジルベの手を握った。

「必ず連れて行ってやる」

背筋に寒気が走った。ホットコーヒーにしておくべきだった。コーンポタージュでもいいな。

あれだけ嫌がっていたマコもしっかり車に乗っていた。それでも助手席は断固として拒否、そこには将棋仲間のメガロウが座った。俺たちは後部座席に詰め込まれる。

「うしろ三人乗りなんじゃないの？」

「しかたねえだろ。六人乗りのワゴンなんて借りれなかったんだよ」

「車はこれくらいシンプルなバンに限る」

爺さんは久しぶりのハンドルにご満悦だ。

「下道だと一二時間以上かかるけど大丈夫っすか？」

「座ってハンドル握ってるだけだ」

車は疲れると聞くが、確かに座ってハンドルを回しているだけだろうとも思う。

「お爺さんそこ左」

勢いよくハンドルが切られ、早速、バンが縁石に乗り上げそうになる。

「急に言うやつがあるか」

爺さんの怒号が響く。後部座席の俺たちは押しつぶされ、マコは悲鳴を上げた。

「暗雲が立ち込める」

「ナビが悪い。次の信号を左とか言わんか。おまえは大体先を読むってことをしないから直ぐに詰まるんだよ。いつだって遊び駒が多すぎて縛りが全くなっていない」

カーナビの話はなぜか将棋の話題へ移っていった。俺たちは二人の話についていけず、メガロウに目配せする爺さんに前を向いてくれと祈るばかり。高速道路を走る金がないというのが唯一の救いだ。ダンプに突っ込みさえしなければ、事故ったとしても骨の三本くらいで許されるだろう。

ジルベはスマホでマップばかり眺めている。まだ走りはじめて一時間も経っていない。俺は反対に座るマコに問いかけた。

「マコは高校行って何するんだ？」

「なになって、友達作って、勉強して、中学校と別に変わらないんじゃない」

「部活はやらの？」

ゴンゾーラも加わる。

「多分やんない」

「バレーボールやってたよな？」

「私、ちっちゃいし、ココみたいに才能ないから」

「バイトは？」

「なんかうちの高校ダメみたい」

「どこでも基本的にはダメだろ？」

「知らないけど」

「俺、わりと高校説明会って行ったんだよ」

ゴンゾーラのくせに、そいつは意外だ。本当は高校に行きたかったんじゃないだろうか。俺はうまく口を挟むことができない。

「大体、特別な事情がない限りダメとか言うんだよ」

「特別な事情って？」

「バイトしないと死んじゃう病」

「なにそれ」

再び車が大きく曲がって俺たちはジルベを押しつぶす。爺さんの運転にも慣れたもんだ。

「あんたたち、なんで高校行かないの？」

ゴンゾーラが視線をパスする。そいつは俺が答えなければならぬか。どこから話すべきか言葉を探す。きっかけはテレビのドキュメンタリーかなんかだったと思う。海拔上昇によって水没していく群島。森が焼けてバーベキューになったコアラ。あと一〇年もせずに、この地球は取り返しをつかないことになるという。それなのに残念な大臣はミサイルや戦闘機にばかり金を使って、死ぬまで遊んで暮らすつもりだ。俺だって男子だ。収集癖があることに一定の理解はある。餓鬼の頃は、小遣い貯めてプラモデルなんかも買ったよ。戦闘機や軍艦を組み立てた記憶もある。でも、財布の金で満足しろよ。新たに税金巻き上げてトマホークなんて買う馬鹿いるかよ。

「ココが濁流に吞まれても平気でいられるニンゲンから、もう教育なんて受けたくないんだよ」

俺は多くを端折ってそこだけ伝えた。ジルベが頷く。

「で、これからどうすんの？」

卒業証書を受け取ったあの日、俺は仲間になんか尋ねたつもりだった。そこで出てきた言葉がこれだったわけだ。

「これからは墓参りだよ」

「その先のことを聞いてんでしょ」

そいつはまだ考えていない。

「ココにでも聞いてみるか」

「賛成」

ジルベはマップに目を落としたまま応えた。

「腹減って死にそうだな」

ゴンゾーラは言う。言われてみれば多少は腹が減った。

「マクドナルド行くか」

爺さんは言う。若いやつはマックを食わせておけば満足すると思ってるのだろう。

「俺、うどんとか食いたいけど」

ジルベはスマホで讃岐うどん屋を探しはじめる。硬い太麺のぶっかけに半熟卵の天ぶらとかサイコーだよな。俺は涎があふれる。ジルベの声は届かず、爺さんは見慣れた赤い看板を見つけるとおもむろにハンドルを切った。そして、俺たちはゴールデンアーチのかかったハンバーガー屋に連れていかれる。

「奢ってやるから心配すんな」

また、ポテトとジュースだけではないかと心配だ。俺たちはテーブルに押し込まれ、爺さんは一人カウスターへ向かった。

「マコの爺さんマック好きなのか？」

「知らない。一緒に行ったことなんてなかったし」

「飯に文句言うって割にはそんなにこだわりなさそうだよな」

「文句言うのが好きなだけじゃない」

今のところ文句を言われてはいないが、飯の選択権はないようだ。そして、爺さんは大量のマックバーガーとポテトが盛られたトレーを運んできた。なぜか店員を引き連れている。

「水は適当に並べてくれ。まったく餓鬼たちの腹を満たすのは大変だよ」

爺さんが山盛りのトレーをテーブルの中央に置くと、肌の白いニキビ面が水の入った紙コップを並べていく。

「バーガーは一人二個だ。それくらい食うだろう」

爺さんは自分だけコーヒーを啜ってハンバーガーにかぶりついた。ゴンゾーラはクチャクチャと音を立てる。

「口を閉じて食えと言われなかったのか？」

あいつは水を啜って、ポテトに手を伸ばした。

「おい」

ゴンゾーラは顔をあげる。

「あ？」

「クチャクチャするな」

「爺さん、ハンバーガー好きなんだな」

「モノが口に入っている間に喋るな」

俺はジルベと変顔を合わせた。マコは俯いたまま一本のポテトを齧り続ける。空気が凍てついていく。それでもゴンゾーラはお構いなしだ。

「爺さんはなんで飯の文句ばっか言うんだ？」

ゴンゾーラの直球は外角いっぱい。マコの顔が高潮する。

「飯の文句なんて言っていないだろう。おまえの食い方が汚いと言っているんだ」

「火に油を注ぐ」

メガロウは早くも二つ目のバーガーに手をつけた。

「でも、味が濃いか硬いか文句言うんだろう」

爺さんの視線がマコを刺す。

「味が濃かったことなどない。大体いっつも味が薄いんだよ」

俺の爺さんも高血圧だった。味の薄い飯と冷えた飯は二大不味い。奥歯に肉が詰まって水を呷った。

「ベロが死んでんじゃねえの」

ジルベが大笑いして、俺は盛大に噴水した。

「きったねえな、山岸」

ジルベはさらに大笑い。

「飯の上に吐き出すんじゃねえよ」

ゴンゾーラは自分が誘っておいで大いに不満そうだ。

「おまえらはどんな騷をされたんだ」

爺さんの追い打ちに、俺は驚掴みにしたポテトを口に押し込んだ。

「汚ねえと思うやつは食うんじゃねえ」

マコまでが非難の視線を浴びせてくる。その目は爺さんと似ていた。ジルベは危機を察してトレイを押さえ込む。俺がひっくり返すとも思っただろう。その通りだよ。俺は左手で掴んだ紙コップの水をジルベの顔面に浴びせると、右手で勢いよくトレイをひっくり返した。無数のポテトが晩秋の銀杏のように舞った。

「なんなんだ、おまえのその態度は」

爺さんが勢い良く立ち上がる。俺は深々と頭を下げマクドナルドから飛び出した。

飛び出したところで、ここがどこであるのか全く見当がつかない。俺は爺さんの運転するバンに乗り込むほかに、きっかけが掴めない。すると真っすぐにマコがやって来て、俺の頬を平手で張った。

「わけ分かんない」

そいつはこっちのセリフだ。

「痛ってえな」

「あんた、ノガチンから車出してもらおうとした時もいきなり態度変えて怒らせたでしょう。そういう餓鬼っぽい止めたほうがいいと思うよ」

ゴンゾーラが未開封のバーガーを俺に放った。

「いきなり切れんなよ」

弧を描くバーガーを叩き落とすべきか。ゴンゾーラが拳で自分の掌を打つ。俺は衝動を抑え込み、なんとかそいつをキャッチした。

「切れたわけじゃない」

俺の台詞をジルベが続けた。

「面倒臭くなっただけだ」

俺は鼻を鳴らして、バーガーを放る。ジルベはそいつを叩き落とした。俺は目を丸くする。次の瞬間、ジルベが声を張り上げながら突進してきた。俺は押し倒され駐車場のアスファルトに後頭部を強く打ち付けた。記憶がぶっ飛びそうになる俺に、ジルベが跨って声を上げている。俺を罵っているのだろうか。餓鬼みたいに不貞腐れているんじゃないかねえ。都合が悪くなるとすぐに逃げ出すんじゃないかねえ。自分一人が不幸みたいな面するんじゃないかねえ。何の取柄もないくせにリーダー面するんじゃないかねえ。頭がグラグラしてそいつがジルベの声であるのかすら分からない。ゴンゾーラの声のようにも、マコの声のようにも聞こえる。父親の声のようにも、自分の声であるようにも聞こえた。

どうにか目を開けると、ジルベは俺の襟首を捕まえて眼球の毛細血管を膨らませていた。

「こんなところで立ち止まらせんなよ」

ジルベが鼻を吸る。よく泣くヤツだよ。遠くで爺さんのがなり声が聞こえる。視線を向ければ、メガロウが背中から羽交い絞めにしていた。

「爺さん、マジで帰っちまうぞ。こんなところで終わらせないでくれよ」

ジルベは訴える。ポケットに手を突っ込んだゴンゾーラが俺を見下ろした。

「土下座してこい」

ジルベは俺の襟を正して立ち上がった。マコが俺に手を差し伸べる。

「いいよ。そんなことしなくても」

白くて冷たい手を握り俺はなんとか立ち上がる。ジルベが叩き落したバーガーを拾い上げて爺さんのもとへ重たい足を運んだ。何を言うべきか考えるのも億劫だった。考えろ。餓鬼みたいに不貞腐れているんじゃないかねえ。考えろよ。都合が悪くなるとすぐに逃げ出すんじゃないかねえ。考えるんだ。自分一人が不幸みたいな面するんじゃないかねえ。五月蠅えよ。何の取柄もないくせにリーダー面するんじゃないかねえ。分かってんだよ。

「おまえみたいな礼儀知らずとはもう付き合いきれん」

そんなこと自分が一番分かっている。俺は包み紙を筆取って、バーガーを口に詰め込んだ。何度も噛んで、噛んで、噛んで、どうにか喉を通過させた。

「ごちそうさまでした。俺たちをココのところまで連れてってください」

結局、俺にはいいアイデアが何も思いつかない。ゴンゾーラの案に乗っかるしかなかった。

「馬鹿」

マコの舌打ちが聞こえる。なんか芝居じみてるよな。妙に冷静な自分もいる。

「お爺ちゃん、ハンバーガー好きだったの？」

「あ？」

マコの問いかけに爺さんはどこか動揺している。

「ハンバーガー。好きなんだね」

「基本的に、あれだ。ケチャップ味のものが好きだ」

俺は土下座しながらアスファルトに向かって嘔き出した。

「そう言えばいいじゃない」

「おまえの、ロールキャベツは、なかなかよかった」

「うっそだあ」

マコはそう言い捨てながらバンのほうへと歩き出す。

「そんなことないぞ。て言うか、おまえはいい加減に放さんか」

メガロウに解き放たれた爺さんは、マコを追いかけるようにバンへ向かう。

「絶対、美味しいなんて言わないじゃない」

「そんなことないぞ」

絶対言わない。そんなことない。絶対言わない。そんなことない。同じ言葉を繰り返しながら二人はバンに乗り込んだ。メガロウは助手席に飛び込む。ジルベとゴンゾーラに両肩を抱えられた俺も後部座席に押し込まれた。

しばらく寝ていたようだ。チカチカ目を刺す明かりに瞼を開けば、隣でジルベがスマホをいじっていた。辺りは真っ暗だった。桜の季節は過ぎたというのに少し肌寒い。エンジンの代わりに爺さんの鼾が鳴っている。無理やり詰め込んだバーガーを消化しきれないでいるのか、腹は減っていなかった。

「悪い。起したか？」

ジルベは声を潜めた。

「いつのまにか寝ちまってたみたいだ」

俺も小声で応える。

「あの後、頭が痛えて言いながらすぐに寝たよ。死んじゃうんじゃないかと思った」

「まだ生きてるらしいな。みんな寝てんのか」

「大分近くまで来てるはずなんだけどな。急に街灯もなくなったから車を停めたんだ。この辺、停電してんじゃねえのか。爺さんも疲れたみたいだから寝たほうがいいだろう」

ひどく真っ暗だった。ジルベがスマホの画面を消すと星空が包んだ。

「なんだこりゃ。星ってこんなにあんのか？」

「なんか、すげえところに来ちまったよな」

「すげえ」

夜空に魅了されていれば、ジルベの腹が鳴る。

「うどん食いてえな」

「腹減ったか？」

「山岸のせいでバーガー一個しか食えなかったよ」

思えば最後に詰め込んだのは三つ目だったような気がする。ジルベが上から罵倒した時のことを思い返していた。あれは本当にあいつの言葉だったろうか。だったらマジでぶっとばしてやりたいけれど、ぶり返すのも野暮な話だ。

「なに観てたんだ？」

「ココのニュース。まだネットに残ってたんだよ。一年半も前のことだけだな」

再びスマホの画面が光を放ち、そこには学校指定ジャージの姿と「大迫琴美（14）」という表示が写された。事態を大変重く受け止めているようだ。再発防止に努めたいらしい。

「ココ」

マコが目を覚ました。ジルベは俺を跨いでマコにスマホを渡す。

「夢見てた」

「ココの？」

マコは頷く。

「墓石を蹴り倒したらココが目を覚ますの」

怖えよ。

「ココの話をしてよ」

ジルベは声を潜めてマコにせがむ。

「あんた本当にココが好きなんだね。それ伝えたことあったの？」

俺が代わりに首を振る。ジルベは項垂れてスマホの明かりを消した。星空にココの思い出が映し出される。身長が高くてバレーボールの才能に恵まれた女の子。ウィルス蔓延下でも公園でマスクをしながらボールを打ち合っていた。一緒に県大会を目指したけれど準決勝で負けたい。俺なんかは帰宅部で運動センスのないヤツだったから、マコとココの学校生活にはまるで共感ができなかった。大きい女は可愛げがないという思い込みで、ココに好意を抱くことなんてなかった。ジルベはマコの話聞きながら鼻を吸って俺の肩を握る。痛えよ。

「ジルベはココのどんなところが好きだったの？」

マコの問いかけに沈黙が続いた。爺さんの鼾が響き、星たちが三回転ほどした頃、ジルベの口からようやく言葉が零れた。

「デカいところ、かな」

俺は拍子抜けする。それでも、マコには何か伝わる場所があったようだ。

「あの子、なんだか色々大きいよ。だから、死んじゃったんだと思う」

「この世界には都合が悪かったんじゃないかな。今って色んな時のニュースとか見れるじゃない。なんかさ、ココみたいなのがいると、この糞みたいな世界がうまく廻らないんじゃないかなってさ」

「だよな」

全然分かんねえよ。

「非の打ち所がない」

メガロウが目を覚ましたようだ。

「そう。ココみたいな大きい人間が大人になると、この世界じゃ都合が悪いんだよ」

次第に夜が明けてくる。辺りの様子がモノクロに浮かびあがってくる。

「なんだよここ」

建物もなければ自然があるわけでもない。風景と呼べるようなものが何一つない。かつて世界が存在していたような虚無が浮かび上がってくる。ジルベとメガロウはスマホでマップを確認する。どうにか電波は拾えるようだ。後部座席のドアを開けて俺たちは外に出た。遙か向こうに、色のある建築物が見えている。でも、ココはあっちゃじゃない。

「歩いてあと二〇分ってどこか」

「歩くか」

メガロウは助手席のパワーウィンドウを下げる。

「俺は残るよ。爺さんとゴンゾーラだけ残していったら採めるだろう」

マコは頷く。ジルベとメガロウしかスマホを持っていないのだ。俺たちが分かれる時、この二人が連絡役にならざるを得ない。

太陽に向かって灰色の大地を進んでいると、足元は木々や電柱を呑み込んだ土砂であることに気付く。時折、地蔵の顔なんかが現われて驚かされる。大量の土砂が堆積したままになっていた。

「あれから一年半は経ってるんだよな」

俺は小さな上履きを拾い上げた。辺りを見回しても小学校らしき形跡は見られない。傾いた鳥居が見下ろす先には赤い前掛けをしたキツネが寝ている。そこから先は上り坂になっていた。倒れた樹々が露わになっている。とても車で入っていきそうもない。大木を跨いでマコの手を引く。枝を持ち上げてジルベが潜る。障害物競走はマコがトップに躍り出た。

「道ができたぞ」

ようやくアスファルトで舗装された道路が現われた。ジルベは首を傾げてスマホも傾ける。

「この道でいいんじゃない」

杉林を貫く道を行く。手をついたら倒れてしまいそうな痩せ細った樹々が立ち並んでいた。

「小屋だ」

倉庫といったほうが適切か。中学校で言うならば、校庭の隅にある体育倉庫のようなプレハブ造りだった。人工物にヒトの気配を感じ、俺たちは吸い寄せられる。シャッターの開いた入口には錆び付いた軽トラックが止まっていた。サッカーボールや跳び箱が置かれているわけではない。なにか詰まったガラ袋が積まれていたが、ライン引き用の石灰ではないだろう。ただ土砂が詰まっただけの土囊かもしれない。

「誰かいますか？」

マコが声を出す。

「いませんよ」

俺が裏声で応えれば、ジルベが肩を揺らした。

「脅かすなよ」

笑い声を殺してジルベの肩を拳で打った。確かに誰もいないようで、背筋を冷やして小屋を後にした。花壇と思われる煉瓦造りの一角に、枯れた植物が刺さっていた。その隙間に小さな植物が花を咲かせている。

「ハルシオン」

マコの言葉に俺の頭には嫌な記憶がよみがえる。

「それ睡眠薬じゃねえのか？　ウチの母ちゃんがしょっちゅう飲んだぞ」

「ハルジオン？」

スマホで写真検索したジルベが応えた。

「そう言った」

嘘つけ。マコはしゃがんで睡眠薬ではないほうのハルジオンを摘みはじめた。

「お墓参り行くんだからお花くらい欲しいよね」

ジルベもスマホをポケットに突っ込んでせっせと摘みはじめた。

「花が枯れる前に急いで行かないと」

そこはお寺ではなく路傍の墓だった。手を合わせている婆さんがいなかったら見過ごしていたところだ。座敷童でも見つけたように婆さんは目を丸めた。混乱した様子で視線をマコに送っていた。

「琴美ちゃん？」

マコは申し訳なさそうに首を振る。ここでマコが墓石を蹴り倒したらココが目覚ますのかもしれない。墓石に近づくマコに僅かな期待を寄せるが、あいつはしゃがみこんでハルジオンを供えた。

「私は大迫琴美の親友です」

そう告げると、婆さんは肩を揺らしながらマコの首に絡みついた。大きな泣き声が頼りない杉林を揺らす。俺はようやくココが本当にいないということを実感した。ここに来れば再会ができるような気がするしていたんだよ。

「プレハブ小屋があったろう。あそこ、ココの出てくる場面かと思ってたよ」

ジルベが鼻を吸る。

「んなわけねえだろう」

俺は下唇を噛んでハルジオンを強く握った。

墓石に手を合わせて、さらに山道を上がる。途端に視界が開けたかと思えば、眼下には海が広がっていた。太陽に照らされた水面が眩しく光る。峠のこちら側とは別世界だ。入り江につくられた漁村には幾艘もの舟が停泊していた。

「向こう側はきれいでしょ」

ココの婆さんたちは元々この漁村で暮らしていたという。魚の数も減って身体も衰えたことから、峠を越えた内陸側の新興開墾地に移り住んだ。調整池の周りに大型商業施設や幾つもの住宅を築いて、レクタウンと名前が付けられた。集中豪雨による洪水を食い止めるため調整池は、大量の土石流までは想定していなかった。

婆さんたちは一度離れた漁村に戻り、なんとか生活を繋いでいるという。俺たちは峠を下り、漁村へ足を踏み入れた。村の老人たちは、珍獣を見るような目で俺たちに不躰な視線をぶつけてくる。

「お爺さんは無事なんですよね？」

「あの日、あの人はこっち側に来ていたからね。高波が来る前に船を陸に上げて固定しておかなければならないってね。ほかのみんなに迷惑がかかるから。その時は、まだそんなに大雨ではなかったんだよ」それでも、ココは爺さんが心配になって大雨の中で峠を越えようとした。あいつがマコみたいにチビでバレーボールに恵まれていないような体格だったら。そんなことは考えては身勝手に悔やむ。

爺さんが生きているなら、ぶつけてやりたい言葉があった。

「おまえら世代が引き起こした人災だよな」

魚の獲れなくなった漁村に暮らす爺さんに、それを言ったところでなんになる。だからといってココの判断が愚かだったという結句はないだろう。なんでココだけが土石流に吞まなければならないかった

んだ。この峠を境に陸地側で起こった災害には何がある。

背後から車のクラクションが鳴らされた。振り返れば窓から顔を出したマコの爺さんがなにか声を上げている。拳を握って険しい表情を浮かべているが、なにかまた怒られるようなことをしただろうか。

「マコの爺さんはよくここが分かったな」

ジルベは現在地を示したマップを見せた。頷いてみせるが、俺はスマホの仕組みをよく知らない。

「これからどうすっか」

俺は腕を組んでジルベに問いかける。

「ひとまずココの爺さんに挨拶だ」

そりゃそうだ。

「おまえら世代が引き起こした人災だよな」

一度だけ、マコとココの爺さんに問いかけてみてもいいような気がする。もうすぐ死ぬおまえらは何を考えているのか。俺たちがこれからどうするのかなんて、そいつをはっきりさせてからだ。

「腹減ったな」

「俺、うどんとか食いたいけど」

そろそろ米も食いたい。

やましたの戦争

ニンゲンの顔を成しているかどうかは鼻の形で決まる。

その油彩にはたくさんの顔がある。私の思いつきが正しければ、キャンバスに描かれた顔はすべてニンゲンである。中には角を生やした顔もある。ウシではないのかと問われても、角を生やしたニンゲンに違いない。何より鼻がウシでない。ニンゲンの鼻を生やしたウシである可能性はどうか。でも、顔が扁平じゃない。いや、肌色だし。ニンゲンの顔を成しているかどうかの定義が揺らぎはじめる。気の利いた閃きのように思えたのだよ。未だ誰も気づいていない発見なのではないかと胸をふくらませたのだよ。この斬新な自説をどうにか固辞したいと下唇を噛む。しかし、どうやらニンゲンの顔を成しているかどうかは鼻の形だけで決まらない。必要条件でも十分条件でないというやつか。顔が扁平でないと。肌色でないと。嗚呼、今どき肌色なんて言ったら世間に怒られるのかしら。

たくさん顔にはそれぞれ表情がある。皆どこか愛らしい形代のように硬直している。これが表情と呼べるのかしら。決して変化することない顔つき。表情を成しているかどうかは顔面の変化量で決まる。どうだ。

瓶のコカ・コーラが立っていた。かつて酒屋の前には瓶ジュースの自販機があった。八〇円で購入しても酒屋に戻せば一〇円がバックされる仕組み。コンテナから引き抜いた空き瓶をカウンターに持っていったらこっぴどく叱られた。なんでバレたのだろう。

テーブルには小銃が置かれていた。さすがに小銃の思い出はない。

ニンゲンたちには手首から先がない。コカ・コーラを持ち上げて喉を鳴らすことも、担え銃で行進することもできない。ミリタリーブーツを履いたまま横たわる男の体躯、直立のまま顔を覆われた女の身体、丁髷のお面は脚に蝙蝠傘を履いていた。誰しも手首から先がマネキンのように取り外されている。束ねられた絹は滑らかな消化管のようにも見えるが、血の一滴も流れていない。股座から星条旗の棺。ここはただのガラクタ置き場なのかもしれない。

ふと気になってスマホを取り出す。「コカコーラ」「誕生」で検索をする。「コカ・コーラ・ジャパン」のサイトから「よくある質問」がトップに現われた。

「コカ・コーラ」は、一八八六年五月八日にジョージア州アトランタで誕生しました。

さらに「コカコーラ」「日本発売」と検索する。今度は企業情報のページがヒットした。

一九五八年（昭和三十三年）五月八日、カスタマー第一号である社団法人東京アメリカンクラブに「コカ・コーラ」二〇ケースを納品。日本での「コカ・コーラ」事業にとっても記念すべき『「コカ・コーラ」の誕生日」となりました。

「めっちゃ最近だな」

山下菊二が描いたこの異様な油彩は「転化期」という題名でベトナム戦争を描いている。コカ・コーラは開戦してから日本へ到来したことになる。油彩として描きたくなるほど米国の戦争を象徴するものだったのかしら。（おそらく無断でアップロードされたであろう）テレビ番組によれば、ベトナムでずたぼろになった兵隊の亡骸は、日本で形を整えてからアメリカへ運ばれたそうだ。それを知ると作品の見方も大きく変わる。

皇軍の一兵卒として先の侵略戦争に加担させられた二〇歳の菊二は、日常の輪郭を失い極限状態へ追い込む戦場を、ヒトと植物が融合するように描き、黒い塊となる狂気を表した。そして、戦場での殺人、暴行、虐待、差別を拒否できなかった自己への呵責を、傷のように抱えながら戦後を生き続けた。

絵画を観て回るだけで胸やけとともに頭痛がする。逃げ出したくなる思いで順路を急げば、暗幕の掛けられた一画を見つけた。レンタルビデオ屋の奥に潜む一八歳以下お断りの秘境といった風情。黒いカーテンに指をかけて隙間に目を細めた。誰もいない薄暗い部屋であった。どん突きには二枚の扉が張り付いていて、監視カメラが真つすぐこちらに向いていた。助平心で覗きこんだことは既にばれている。ここで引き返すのもどこか気まずい。私は覚悟を決めて薄暗い部屋へ踏み込んだ。そして、助平心ではないのだと仁王立ちでカメラをじっと見つめ返す。レンズの向こう側から一体どんな田舎者たちが覗きこんでいるのだろう。そんな思いに駆られるのは、菊二の残した「わたしを見つめる眼」という随筆のせいだ。

町中がおたがいの生活の背後に廻って、そっと覗きこんでいるような意地悪い視線を感じはじめていました。家と家とのからまり、自分の子供を悪童から守ろうとする強い監視癖、または長い因襲（古いしきたり、習慣）的な対立といったものが、歩いているわたしを吸い込んでしまいそうな不安感から逃れるように、裏通りの路地を歩きがちになっていたのです。表通りの旦那衆のひやかな眼光と比べて、路地裏の少々傾いたような家の住人の自由で屈託のないまなざしが、私の気持ちを鎮めてくれました。

監視カメラの両脇に二枚の扉、それぞれ案内板が立てられていた。私は声に出して読み上げる。

「捕らわれて連れ戻された逃亡者」

扉に耳を当てれば、ザックザックとシャベルで土を掘る音が聞こえる。

「いつもながらの食料徴発」

扉に耳を当てれば、鶏が咳き込むように喉を鳴らす声が聞こえる。

徴発とはなにかしらと再びスマホを取り出した。

戦時などに軍が人民から物資・人力を強制的に取り立てること。

要するに掠奪か。

どちらの展示が見たいだろう。自分に問いかけてみれば、なんでこんな展覧会に足を運ぼうと考えてしまったのかというところまで遡る。菊二の残したルポルタージュ絵画、従軍体験を綴った文章、どれをとっても何一つ気持ちのいいものではない。観る者の安易な解釈を拒み続ける絵画、それに比べて従軍体験は比較的易しい文章で綴られている。余計に胸糞悪い。展示されている絵画の大半は既に図録でじつくりと眺めたものばかりであった。それでも、菊二が筆を運んだキャンバスを直に眺めることができるならば興奮するじゃない。晩年、宿痾としての脊髄性進行性筋萎縮症に苦しみながらコラージュという手法に取り組んだ。切り貼りされた細部からその苦しみを味わってみたいじゃない。私の性格の悪さがここに足を運ばせるのだろう。

二枚の扉の先に何が展示されているのか。それはある程度予想ができていた。文筆作品の展示とは珍しい。菊二は日中戦争で台湾軍に入隊させられていた。

「捕らわれて連れ戻された逃亡者」

俘虜が《菊の御紋章》という大元帥閣下の刻印がされた歩兵銃をもって逃走した。すぐに捕らえられて処刑された話を読んだことがある。

「いつもながらの食料徴発」

《この部落は日本の憲兵隊によって宣撫されているので、徴発など一切の行為を禁ず》と書かれた憲兵隊長署名の日の丸の小旗をさし示す老人。そんな老いぼれのことなど構わず掠奪を続け、挙句、上等兵の銃が火を吹く。老人は日の丸の上に折り重なるよう血に染まって倒れた。

そんな物語のどちらも観たくない。監視カメラの向こうから、田舎者たちが「さあどちらにする」と私に迫る。不意に背後から光が差した。いるはずもない上等兵を思い浮かべ、目を丸めて振り返る。相手も驚いたろう。

「あ、すみません」

私よりも遥かに若い青年であった。

「あ、いや」

青年にスペースを空けようとサイドステップ。私は意図せず「捕らわれて連れ戻された逃亡者」の扉の前に立った。青年は「いつもながらの食料徴発」の前に立つ。

「なんすかねこれ？」

随分と人懐っこい男であった。

「戦争体験の展示でしょうね」

「嗚呼。戦争の展示とかしんどいっすよね」

確かにそうっすよね。私は口元を歪めるだけで言葉を返すことができない。過去の過ちを繰り返さぬよ

う戦争を知るのは大切でしょう。そんな定型句を口にしたほうが大人らしかったかしら。「しんどいっスよね」が繰り返されるだけな気がする。青年は私の前を指さした。

「そっちにするんすか？」

「ええ、まあ」

「捕らわれて連れ戻された逃亡者か」

この選択は間違えているのだろうか。実はこの青年、姓は山下、名は菊丸、山下のことなら何でも知っている末裔でいらっしゃるのではなからうか。

「菊二、好きなんですか？」

「まあ、興味深いっすよね」

私は頷きながら「インタレスティング」は禁句だというなにかの洋画を思い出していた。ただし、その回答から親族ではないのだろうと推察する。身内のことを「インタレスティング」と評価する者はなかなかない。

青年は私の前に手を伸ばすとドアノブを握った。

「一緒に入りましょうか？」

思いがけない申し出に言葉を詰まらせる。それでも二、三言葉を交わした仲だ。別々の扉に進むこともないだろう。私は青年の後頭部に軽く頭を垂れて、その後に続いた。

「わお」

捕らえられた逃亡兵が後ろ手に縛られてがっくりと項垂れていた。遠目に見ても、膝をついて貧相な肩を震わせていることが分かる。その前で表情を無くした若者が深く深く穴を掘っている。扉に耳を当てた時に聴こえてきた、ザックザックというあの音だ。

穴を掘る新兵と逃亡兵の綱を握る古兵。その後ろに立つ上等兵が扉を開けた私たちに気づいた。

「整列」

青年は条件反射的に小走りになる。私も上等兵の視線から逃げるよう青年に続いた。既に三人の男女が列をつくっていた。その装いを見る限り、我々と同じく日中戦争に紛れ込んだ現代人のようだ。

上等兵の声が響き渡る。すっかり生気を失った逃亡兵の肉体が、古兵によって穴の中へくねくねと押し込まれていった。新兵が穴の中に土を戻していく。やがて、しっかり搦き固められると首だけが地表にぽつんと置かれたようになった。

「デビッド・ボウイみたいっすね」

涙目の青年が振り返り、囁き声で同意を求めた。私は苦笑いを貼り付ける。その顔は「転化期」に描かれたマネキンのようだったろう。すると、上等兵は最前列の女にシャベルを手渡した。それは刀のように切れる兵器用シャベルだった。

「え、なにに？」

女は困惑した様子で、すぐ後ろに並ぶ連れ合いの男に尋ねる。

「逃亡兵なんだから処刑しなきゃ」

鼻を削げ、耳を削げと、男と女はじやれるようにシャベルを押し付け合っている。上等兵は立て銃の姿勢で不動のまま一点を見つめていた。やがて、シャベルを握った男が下唇を噛んで逃亡兵の頭の前に

立った。地面から生えた頭は、これから我が身にふりかかる残虐行為に対して、諦めようとする努力と、諦めきれない生への執着との葛藤を、色濃くその表皮に染めている。いや、これは演出上のライトアップだ。無感動な我々に、ここから皆さん驚くべきところですよと合図を出してくれる。

シャベルを握る男の切り落としたくないという意思が、両の目を閉じさせる。手元が狂い地面にシャベルが突き立てられた。ザックという音に女の短い悲鳴が応えた。

上等兵は男からシャベルを奪い取ると、それを振り上げた。

「このように切り落とすのだ」

頭から耳が飛び、会場は真赤な照明に包まれる。地面が血糊に染まった。シャベルが三人目の男に手渡されると、その男は長靴をはいていた。

「率先垂範」

一言漏らすと躊躇いもなく鼻を削ぎ落した。会場は再び真赤に明滅する。そして、地面に生えた頭から血糊であろう真赤な液体が吹き出し、長靴を染めた。この男、鼻を削ぎ落せば自分の足元が汚れることを知っていたのだろう。俺は辺りを見回す。長靴の貸し出しなんてあったかしら。女は両手で口を押えたまま、率先垂範してみせた男に羨望の眼差しを向ける。連れの男はそんな女に眉を顰めた。

続いて、シャベルは青年に渡された。

「え」

もう一つ耳がある、耳を削げと、俺たちはじゃれるようにシャベルを押し付け合うこととなる。逃亡兵の処刑に立ち会った時、菊二はまだまだ新兵だった。シャベルを握らされたことを記録していたが、直接的に手をかけたかどうかは知らない。

シャベルを受け取った菊二はこう漏らした。

そこに埋められている逃亡者の首からではなく、わたしたちの何ものかが切り落とされたような気がした。

私は血を吹く逃亡兵の首を見下ろしながらでシャベルを握っている。既に鼻のない顔はニンゲンと呼べるか。必要条件を満たしていない顔から耳を削ぎ落すくらい他愛ないことのようにも思える。

「このように切り落とすのだ」と、上等兵は言った。

「率先垂範」と、長靴の男は言った。

それらを上回る気の利いたセリフはなんだろう。俺は数少ない語彙の引き出しを探っている。シャベルを振り下ろした時、女はどんな視線をくれるかしら。青年はどんなに情けない声を上げるだろう。無口な上等兵が私にだけ特別な声をかけてくれたりして。その想像はいくらか愉快だ。意思を持つことよりも近い未来をイメージしている。ふと「食料徴発」という言葉が思い浮かぶが、この場にまったく相応しくない。

「嗚呼。戦争の展示とかしんどいっすよね」

青年の口真似をして、少しだけ笑った。

未だ曾て有らず

「管制塔から小比叡船長へ。気分はどうだ？」

「まあ、ボチボチです」

「おまえはいつだってボチボチだな」

最近ではこれと言って話すこともなく、俺と社長は同じ話題を繰り返すばかり。入社初日に寝坊してきたこと。焼肉ランチの野菜は焼き加減が分からないこと。学問とは近視眼的に目の前のものを実現しようということとは縁の違う世界に存ること。親父は逆上がりができないくせに息子の鉄棒に厳しいこと。今日は何を繰り返そうか。

「あれは入社初日じゃなくて、入社前のオリエンテーションでしたよ」

「俺が電話した時、おまえ、まだ寝てたよな」

「あれはマジで焦りました。クビになるかと思った」

息を切らせて会場の扉を押し開けたのには、最善を尽くした俺なりの演出だった。

「やっとなお出ました」

肩で息する大根役者を目にした社長は手を叩いて満面の笑みを浮かべた。あの時から俺はこの人に魅了され、そして、両手に手錠がされていた。

時は就職氷河期、吹雪に晒されながら就職エージェントのサイトに五〇社以上はエントリーした。無目的に学業を重ねてきた俺に就きたい職などない。三流大学で会得した理学系の知識をつなぎ合わせて、どうにか志望理由を作文した。面接まで進んだ数は片手で足りる。最終選考までこぎつけたのは、このベンチャー企業、スターダストだけだった。

「何か見えるか？」

太陽系から飛び出した宇宙舟、灯りを消せば星空だけは美しい。そんなもの煌々と灯りの照る街から離れば地上からだって拝むことはできる。大気圏を抜け出したところでダイナミックな車輪銀河が拝めるわけもない。不均一ながら単調な空間が広がるのみ。社長の問いかけに気の利いた言葉を見つけることができず、口を歪めて首を傾げた。

「もう一段階加速してみようか」

一労働者は社長の提案を飲み込む。シートベルトを締めて、ボタン一つで原子炉に燃料を投入する。加速の衝撃を全身に受けながらしばらく目を閉じれば、地球時間を示す時計がまた少し加速した。

たった一度の人生、もっと笑って楽しむべきだという意見も分からないでない。それでも俺なりに楽しんでるんだよ。震える口角をなんとかして持ち上げる。お陰で寄り付く人間は少なかった。

人生で一番苦痛だったのは一〇歳になるうかという冬の季節。氷のように冷たい鉄棒を握ってつばめの格好で揺れていた。親父は前回の出来ない俺が気に入らなかった。親父は逆上がりができなかった

と聞く。そんな程度コンプレックスが男を卑屈にさせる。逆上がりには技術の問題だが、前回は勇気の問題だという。一本の棒を握って頭っから地面に突っ込んでいくのだ。高さは違えどバンジージャンプと変わらないじゃない。

親父のお陰というべきか。前回はできるようになる。鉄の棒を軸にしてはじめて世界を一回りした日、それはそれは興奮した。親父も喜んだ。一度できれば何度だってできる。多少の恐怖は快楽に変わり、氷のようだった鉄棒が溶けるほど回転し続けた。そいつは直ぐに飽きる。逆上がりをはじめてできたのは、上空一〇〇キロメートルのカーマラインを越えてからだった。

英検準二級に受験に就活、俺が躓きそうになる度、親父はあの日のことを美談として取り上げた。

「鉄棒のことを思い出せ。頑張ればなんだってできる」

そして、決め台詞。

「あとは勇気の問題だ」

なんとか職を見つけて家を出てから、俺は親父の間違いを証明するために活きている。抗い方は単純なほうがいい。なんの取り柄もない者でありたい。自堕落に生きたい。そのためにも金が必要のだから困った社会だ。自堕落を追求した結果、万年平社員でも飯に困らぬ生活が送れている。本当に抗えているのか分からない。

大学発ベンチャー企業スターダスト。欲望の使い道を失った一パーセントの人間を相手にした宇宙遊泳事業。やつらの散財と自己顕示欲が主な収入源である。それは資金調達の話で、真の目的はいつだって学問にある。

「宇宙の果ては。世界のはじまりは。考えただけでワクワクするだろう」

中長期的な宇宙拓殖事業と看板を掲げておけば社会的価値が認められる。富豪を宇宙へ送って一般メディアへ成果を垂れ流せば宣伝効果も抜群だ。そして、スターダスト社長兼教授は言葉をつなぐ。

「何のためにというのは正直あんまり考えたくないんだよ。学問なんてそれぞれ固有の法則で廻っている。ある専門分野にとり憑かれると、そいつがどんどん生活を浸食していく。二四時間戦わざるを得なくなる。そいつが学問ってもんだ」

俺は関心のないふりでその言葉を焼き付けた。

「気分はどうだ？」

社長が俺に声をかける時、昔からそいつが決まり文句だった。どこかズレているようにも思えた。

「ボチボチやってます」

そう答える自分も何か違っていた。

民間人による原子力投資が活発になった頃、社長は言った。

「原子炉ロケットの有人飛行を試してみたいと思っている」

資本の増大がなによりとされるこのシステムの中で如何に踊り続けるか。社長は用意されたお立ち台にひょいと飛び乗る。核廃棄物は月に棄てて、金持ちから順に火星へ移住する。真っ赤な彼の地にシェルターを建てて街をつくる国家プロジェクトがあるという。それならば砂漠の真ん中に拵えればどうだ。

夢のような話でなければならぬ。ニンゲンどもがこの地上でいつまで生存を続けられるか。毎年のように未曾有の災害が猛威を振るう。でも、北の大地で米がとれるようになったじゃない。宇宙開発は豊かな地上生活にも役立つのです。デュアル開発だなんて煙に巻いて予算を引っ張る。

社会の注目を集めることに成功した社長にとって、予算を集めることはそれほど難しいことではない。あとは適切なモルモットが必要だった。四〇歳を過ぎても結婚の気配がない。ジェンダー平等が訴えられる中、最も厚待遇だと信じられているおじさんという選択肢は何かと都合がいい。

宇宙を進むだけの俺にできることと言えば、時折現れる小惑星をスケッチすること。そして、過去について思い返すこと。

ヤングケアラと呼ばれていた菊池がいた。あいつには肩書があって、何者でもない俺には羨ましかった。それでも学級委員長になりたいと思ったことはない。サッカー部のキャプテンなんてなりたくてもなれない。俺にとって、キャプテンと同じくらいにヤングケアラという横文字が響いた。

その理解を進めるため、学校教育が必要だとテレビが言った。菊池に体験談でも話してもらうか。身動きの取れなくなったブヨブヨの母ちゃんにTシャツを着せる話。冷え切った肉の感触、湿ったTシャツの臭い。だれも聞きたくない。

菊池は俺にとって数少ない友達だった。ヤングケアラは忙しい。放課後に遊ぶことはできないから、昼休み、あれほど嫌いだっただ鉄棒にぶら下がった。そして、クラスの人気者グループがボールを追いかける姿を眺めた。運動ができるやつと、喋りが面白いやつ集合体。そこにはキャプテンもいた。ぶちぎりでサッカーが上手かった。翔真君をかわして、ユベシを股抜きして、バッチを飛び越えて、デブだからゴールキーパーの児嶋なんていなかったかのようにネットを揺らす。

「おおっ」

菊池は鉄棒にぶら下がったまま身体を反らす。本当はキャプテンたちとサッカーがしたいのだろう。なんで俺と鉄棒にぶら下がっているのだろう。

「おおっ」

もう一人ぶら下がっているのがいた。須藤幸子。女子でさ。ちっこくてさ。丸くてさ。特別魅力的ではないけれど、菊池に取られるくらいならば、俺が結婚してやってもいいなって思っていた。でもさ、あいつはヤングケアラだからさ。何者でもない俺よりも遥かに魅力的なわけで。

「あとはおまえの勇気の問題だ」

いつだって忌々しいおやじの台詞が頭に浮かぶ。それは俺に勇気がないと言っている。とどのつまり俺には勇気がないわけで。なにか突飛なことをやらかさないとこの緊張感から解放されない。

「カンチョーお見舞い申し上げます」

鉄棒にぶら下がったままの幸子の尻にお見舞いした。割といい勢いで。鉄棒から飛び降りた幸子は振り返った勢いで平手打ち。思いがけない威力にしりもちをついた。こいつはかなり劣勢だ。さらに落ちる以外に選択肢は無く、俺はズボンの中から放尿した。お漏らしだよ。中学生だった。十四才だった。

「モーレッツ」

菊池はどこまでも優しかった。それ以上のことは言わず、チャイムが鳴ったら幸子の手を引いて教室

へ駆けて行った。

「先生、社会が変わらなきゃいけないって何なんですか？ そいつで俺が楽になれるんですか？」

ある日、菊池は授業中に声を上げた。やっぱりヤングケアラーという人間は俺にとって絶対に必要な存在でさ、あの頃から宇宙の果てに飛ばされるくらいのことが必要だったんだ。

菊池とは進級でクラスが変わってしまえば、交流が途切れてしまうような間柄だった。それにもかかわらず俺にはインパクトがあつてさ、あいつの言うことがたまに分かるんだよ。

「社会が変わらなきゃいけない」

あのセリフが出てきたときは気を付けなければならない。

舟内には地球時間を刻む時計と俺時間を刻む時計が並んでいる。既に何度も加速を行っているから、地球時間を刻む時計は倍程度進みが速い。俺は俺時間の秒針を眺めながら振り子のようになって左右の頬に拳を当てる。次第に力を籠め、鈍い痛みが溜まっていったら、今度は力を抜いていく。

モニターの背景はいつも同じで、映し出される顔は老けない。

「どこまで行けばいいですか？」

「どこまでも」

「いつまで生きればいいですか？」

「いつまでも」

普通に生きたって、俺は社長より長生きする。

「私が死んでしまえば、その先のことなんて関係ない。そう思ったでしょう」

何が仕込まれているのか知らないが、脳に刻まれた言葉たちは簡単に汲み取られる。俺の思考が単純過ぎるだけのことだろう。

「社長自身が宇宙に飛びたい。なんて考えたことないんですか？」

「いやだよ。空気もない。放射線だらけの空間なんかより、たらふく肉が食えるこの地球が好きだ」

ヒトを飛ばしておいて随分なセリフだ。

「誰にもできなかったことをするぞ」

「神さまみたいです」

「俺は学者だ。神さまなんてものにはおまえがなれない」

実際、俺を神と崇める妙な輩が現れはじめた。世界の果てを教えてくれる。決して手の届かない存在。いくつもの原子力ロケットを積んだ箱舟に乗り込めば誰だってなれるのに。それでもこんな機会に巡りあう間抜けはなかなかいない。真冬の鉄棒も、十四のお漏らしも、すべて俺が宇宙へ飛ぶために必要な階段だった。偶然的積み重ねに物語を拵えて、神さま然とした振る舞いを。俺の写真を神棚に掲げておぬさを振り回すやつがいる。社殿には多くの信者が両手を上げて揺れている。妄想は海馬から大脳皮質へ、本当の記憶が次第に脚色されていく。

「管制塔から小比叡船長へ。気分はどうだ？」

「まあ、ボチボチです」

「おまえはいつだってボチボチだな。地球はそろそろ限界だよ」

地上がティッピング・ポイントをとうに越えている。俺へ盲目的な崇拜が加熱する。白目を剥いて信心深く揺れる。

「デュアル開発はどうなりました？」

応答がない。

「最近、第二のおまえになりたいって、宇宙に飛びたがるやつが増えた」

「儲かってるんですね」

「断るよ」

何故に。

「美味しいお肉は食べてますか？」

「肉？」

モニターに映る顔は滑らかでも、社長の応答が鈍い。少し声を張って自分の爺さんに話しかけるような口調になる。

「たらふく肉が食える地球が大好きなんでしょう」

「今では、牛肉は悪食の象徴だ」

「回帰不能点を過ぎたというのに、随分と真面目な動物だね」

小さなフレームに収まった俺の写真がモニターに映った。胸糞悪くなる餓鬼の頃、鉄棒につかまって真っ逆さまになっている写真だった。

「なんでそんなもの持ってるんですか？」

「最近のヒット商品だよ。勘違いしないでくれよ。売ってるのは俺じゃない」

俺は哑然とする。俺がはじめて宇宙を感じた瞬間という触れ込みだという。

「そんなもので親父はどれだけ稼いだんだろう？ 死にかけの地球で」

社長は小さな笑みで二、三、頷く。

「もう一段階加速してみようか」

話を終わらせた時の合図。

俺はシートベルトを締めて、ボタン一つで原子炉に燃料を投入する。身体に加速の衝撃が加わりしばらく目を閉じる。地球時間を示す時計がまた少し加速した。

スターダストの配信チャンネルでは俺の映像が時折更新されている。打ち上げられる時はテレビニュースにもなった。民間人の打ち上げは珍しいものではなくなったが、帰ってくるつもりがないというだから多少は話題になる。人体実験ではないのか。長時間労働ではないのか。テレビは消えると言われ続けて久しいが支持層は厚い。

余命四〇年に十分な栄養と快適に暮らせるだけの水と空気も積み込まれている。サバチエ反応と水の電気分解である程度の循環は適っている。処理しきれないメタンだけが少しずつ垂れ流されていく。そんなに家に帰ることが重要か。俺はここで寿命を全うすることができる。実際、快適な旅は続いている。目を閉じて悪ふざけで坐禅を組む。股間に法界定印を乗せて宙を舞う。その動画はウケがよく、切り

取られたG I Fが拡散された。性欲に悶える馬鹿な姿を晒してやってもよかったが、どうせ広報部が切り取った映像をアップする。晒した馬鹿の多くが報われない。

それにしても親父、片道切符に倫理観を問う市民がいるというのに、餓鬼だった俺の写真で小銭を儲けているというのだからなんとも質が悪い。

「あんたはなんだってお父さんのせいにすればいいから楽だね」

かつて付き合いのあった女の声が甦る。いい匂いを放っていた。身体の相性もよかった。

「出生前診断でもしてみたらどうだ。赤ちゃんの4パーセントくらいは異常を持って生まれてくるらしいぞ」

「異常ってなに？」

「ダウン症とかそんなんだよ。そんな面倒を抱えるはご免だぞ」

聖人のように面倒を抱えて喜べる俺ではない。女だって理解していたはずだ。出生前診断という言葉を繰り返していれば次第に興味を持つようになる。そして、21トミソリーであると診断されると、女は大泣きして崩れた。

二一番染色体が三本もあるという。多は少を兼ねないらしい。

「そもそも本当に俺の子供なのか？」

舌を出したら、頬を張られた。ありきたりな芝居に付き合ってくれたことは、女の愛情だったなどと思ひ込む。

別れた女は息子の様子をしきりにSNSへアップした。アカウント名は昔から変わっていない。俺は変えたけれど。五月には兜を被せ、十二月になればサンタ帽子を被せた頓狂な顔写真をアップする。女自身の写真は出てこない。俺に見せるためにアップしているわけでもないだろうが、あいつに俺の面影を探そうとする。ダウン症のどこにでもあるような顔つきの幼児。気に入った写真はダウンロードしてフォルダにためてしまうのだから不思議なものだ。例えば画才があるとかさ、異常にピアノが上手いとかさ。そんな分かりやすい天才であいつらの生活が潤えばいいと願う。できればあまり長生きはしないでやって欲しい。女の不幸を望んだことはない。

宇宙舟に乗り込んでから、あいつ等の生活が覗けないことは残念だ。管制塔を介した情報しか得ることができない。スターダスト・チャンネルに公開された映像を、女と息子は観ることがあるだろうか。その映像を眺めながら「パパよ」なんて微笑む女の姿が妄想できる。「星屑になったの」なんて、「神さまになったの」なんて、「酷い男だったの」なんて、「あんたと私を捨てたの」なんて、子守歌のように聞かせるのだ。

「管制塔から小比叡船長へ」

モニターに手を振ると、それが知らない顔であることに気付く。

「社長が亡くなりました」

そうか。

数日前にモニター越しで会話をしたばかりだった。最近、おもしろい学生が入ってきたと、珍しく社長が新しい話題を振ってきた。地球人以外の知的生命体とコンタクトを取るため月の背面に巨大な直角

三角形とその三辺に正方形を描きたいのだという。随分と快活にしゃべり続けるものだから、俺はそのピュタゴラスの青年に嫉妬したものだ。

地球時間を示す時計を眺めた。旅立ってから俺時間でも三〇年は経とうとしている。

「気分はどうだ」

何度も話した。同じようなことばかり。

「ボチボチやってます」

社長はいつだって俺の気分を窺っていた。すぐ隣で仕事をしていた時には訳が分からなかったけれど、ここまで時空の隔たりがあれば、問いかけとして適切に思えた。

「おまえはいつもボチボチだな」

日常はなにも変化がない。食事だってそれぞれに色はあれど味噌のようなペーストばかり。語れることと言えば、時折、窓からのぞく小惑星のこと。見慣れればかい石だ。

結局、社長のとり憑かれた研究テーマはなんだったのか。本人の口から聞く機会はなかった。宇宙に放り出されたおっさんの具合を調査しなかったか。それは次第に狂っていく仮定があったのだろうか。俺はモルモットとして適切だったのか。割と頑固なんだよ。憎むべき、否定すべき親父という存在があったから。

モニターに映されたままの端正な顔。俺が口を開くまで何もしゃべらないと決め込んでいるようだ。

「ところで君は？」

「知っているんじゃないですか？」

ピュタゴラスか。

「何故、宇宙ではペースト状の飯を食わなければならないか知ってるか？」

わずかに間を置いてから青年は首を傾げた。

「昭和生まれの俺たちにとって、宇宙食と言えば色とりどりのペーストだった。SF漫画を再現することが未来を創造することなんだよ」

いい加減な話にも青年は品のいい笑みを返した。人間の優しさに触れると、少しの緊張感を覚える。ピュタゴラスは黙ったまま唇を囁む。なにか発言を躊躇っているだ。

「月の裏側にピュタゴラスを書くんだとか」

「それはもう済みました」

「地球に知的生命体がいるとばれてしまうな」

青年の唇にまた少しの笑みが宿った。

「何の信号もキャッチできないですけど」

「ところでピュタゴラス君、社長はいつ死んだんだ？」

「初代社長のことですか？。私が入社した時にはもう亡くなっていました」
そりゃそうだろう。

「なんで今になって私に連絡した？」

なんで今になって社長の芝居をやめたのか。

「もう限界なんです。清潔な水を確保できるニンゲンだって限られている」

「俺はアニメーション映画程度の想像しかできない。」

「ピュタゴラス君は、どうするんだい？」

「僕も宇宙に飛びます。この管制塔はもう閉じます」
身体に震えが走った。

「大丈夫。この通信機は持って行きます」

両腕をほどこいて膝につく。

「あと、ピュタゴラス君というのはちょっと。社長から名前聞いてませんか？」
おそらく忘れただけだと思う。

「菊池です。私の曾祖父母とは古い友人だったとか」

俺は目を丸めた。ならば聞いていなかったのだろう。

「変な昔話を聞かされていなければいいが」

どうせ聞いているだろう。

「神棚に逆上がりの写真が飾ってありましたよ。お陰で私も宇宙船の設計などしている」

俺は飛ばされた側だけだ。

「まさか神様とこうしてお話ができるなんて」

菊池は破顔する。

「やめてくれ。宇宙に出た人間はどのくらいだ？」

「社長の舟で飛んだのは小比叡船長だけ。私の舟で飛んだ人は二〇人います」

菊池は少しだけ胸を張る。

「そいつは驚きだ。で、地球に残った者たちはどうなる？」

「残された土地で奮闘している方はたくさんいます。未だデュアル開発を支持している人。地上に作られたバイオスフェアで暮らす選択ができた人は一握り。不完全な物質循環でも、残された寿命には十分だ。逃げて切り世代なんて言葉ずいぶん昔からあるでしょう。今度は本当に、地上最後の世代。なんだかんだ地面から離れることが一番怖いってヒトが大半です。私の両親も含めて」

「次の世代に繋ぐことはあきらめたか」

「僕たち二人以外は」

「火星にでも移住する気か？」

「まさか。可能な限り加速を続けます」
なるほど。

「未来に行く」と

菊池はうなずいた。

「少なくとも光速の九九、九パーセントまでは近づきたい」

「一〇年で二〇〇年くらいか」

「さすが」

「簡単な計算式だよ。チェルノブイリの赤い森は三〇年で復活したそうだが」

「もともと木々に覆われていたところは回復が早いんです。人工物だらけの都市部はそんなにうまくは

「いらない」

「何年後に地球へ帰る気なんだ？」

「とりあえず一〇年」

「二〇〇年後か。地球はまともな生態系に戻っているだろうか？」

「この舟が完璧なエコシステムだと言っても、結局、自分たちに寿命があるから」

菊池はヘッドセットに人差し指をあてる。

「初代社長の研究成果って知ってます？」

俺は極力平静を装う。もう少し勿体ぶるかと思えば、あいつは結論から切り出した。

「この通信技術ですよ。今、小比叡船長は光速の九〇から九五パーセントくらいで進み続けています。普通に考えたら通信なんてできない。これは本当にすごくて」

菊池は俺の理解を超える単語を繰り返しながら興奮気味に話を続けた。自然と涙があふれた。そいつは角膜を覆い、首を振れば粒となって散る。それでも口元には微笑みを浮かべている。なるほど。事故でもない限り検体は一体で構わないわけだ。たまに交信をして「気分はどうだ」と声を届ける。「ボチボチやってます」と声を受け取る。そして、また一段階加速する。

「船長は本当に帰らないんですか？」

なんと答えていいやら。俺はどこまでも地球から離れるために飛ばされた。折り返す機構は有してはいない。未来を語れる若者たちが眩しい。俺も随分と歳をとった。

「このまま行けるところまで飛んでみるつもりだよ」

「もう一つ」

「なんだ？」

「初代社長のようになんて死んでも存在し続けたいですか」

とうに死んでいると分かっているながらも社長の存在は希望だった。

「君たちで決めればいい」

俺はモニターを切ってシートベルトを締めた。ボタン一つで原子炉に燃料を投入する。身体に加速の衝撃が加わりしばらく目を閉じる。地球時間を示す時計がまた少し加速した。

俺には土地がない

嗚呼また通勤。松葉杖の少年がケンケンで階段を上っていった。先発、次発、次々発、背中がお行儀よく静かに並んでいるホーム。ランドセルを背負った制服の少女が鈍行の車内に立つ。母親にずっと手を振っている。ドアが閉まるまでずっとだよ。確かあれはオーストラリア人だった。前職のプロマネが日本にやって来た時「ニホンのデンシャはミンナシズカでイイね」と言った。俺の耳は殆んど英語なんて受け付けない。だけど訛りのきつい英語でそんなことを聞かされた記憶がある。俺はへらへら頷いた。戸袋が好きだ。このポジションに寄りかかって本を開く。この夏というのは秋に使ってもいい言葉かしら。

年内ならありだよな。この夏、鉢植えのアボカドを枯らしてしまったことを悔やんでいる。毎年が未曾有の暑さだ。びっしりと根が生えていて、狭かったろうな、苦しかったろうな。そんなことを思い出したのは図書館で借りた本のせいだ。メキシコ人の掌編集に「盆栽」という一編が収載されていた。原題はなんなんだ。メキシコの言語ってメキシ語？ グラスに発根させるいい感じのアボカドってたまに見るじゃない。でかい種に爪楊枝を刺してグラスで発根させたんだよ。そしたら芽も出るじゃない。観葉植物の腐葉土買って鉢に植え替えるじゃない。あいつはぐんぐん育つ。どこか地面に植えてしまおうかとも考えた。マンション住まいだから俺に与えられた土地はない。ひどいもんだ。地面は区切られ、俺に与えられた土地はこの世に存在しない。勝手に植えるわけにもいかんよな。すごい土壌の養分を吸うと聞いたことがある。緑道なんか植えてわまりの植物たちに影響したらまずいなって。もう果物買ったら種撒くのやめるよ絶対。俺には土地がない。「もう恋なんてしない」がグラスで流行っていると愛息が言っていた。あいつには随分と古い歌だけど、なんでもかんでもユーチューブだ。実際にはもう恋なんてしないなんて言わないよ絶対が流行っているのだろう。そんなことだから寝てもいないのに乗り過ごす。嗚呼。

無期限活動停止中

週末は別の顔。会社員と掛け持ちでアルバイトをはじめた。結婚して三年、子供はめでたいが出産ってそんなに金がかかるのかよ。自治体から補助金が出るらしいが、産んでから後払いなんて意味がないだろう。本気で少子化を憂うなら出産で稼ぐな。

隣駅にうどんチェーンの求人を見つけた。パツとしないショッピングセンターのフードコート。店舗は地味だが日用品が揃うため思いのほか集客がある。久々のアルバイト、うどんを茹でてカウンターに出すだけの単純作業と高をくくっていた。なんだよこの重労働。二日目にして全身筋肉痛で満身創痍だ。大量のうどんを網で引き上げて湯を切るだけで腕がプルプル。盛り付ける具材はカウンター下の冷蔵庫に保管してあるからヒンズースクワットで膝がガクガク。休日の昼飯時は三時間に渡って行列が絶えない。頼むから素うどん以外の注文はするな。それでも消費者のマーチは進む。温泉卵のせろ、とろろのせろ、きつねうどんにしろ。その度、俺は膝から崩れて冷蔵庫を漁った。

「温玉きつねおろし豚しゃぶの冷やしを特盛で」

おいおい、なんだって？ どこか聞き覚えのある声に毛様体筋が反射応答。目の前の男をロックした。「あれ、スコンブ？」

和帽子を被ってマスクまでしているというのに勤務二日目でバレた。俺をそのあだ名で呼ぶな。最も面倒な商品を注文するな。そして、おまえはいまだにギターケースを背負っているのか。一気に不快感が込み上げ、俺はカウンターの下にうずくまる。

「石橋さんどうしました？」

顔を合わせたばかりの峰岸は、学生アルバイトとは思えぬほど非常時に強い。天ぷらを揚げていたあ

いつ自らうどんポジションへ。レジ打ちのフリオはかき揚げが黄金色になったら引き上げるように。俺は腰を折ったままバックヤードへ逃げ込んだ。酸っぱい喉を麦茶でうがいして、継ぎ足したグラスを空ける。一息つくと、まだ坂堂の声が聞こえていた。

「石橋って言ったよね？」

「知り合いですか？」

「昔、一緒にバンドやってた」

余計なことを言いやがる。

「素昆布？」

峰岸も妙に人懐っこい奴で困る。

「知らない？ あいつのあだ名。石橋ってブリッジストーンズじゃないよあって、それで、なんかあつてスコンプに落ち着いた」

「きつねおろし豚しゃぶ温玉の特盛です」

坂堂の気配が消えると、俺は呼吸を整えてラインに戻った。

「大丈夫ですか？ スコンプさん」

石橋さんにしてくれないか。うどんの茹で上がりを知らせるタイマーが鳴り響き、反射的に腕が伸びる。

「うどんあがります」

誰にもなく告げ、皆、事務的に「おねしゃす」と返す。フリオにとっては石橋よりはるかに発音しやすいようだ。

「スコンプさん、ムリしないでね」

彫の深い顔にしわを浮かべて満面の笑みを見せる。その表情は反論を許さない。忙しい現場だ。呼称など呼びやすいほうがいいに決まっている。

行列が途絶えると脱力感とともに暇を持て余す。ダスターを握ってあちこちを拭きはじめた。気づけば坂堂はスマホを眺めながら一時間もズルズルと囁っている。採用面接の時、うどんは生き物だと教わった。茹で上がった麺は十五分で捌かなければならない。あいつの麺はすでに死んでいる。出汁を吸ってふやけたうどんが気の毒だ。二日目にして自分の中にうどん愛が芽生えていることに驚く。

「バンドやってたんすね。パートは？」

「ドラム」

「マジすか」

レジの中締めをしていたフリオは、その日一番の笑顔を咲かせながらあたりを叩きはじめた。

「スコンプさんがドラムであの人がギターか。僕らと同じっすね」

「バンドやってんの？」

久しぶりのバンドトークはどこか気恥ずかしい。

「やってた、かな。ベースボーカルがお笑いやるとか言い出して。だから、無期限活動停止中」

「冷やしキツネください」

「並でいいですか？」

来客で話題は途切れる。うどんの玉を握って冷水に晒す。ここにはドラマーが二人とギタリスト。ど

んぶりに水を切ったうどんを移し、琥珀色に透き通った冷たい出汁を注ぐ。「バンドやろうぜ」なんてことにはならないだろう。膝を折って冷蔵庫からステンレスのタッパーを取り出すと、トングで甘い汁を吸った肉厚のあげをのせた。

「お待たせしました」

坂堂はようやく温玉きつねおろし豚しゃぶの特盛を平らげ、下膳の足で俺の前に立った。自然と口元がゆがむ。なにを尋ねられても面倒だ。

「バンドやろうぜ」

脊髄から指令が飛ぶ。

「やんねーよ」

あいつは前歯を見せ、峰岸とフリオの視線が俺を刺した。

「また明日来るよ」

「平日はいねーよ」

あいつは二、三頷いてから小さく手を振ってギターケースを背負いなおした。ピースマークが貼られたハードケースはあの頃のままだ。

「やんねーんすか」

「あいつ、ライブの半分以上MCなんだよ」

峰岸は海老天を泳がせながら乾いた笑いを漏らした。

「あの人、歌ってたんすか？」

曖昧に頷きながら茹で上がった麺を決まった重量に丸めていく。

「ほとんど説教だったけどな。俺の嫁さんがベースだった」

フリオが乾いた笑いを響かせた。

「ベタだったか？」

「いや。ミネもベースとつきあってたもんな」

お笑いに転身したベースボーカルのことだろうか。てっきりモヒカンの男かと思っていた。そこにボーイズラブがあったことも想定すべき昨今。話がややこしくなりそうで言葉を飲んだ。客は途切れたまま、夕飯時になっても客足はまばらだった。あとは大量廃棄されたうどんを始末すれば退勤だ。

「お疲れ様。筋肉痛は大丈夫？」

妻は安定期に入っている。坂堂に会ったことを話すべきか。学生時分、彼女はあいつの子供を二度おろしている。子持ちで卒業するやつが多いことで有名な大学だった。最近では茶室に乾燥大麻を隠し持っていた茶道部がメディアを賑わせている。いつの時代も二〇歳そこそこで踏み外す奴は多い。

結婚式に呼んだら新婦の両親が暴れだすということで、俺たちの式に坂堂は呼ばなかった。それでも三次会にギターケースを抱えて現れたあいつの余興に誰もが啞然とした。親族がいなくて本当に良かったが、会社の同僚がいる前で俺たちを陶醉させるのはアウトだろう。

「なんかあった？」

「いや別に」

和帽をかぶってエプロンを締める。フードコートに坂堂がいないことを確認して定位置に立った。そ

の日は俺の隣でフリオが天ぶらを揚げている。

「バンドーさんて、メチャウケるね」

「あいつまた来たのか？」

「ミネと3ニンで、スタジオにいましたよ」

ふと気が遠のく。タイマーが鳴り響いて、どうにか覚醒した俺は腕をプルプルさせながらうどんを引き揚げる。冷水に叩き込んで千切れるほどに締めあげた。次第にカウンターに行列がではじめる。素うどんを頼んでくれればいいのに、生卵のせろ、ネギ多めにしろ、大根おろしは別皿にしろと消費者のマーチが続く。

「温玉きつねおろし豚しゃぶ」

顔を上げれば案の定の坂堂。フリオなんか拳を突き上げてグータッチ。

「おまえら子供ができたんだってな」

顔が紅潮する。バイトをはじめた理由を峯岸に話したことがあった。

「温かいほうですか？」

「いや、冷やしだろ」

「並でよろしいですか？」

「いや、特盛で」

何を企んでいるのですか？

俺はうどん二玉分を冷水で解しはじめ。バンドーバンドだった頃の記憶が鮮明に甦る。大学サークル会館のちいさなスタジオで、空のギターケースを背負ったままマイクをしゃぶるおまえに酔いしれた。体表面の孔という孔がすべて開放され、オーク材のチップレススティックで世界を叩き壊した。おまえのやりたいことくらい分かっている。初めて迎え入れる命に生誕の儀は欠かせない。新たに入信した二人に強く嫉妬している。おまえはまだミラクルを起こせるか。俺こそがビリーバー。再びおまえが現れた理由を身勝手に解釈する。

「お待ちどうさま」

俺は前歯を見せる。次第に準備を整える。

孫を待ち構える

「間隔調整のため3分ほど遅れて運転しております。お急ぎのところ申し訳ありません」

絶対に申し訳ないなんて思っていない。定型のアナウンスが流れる。3分くらいでいちいち謝らんでいいし、おれは急いでいない。なぜ誰もが急いでいると思いたいのか。おまえらが分散乗車だのオフピークだのと言うから業務開始の1時間前を目指して通勤しているよ。東京の2階建て電車はどうなった。きっかけはコロナだったけれど、やっぱり空いてる電車っていいよね。

日本の電車は静かで素晴らしいと外国の方々が仰るが、頭の中はお喋りで、些細なことで愚痴を漏らす。いや、漏らしはしない。

そんな些細なことを気にしている場合ではなくってきた。我が愛息が既に自分の子供二人分の名前を考えていると言うのだ。まったくもって毛穴が開く。しげるとのり子を迎え入れて、セカイについて語り合うのは20年先のことになるだろう。それでも最近では1年があっという間に過ぎていく。嗚呼と10回も嘆いたらその日がやってくる。なぜだろう。しげるの笑顔が見えてこない。のり子が蚊の鳴くような声で訴えてくる。

「おながへったよ」

ガリガリに痩せ細ったしげる。

「あついよ」

顔を赤くしたのり子。

どうしたんだよ。おまえら孫だろう。長年悩まされてきた爺さんのリウマチがたちまち治っちゃうんだろ。寝たきりだった婆さんが軽やかに飛び起きてしまうはずだろう。おまえたちのあっけらかんとした生命力が、おれたちを10も20も若返らせてくれるはずではなかったのか。

孫は可愛い。孫は宝だ。

「死ぬ気がしなくなってきた」

おれだってそう言いながら朗らかに逝きたい。

戦場を水田に。沸騰した地球にそよ風を。広告に溢れる列車の扉が開き人々を押し出す。思考が中断され、ホームに入り乱れた人々を交わしながら、最短距離で総武線から山手線を目指す。立ちほかかる自動販売機。今日も矛盾を抱えながら経済活動に励むのだ。貧血にはココアがいい。愛息が言っていた。

妻が好きでたまらない

十六時にはソワソワしている。仕事なんて十七時半に切り上げて真っ直ぐ家に帰る。だからと言って業務を疎かにするわけではない。利潤第一主義社会で未永く妻との時間を重ねていくためには、なによりお金が必要であることを知っているから。俺が死んでもほかの男に頼らずに生きていけるよう、住宅ローンには団体信用生命保険。そのほかにも十分な生命保険を掛け捨てている。

最近では妻が先に死んでしまうのではないかと気がかりでならない。体重は俺の三倍を超え、玄関から外に出ることができなくなった。ただいまのハグでその大きな体に腕を巻きつけることは容易でない。肉にぬるりと腕を食いこませて背中を手繰り寄せる。自分の指先が触れ合ったときの達成感、そこからさらに自分を妻に埋め込んでいく時の多幸感。彼女の体調を気遣いつつ、もっともっと大きくなればいいと願っている。大好きな妻が部屋いっぱい満ちればこの上ない。米は五合焚いておけば大丈夫かしら。鶏モモ肉ブロックは五枚揚げれば足りるかしら。健康のためにバナナを一房。最近ではさらによく食べよく肥える。その肉体に埋没する日は近い。妻に負担をかけないように、俺はもっと細くなったほう

がいい。ウィスキーに鶏のささみ肉を少々。かつて細マッチョが好きだと聞いたことがあったような気がするよ。大抵の女子は細マッチョが好きなんだろう。細マッチョの俺がどこまでもふくよかな妻を纏う。全身で妻の存在を感じていないと不安でたまらない。豊かな肉体に埋もれていないと生きた心地がないのだよ。L'essentiel est invisible pour les yeux. それは俺が最も嫌悪する言葉だ。大切なものは確かな存在感で目の前に立ちはだかっているべきだろう。

誰もが仕事なんて十七時半に切り上げて真っ直ぐに家に帰るべきなのだ。マンシヨンのドアを蹴破り、日増しに肥ゆる妻に向かってダイビング。肉に腕を食いこませて背中を手繰り寄せる。両足を巻きつけて股関節をきつく締めあげ、尚も引き寄せる。妻は鳴咽を漏らした。両膝から崩れ落ち、そのまま細マッチョを押し潰すように倒れ込む。俺は後頭部を強打、一筋の光も届かない暗黒の世界が広がった。遂に妻を纏うことに成功したのか。言葉にならない。息が詰まる。気が遠くなる。重いよ。でも、大丈夫。未永く妻との時間を重ねていくにはお金が重要であると知っているから。住宅ローンにはもちろん団信。そのほかにも十分な生命保険をかけている。俺は全身で妻の存在を感じながら人生を全うするのだ。

あれ。なにかしら。はじめは妻の心臓だと思ったんだよ。でも、それにしても不規則な運動で、なにかが妻の中で蠢いていた。五感を研ぎ澄ませ、混沌を掻き分けながら蠢くゾーンへとアプローチする。俺は確信した。そこには俺と妻の融合体が潜んでいる。俺たちは融合や分裂が許された生命体ではなかった。俺と妻の融合は次なる個体に託すほかない。プツンと肉のダムが決壊したかと思えば妻は破水した。俺は火事場の糞野郎。梯子車を呼ばなければならぬ。マンシヨンの玄関から出ることでできない妻はベランダから出すほかない。羊水にまみれた俺は妻の股ぐらから這い出す。そして、両手にブライベート携帯と会社携帯を握った。左耳にあてながら救急要請、右手で育休申請。携帯端末を放り投げると、妻を抱えあげてベランダに立つ。星空の下、俺たちは抱合に続いて咆哮。

おまえらが大切でしかたがない

捕食者である以前に哺乳動物なのだ。おまえらはかつて俺が愛玩していた妻の乳房を奪い合いギョングン吸いとっていく。彼女は乳腺で血液を材料にして乳を造り出す。乳房ばかりを肥らせ身体はすっかり痩せ細っていった。

その変わり果てた姿にいてもたってもいられない。今すぐ石槍を握ってイノシシ狩りに飛び出したい気分だが、おまえらはまだ乳飲み子だ。時は令和だ。玄関から飛び出したところで、コンビニへ無駄買いに走るだけ。財布を忘れて愉快にバーコード決済だ。まったく不愉快でならない。母親は自らの肉体を削ってあいつらに乳を授ける。俺だって肉体を駆使しておまえらのためにはたらきたい。乳飲み子に糧を与えることのできない俺はスマホをピッとして妻にプリンを買い与える。湿った布団でぐったりしているニンゲンにプリンは特別な効能を秘めている。本当は家族のために山野で獣を追いかけたい。捕食者だもの。あ、袋いらないます。スプーンもいいです。ポリプロピレンの容器を手には俺は溜め息をついた。

行儀よくまじめなんて出来やしなかった。この母乳から卒業したおまえらはひとまず離乳食だ。ベースは米でいいか。乳菌が生えはじめる前になんとか水田を黄金の稲穂で埋め尽くしたい。そして、おまえらに歯が生え揃った頃、いよいよ俺は石槍を握って立つ。四角四面の公教育を経て経済活動の歯車として社会に放り出された俺だ。おまえらが母乳を卒業するまでに備えておくべきことが山ほどある。そもそも俺には田んぼがない。あれだけ経済活動に励んできたのに一畝の田んぼすら持てない。この国に暮らしていながら個人の領分がまるで無いという悲劇。引退した百姓の耕作放棄地ならば格安で手に入るかしら。おまえらを育むという目的があれば、このえげつない経済活動をしばらく続けてやろうという気にもなる。儲けることがなよりの社会貢献だと元上司は得意気に言う。御国に税金を払っているからなんだって。それ誰でも言ってるよ。俺たちは飯を食っても野糞をしない。経済活動からはじめて循環の重要性を知る。

牛がいるよな。耕作放棄地を水田に変えるには、馬でもいいな。痩せ細った土壌を耕し、水を張った田んぼを代掻きするため、馬鍬を引く家畜がいるだろう。牛や馬にたつぷりと牧草ロールを食わせておけば、馬鍬を引きながら糞便をたらす。そいつと一緒に掻き込めば栄養たつぷりの土壌に変わる。俺も半裸で糞をたらそうか。

並行してイノシシの狩場を探さなければならない。御手手の皺と皺を合わせていただきます。それは命をいただくことに対する祈りの行為。俺が自ら手を下し、妻がそれを魔法の料理に変える。ジビエであってこそ胸を張っていただけます。

犬がいるよな。狩りには相棒が必要だろう。犬は飼ったほうがいい。赤子と触れ合う動画なんか目尻を垂らして眺めてしまう。俺もバズりたい。否、そんなことが主目的ではない。狩りには鼻の利く犬がいい。獲物を見つけたら遠くまで響く声で吠えるやつがいい。狩猟採取民社会は、生きるための労働に費やす時間が実は近代産業社会のそれよりずっと少ない。余暇の多い豊かな社会がそこにある。

俺は数年後のミライを見据えながら乳を吸い続けるおまえらに目を細める。一人のおまえが乳首から唇を離してとろんととろけた。咄嗟にその小さな背中手に添えて優しく抱え込む。背中を叩けば小さなげっぷとともに屁を漏らす。妻と目を合わせる。全ての生理現象が愛おしい。もう一人のおまえは黒目がちに俺を見つめる。おまえも飲めよと誘っているのか。

ニンゲンなんて生まれながらにケチである。そう思っていたのだが、おまえは分け与えることを惜しまない。俺は懺悔する。ミスターイトウのアメリカンソフトを部屋に隠し持って一袋を食べ切ったことがある。しっとりとした食感の生地に香ばしいマカデミアナッツとごろっとしたブロックチョコが練り込まれたあれだよ。一時期ひどくはまっていたのだ。一度に食べたわけではない。二月ほどかけてチマチマ食い尽くした。嗚呼、卑しい。いつまでもそれを覚えてるのは悔いがあるからで、惜しみ無く分け与えるおまえたちが眩しい。

区役所通りに選挙カーが走り抜けた。連呼される名前がドブプラー効果で歪む。あんたは俺の子どもたちに惜しみ無く与える気概はあるか。更なる格差を生むことで優位性を保ちたいだけではないか。八〇年後のセカイを語れるか。俺の子どもたちは死の床で満足な生涯だったと微笑みながら死ぬことができない。そんな気がしてならない。水田と狩場が手に入ったら税金は免除されるか。俺はもうこのホシに直結すると決めたんだ。

イチゴのチョコレートはうまくない。

以前にもそんなことを聞かされていた気がするのだが、これで三回目だ。確かに俺だっとうまいと思ったことがない。それでも見た目のかわいらしさが先行して、彼女の小さな顔を思い出すたび、あの甘酸っぱいチョコレートを口にする姿を思い描いてしまうのだ。

俺は祈るように茶筆筒の開き戸をひく。思わず目を閉じる。そしてゆっくりと瞼を上げれば、案の定そこには未だ開封されていないクッキーサンド。デパ地下スイーツコーナーで買ったんだぜ。行列の定きる一番人気、完熟イチゴのクッキーサンド。

「ショコラとイチゴのどちらにしますか」

目の前には華やかなポスター。清潔な皿の上に一枚目のクッキーサンド。さらに波止場のポラードに片足をのせているかのように佇む二枚目のクッキーサンド。その周囲には真っ赤なイチゴが添えられて、写真はイメージです。

「人気は？」

「完熟イチゴのクッキーサンドですね」

ですよね。ポスターに一番人気とシールが貼ってある。ちょっとこの子と言葉を交わしたただけだよ。スイーツが好きそうなポッチャリ系だった。あの子を思い出そうとしてもポッチャリ系テレビタレントの顔しか浮かんでこない。

無駄にしっかりと箱を開けて、個包装のクッキーサンドを一つ手に取った。開封前に冷蔵庫を開ける。紙パックの無糖コーヒーを取り出し、マグカップに注いだ。

クッキーサンドをひと齧り、すぐにコーヒーを口にした。イチゴのクッキーサンドは眺めて楽しむものだろう。それでも朝に糖分はとっておいたほうがいい。ぼんやり仕事をしていると課長に小言を言われる。

「朝飯食ったか」

朝から二杯は食ってジョギングでもしそうな斜め上の上司だ。首を振ったら、待っていましたと言わんばかりに四字熟語を投げ込んでくる。

「給料泥棒」

朝飯を食わずにエンジンのかからない社員をそう呼ぶらしい。

ここ五年、朝飯なんて食っていない。それでも給料泥棒などと言われるのは癪じゃない。早朝の静かな台所で、俺はコーヒーと何かを口にするようにしている。摘まむものがなかったら豆乳を足した。

クッキーサンドを噛み砕き、すっかり水分を奪い取られた口にコーヒーを含んで、天井を見上げる。ショコラにしておくべきだったかしら。いずれにしてもバタークッキーにたっぷりチョコレートが挟まったスイーツというものはなかなかへビーだ。なんとか喉の奥へと流し込んだ。箱にはまだ五つも残されている。会社で配ろうかと五人の顔を思い浮かべる。二人の派遣を除いたらおっさんとおっさん

とおっさん。斜め上の上司なら一人で三つくらい食ってくれるかもしれない。

結局、五枚のバタークッキーと布団に包まった彼女を残して家を出た。

会社に着くと、いつだって誰よりも早く出社している派遣のミル姐さんがいない。

「姐さんいないの、珍しいっすね」

「おまえは本当にぼんやりしてんな。もう辞めたよ。斜田くんと入籍したろ」

直木課長が溜息をつく。俺は目を丸めた。斜田くんとは朝飯二杯の課長だ。俺は直木課長が手を付けたものと思っていた。

「そうっすか」

直木課長はイライラした様子でエンターキーを叩く。メールが送信された。

「そうっすよ」

ラップトップを立ち上げれば課長からのメール。ミル姐さんの出産祝いを募って玩具を送るそうだ。送るよね。木製の玩具。昨今の状況を鑑みれば、米を送ってあげたほうがいいのではないか。要らぬ心配をするが、プレゼントで成功したことの俺だ。余計な口は挟まず、二口分のネットショッピングギフト券を送信した。

その玩具はミル姐さんのリクエストらしい。プレゼントなんて大抵要らないものが届く。聞いてしまうのが無難だ。ジグザグのスロープを木の玉が転がり落ちていくだけの玩具。鈴の入った玉、テントウムシの玉、花びらのついた玉、如何にも子供が熱中しそうな玩具だ。

花びらをくるくる回しながら転がり落ちる動画で眺めていると、ふと亡き母のことを思い出した。母はフェルトで作られたようなガーベラが好きだった。いつだって徳利を引いて伸ばしたような花瓶に一輪差していた。

その日の帰り、一輪のガーベラを買った。家では徳利しか見つけられず、茎を短く切ってそれに差した。徳利を片手に彼女が眠る寝室へ向かえば、ガーベラを目にした途端、顔面の皴という皴を全て浮かび上がらせる。泣くのか。笑うのか。笑ってくれますように。願いは届かず、彼女は子どものように大泣きした。一番贈ってはいけないものだったらしい。

「祖母ちゃん、ごめんよ」

彼女は母ちゃんの名前を口にしながら何度も「ごめんね」と繰り返した。俺はその悲しみが鎮まるまで、ただただ背中を摩った。次第に背中の中が冷めていく。

「なあ、祖母ちゃんの好きなものってなんなんだ？」

「イチゴチョコ」

「嘘つけ」

気を使いすぎだろう。

「祖母ちゃんがな、イチゴチョコ食ったら全ての戦争が終わるんやで」

ついにあぶなくなってきたか。

「でも、イチゴチョコ食ったら祖母ちゃんは逝ってまうんよ」

「じゃあ、食べるの止めとけよな」

祖母ちゃんは顔中の皴で微笑んだ。本当にいい感じに皴が入っているから、俺は彼女を喜ばせたくて

しかたがない。

「祖母ちゃんかな、イチゴチョコ食ったら地球も冷める」

俺が想像するに、ミル姐さんと斜田課長の子はパンパンな顔でデカさが可愛い。

「死ぬ前には、最高のイチゴチョコを贈ってあげるよ」

諸国民の中の正義の人

生まれは北関東で、横浜に引っ越すなんて聞かされた時には舞い上がった。ランドマークタワーに大観覧車、みなとみらいの風景しか思い浮かんでこなかったから。

「どこに住んでるの？」

横浜市民に聞くと神奈川県とは答えないなんて笑い話があるじゃない。横浜と聞いただけでオシャレな暮らしをしていると思ったら大間違い。横浜市の面積は四三八平方キロメートル。三市が合併したさいたま市の二倍もあるんだから。川崎市ならワンチャン三つが収まるレベル。横浜市の何区に住んでいるかが重要。それでもちょっと名の知れた区だって主要な駅から外れると途端に田園風景。私が引っ越してきたところなんて駅前に菜の花畑が広がっている。冷や飯で有名な中学校給食を終えて、ようやくみなとみらいへ向かう通学定期を手に入れた。親にはちょっと気が引けたけど、公立受験は手を抜いた。春になると視界いっぱい広がる水色の空と黄色の絨毯。一週間くらいは桜の開花と重なったりもして、なんだかんだ言っても晴れやかな気持ちになる。眠い目を擦って五分くらい早く家を出ようなんて英断する。本当に花が好きなのかと問われれば、花を愛でる自分にうっとりしているだけかもしれない。早起きは五分が限界。今年は桜の開花が遅く、黄色の絨毯の上で満開の桜といったコラボレーションは見られなかった。ピースサインを頬に寄せて菜の花をバックに自撮りする。インスタにアップするほど自信過剰じゃないけれど、バアバに写メすれば「かわいい」って返信が返ってくる。生存確認。

五月になればローズウィーク。山下公園とか、港が見える丘公園とか、みなとみらいから足をのばせば何百種というバラを無料で楽しむことができる。

「マジ無料なの？」

本当に花が好きなのか疑わしい私は、なかなかそこまで足がのびない。まだ大丈夫。まだ枯れない。あそこはガチ勢がいて、ロリータに着飾った年齢不詳の女たちが被写体になってポーズを決めている。バアバに写メするのもなんだか憚れる。

「あのヒトたち何者なんだろう」

そんなこんなで気づけば梅雨も間近の曇り空。もう無理。さすがに散る。バラの咲く頃、急に気温が上がって夏の制服を引っ張り出したけれど、太陽の隠れる日が続くとポロシャツ一枚では肌寒い。

「無料で見れるんなら、行かないと勿体ないだろう」

あれは誘いの言葉だったのだろうか。中間テストが終わった開放感も手伝って、気づけばメジリと二人で山下公園を歩いている。あいつのリュックサックはいつもパンパンで、教科書の入れ替えとかできないタイプなのだろう。特に気にしてはいないみたいだけれど、いつだって肩ひもが喰い込んでいて、見ているこっちがしんどくなる。

ふと立ち止まると、あいつは湿ったベンチの背もたれに顔を寄せた。

「ミスジマイマイ」

そこには一匹のカタツムリが懸命に角を伸ばしていた。メジリは中腰でスマホを構えた。思えば私たちが入部した時、科学部は生物部だった。あいつは本当に生き物に興味があつてこの部活を選んだのだろうか。この辺で見かける鳩にはドバトとキジバトがいる。そう教えてくれたのもメジリだった。そのせいで鳩を見かけるたびに首の色を確認する。七色に光っているのがドバト。地味なのがキジバト。見かけるのはドバトが多い気がする。地味だけどキジバトだった時にはなんかラッキー。

いつまでも動かないメジリ。もしかして動画撮ってる？ 陽が暮れるよ。「しゅおお」とか口を尖らせながらスマホを回して肘を引き上げる。あいつは満足した様子でカメラを切った。どうすんのその動画。「でも、久々来たな。バラの公園があるなんて知らなかったし」

あいつは幼い頃、両親に連れられて何度もここに来たんだって。ひたすら鳩を追いかけている動画が残っていて、しょっちゅう家で見させられるらしい。どこの親も誕生日とかに過去の動画を引っ張り出してくるよね。本当に当時の記憶なのか、動画の記録なのかこっちも分からなくなる。三歳の思い出なんて動画の通り。言うほど何度も来てないんじゃない。

私は中学校に上がる前に一応横浜市内に引っ越してきて、一度は家族でこの辺を歩いたはず。家族LINEのアイコンが、変わらずマリントワーをバックにした集合写真だから。中学生にもなったら親と公園なんて来なくなるじゃない。あの頃は運動部だったし、ちょっと豪華なご飯が食べられるとかさ、新しい服が買ってもらえるとかさ、そういうのがないとかななか。

「しゅおお」

メジリになんか奢ってもらおうとか、そんな期待はしていないけれど、カタツムリの動画なんか見せられてもリアクションに困る。

水の守護神像をチラ見して、ようやくたどり着いた沈床花壇。未来のバラ園とも呼ばれるけれど、ドローンで花壇が飛んでいるわけでもない。レトロフューチャー感もなく、何が未来なのかは分からない。だいぶ花は散っていて、緑の低木には花卉を茶色く濁らせたロゼットが点々と取り残されていた。とりあえずカメラに収めたけれど、なんだか痛々しくてすぐに削除した。頭の中で「かもめの水兵さん」がループしているのは、さっきその歌碑が目についたから。歌い出しというか、そのタイトル部分しか知らない。ただただ「か、も、めえの水兵さん」がループしている。

メジリは再び立ち止まる。視線の先には山下公園に係留された日本郵政氷川丸。

「氷川丸、入ったことある？」

「入れんの？」

入ったことがあるのかないのか。私の回答はあいつが想定していたものではなかったようで、「そんなことも知らないのかよ」と、なんだか不満気だ。

「入れるよ」

あいつはぶつきらぼうに答え、何かを読み上げるように氷川丸に関する知識を披露しはじめた。

「昭和十五年（一九四〇）七月二十二日、氷川丸には七十七名あり。行先はシアトル。その手にはリトアニアの日本領事館で発給された『命のビザ』が握られていた」

「ちうね？」

私の口からその名前が出てきたことにメジリはひどく驚いた様子だった。あいつは私のことを何も知らない馬鹿だと思っているから。否定はしないけど、戦争の空気が世の中を包むたび、杉原千畝の名前が囁かれるようになるじゃない。

曇り空、花びらを落とした茨の向こうに望む船体。全長一六三・三メートル、船幅二〇・一二メートルの海に浮かぶ文化遺産。ドイツと同盟を組んでいた日本政府の判断に背いてまで、杉原千畝は人道主義・博愛精神に基づき日本通過ビザを大量発給した。それによって東廻りでパレスチナの地を目指した多くの避難民の命が救われた。シベリア鉄道でウラジオストクへ、船舶で敦賀港へ渡り、神戸港や横浜港から再び出向してアメリカ大陸へと逃れた。

そこには何隻もの日本郵船の船舶が活躍した。太平洋戦争が開戦すると大型の船舶は病院船や復員船として、終戦後には引揚船として国に徴用されるが、その多くは撃沈された。

「現存する唯一の命の文化遺産だよ」

メジリの声に呼応するように、背後から集団の声が響いた。

「シースファニア・ナウ」

横浜市主要地方道八二号山下本牧磯子線、そこには四色の国旗を掲げた人たちのマーチが進んでいた。私は目を閉じて緑の裏地をあしらったドレスでレッドカーペットを歩く自分を思い描いている。そんなことあり得るはずもないのに。真っ赤なバラをバックに被写体になるのも悪くない。なんて、涙が出るほど笑える。

「ん？」

「んん」

小さく首を振る。マーチに連帯して声を上げるくらいの勇ましが欲しい。

「チャップリンも氷川丸に乗ったんだってな」

目を開けば、氷川丸のデッキには山高帽に口ひげを蓄えたチャールズ・チャップリン。私を励ますように前歯を見せて、ステッキを回しながらペンギンのように歩いている。初めて日本の土を踏んだのは昭和七年（一九三二）、映画『街の灯』を完成させた後のこと。既に時代遅れとなっていたサイレント映画、はじめての一般向け試写は成功と呼べるものではなかった。それでも次第に作品が評判を呼ぶようになると、正式公開後には高い人気を集めた。

私たちが横浜に引っ越してきたのは独身の叔母が近くに住んでいたからで、中学生の頃は暇になるとよく遊びにいった。最近、疎遠になってしまっているけれど、私の進学費用を随分と援助してくれているみたい。あの人はうちなんかよりお金があるから、イマーシブオーディオだとか、薄型の有機ELテレビだとか、そんな最新のAV機器をいち早く取り入れる。それなのに鑑賞する作品はいつだって昭和。ブルーレイでチャップリンが流れていたけれど、それってさすがに叔母ちゃんが生まれる前だよね。で

も、こっちは英語なんてからっきしだから、たまにしか言葉の出てこないサイレント映画は好きだった。字幕付きで最新のドタバタ洋画なんて上映されても、画面の下のほうばかり眺めて文字を追うことに必死。吹き出しにしてくれればいいのに。

そういえば『街の灯』では盲目のヒロインがバラを売っていた。

「明日が来れば鳥も歌います」

立ち退きが迫られたヒロインのために戦うチャーリーのボクシングシーンはやっと笑えた。

というか、あいつなにしてるの。親指と人差し指で作ったフレームから氷川丸を眺めている。カタツムリはスマホで撮っていたくせに。

「船とか好きなの？」

メジリは下唇を突き出して首を傾げた。

「ガキの頃、親に連れられて中に入ったよ。だいたい小さい頃の男子って乗り物が好きだと思われてるじゃない」

「それでもないの？」

「停まってる船に乗っても別に面白くないよな。中でケーキでも食えればいいけど」

ケーキなんて食べたいんだ。

ヨーロッパを回ってアジア諸国を観光したチャップリンは、日本郵船照国丸に乗り込んで神戸に着岸した。多くのラジオ番組やレセプションに参加した後、江戸前の天ぷらを味わい、とても気に入ったという。帰国の船に氷川丸を選んだのは、天ぷらが理由だったのではないかと言われている。

「あと、毎日カレーを喰いたがってらしいよ」

「インド行けばいいのに」

「日本のカレーは別物だろう。ココイチ好きな外国人とか多いじゃん」

「知らない」

「ユーチューブとかでよく観るだろう」

よくは観ない。

昭和十二年（一九三六）、チャップリンは二度目の来日を果たす。ファシズムが台頭し、この問題から仕事から遠ざけることができないと考えていた頃だ。

「戦争はミノタウルスのように若者をむさぼり喰い、シニカルな老人を生き延びさせた」

わずかに四日違いの生まれ、自分と同じような口ひげを生やした独裁者がチャップリンにアイデアを与えた。初の本格的なトーキーだった。

「話すんだ。それだけが私たちの希望だ」

独裁者ヒンケルと瓜二つのユダヤ人床屋店主、ひょんなことから独裁者と間違われ、大群衆の前に演説することになる。ファシスト国家に敵視されたチャップリンだが、一九三九年ユダヤ人救済基金に多額の寄付をして、ナチスから逃れるユダヤ人を援助した。避難民が氷川丸に乗り込む一年前のことだ。

カスタードクリーム色のバラが一輪きれいに花を咲かせていた。私は氷川丸へスマホを向けるふりをしてカメラを反転。ピースサインは作らず自撮りした。写メを送ればすぐにバアバから返信が返ってきた。

「生存確認」

私がつぶやくと同時にメジリは小声で問いかけた。

「え、なに？」

「いや、だから一緒に乗らないかって」

停まっている船に乗っても別に面白くないって言ったくせに。メジリは私の返答を待たずに歩き出す。断わりはしないって知っているから。

そもそもバラ園に誘われた時だって「行く」と言った覚えはない。それでも気づけばメジリと山下公園を歩いている。高校に入って同じクラスで知り合ってから、ずっとそんな感じが続いている。部活が同じなのもメジリの話に乗ったから。生き物が好きなわけでもないのに生物部。トイプードルを見たら可愛いと思う。でも、あんなもの誰だって可愛いと思わずにはいられない。犬派か猫派かなんて問われたら、どっちの派閥にも属せない。アメリカンショートヘアだって可愛い。

私くらいの学力で大学を目指すなら、ひとまず推薦を狙うのが無難。だから課外活動くらいしておいたほうがいい。中学生の時はバスケットだった。顧問からはスリーポイントゲッターなんて呼ばれていたけれど、体格が恵まれていなかっただけ。高校に入って続けるつもりはなかった。生徒会という柄でもない。どこで仕入れた情報なのか、生物部はたまに餌やりしているだけでいいんだって。それだけで内申に書けるならって不純な動機で入部。確かにはじめの一年間はそうだったよ。夏休みなんて当番制で週に一回学校に行けばいいだけ。でも、二年目になったら顧問が変わって科学部になった。放課後には勉強会なんかがはじまって、来月には天文学宇宙検定なんてものを受けることになっている。話が違うぞ。

「俺も受けるから。皆で勉強しよう」

学校の先生ってブラックなんだろう。高校教師はそうでもないの？ 無理しないで。

冷たい。メジリが私の頬に缶コーヒーをつけた。なにそれ。自分はブラック無糖で私はエメマン。なんで。あいつはすぐにプルタブを開けたけど、私はなんか飲む気がなくて両手で包んだ。冷たくて気持ちがいい。顔を上げれば、そこはシーバス乗り場だった。私は料金表に視線を送りながら阿呆のように口を開けた。てっきり氷川丸に乗るものと思っていたから。

「いや、船代は俺が出すよ」

「大丈夫。コーヒーありがとう」

ありがとうと言ったからにはプルタブを鳴らして口をつける。あいつは満足した様子でブラック無糖を一気に飲み干した。カップルが二組と大きな笑顔を貼り付けた子供連れ。軽快なエンジン音に包まれて、妙にべちゃんこな船が海の上を滑りはじめた。

「え、なに？」

「いや、だから宇宙検定の勉強してるか？」

メジリは割と色々と話しかけてくるやつだけれど声が小さい。老夫婦は静かに海を眺め、若いカップルはスマホをいじっている。

「過去問はやってるよ」

エンジン音の中、声を張り上げないと会話が成り立たない。

「え、なに？」

「いや、だからメジリは英検とか受けてんの？」

「ああ、準二級持ってるよ」

「マジ？」

思わず目を丸めてメジリの顔を覗き込んだら、あいつのほうが驚いた。

「三級は中学でとってたからな」

「すごい。もう推薦なんて楽勝じゃない」

シートで肩を並べて私はもう羨望のまなざし。あいつは腕を組んで通路側に傾いた。

「シースファア・ナウ」

「なに？」

「意味分かんないよな。英検準二級でも、スマホに＃CeasheNow が流れてきたとき、なんのことかさっぱり分からなかった」

メジリもさっきのマーチに気づいていたのだろう。私たちは黙り込む。斜め前に座るカップルの男が肩を揺らしている。スマホの画面では激辛カップ焼きそばを啜り上げた小太りの芸人が悶えていた。

「戦争嫌だね」

「めっちゃ怖い」

いつだって何事にも臆することないイメージだったから、その言葉は意外だった。視線を船の前方に戻せばあいつの体温が戻ってきた。

「宇宙検定絶対とれよ」

「なにそれ」

「英検とってないんだろう」

「英語無理」

「だからいいんだよ。英検取ってないくせに宇宙検定三級だったら格好よくね？」

思わず吹いた。あいつは私の手から勝手にエメマンを奪い取って一気に飲み干した。

「さっきから零しそうで気になってたんだよ」

あいつが買ったものだけど、そういう問題でもない。

「一年のうち一番夜が短いのは？」

「夏至だろ」

常識。

「地球からみて一番明るく見える星は？」

「シリウスだっけ？」

結構やつてるでしょ。

「天の川銀河の中心にあるブラックホールを撮った望遠鏡は？」

「知るかよ」

「イベントホライズンテレスコープ」

メジリは細い目をカッと見開く。私は思わず窓側に傾いた。

「スゲーな。三級いけるよ」

「四級の過去問だけどね」

「宇宙とか言って問題範囲も広すぎだよな。でも、絶対とっついたほうがいい」

「推薦の役に立つかな」

「推薦とって大学行ってもな」

あいつは両手で顔を擦りながら、もう一度「めっちゃ怖い」と呟いた。

シーバスは赤レンガ倉庫を過ぎて、みなとみらい橋をくぐる。コンクリートに囲われたここはもう海ではない。船は帷子川を上っていく。

「話すんだ。それだけが私たちの希望だ」

「なんだそれ」

「さっき言ってたじゃない」

それは映画『独裁者』でチャップリンが扮した床屋店主の台詞ではなく、謀反人シュルツが床屋店主を壇上に押し上げた時の言葉だった。そして、サイレント映画にこだわりの続けたチャーリーが映画史に残る六分間の大演説をぶつ。

そんな大それたことはできないけれど、私は呟く。

「戦争嫌だね」

メジリは両手で顔を擦る。

「めっちゃ怖い」

私は「めっちゃ怖い」と書かれたプラカードを掲げて、山下本牧磯子線を歩く二人を思い浮かべる。それくらいなら声に出して言えそうだ。

シーバスは横浜ベイクオーターへ滑り込む。メジリはもう帰るつもりなのだろうか。膝に抱えたパンパンのリュックサックを抱えて立ち上がった。あいつはJR。私は市営地下鉄だ。げ、こって地下鉄までめっちゃ遠いよね。そんなことより、本当にこのまま帰るつもりなの？

「ねえ、こって地下鉄までめっちゃ遠くない？」

「おまえ地下鉄だっけ？ ごめん」

「いや、別にいいんだけど」

私はシートに座ったままバックを抱えている。あいつは遠心力で振り回されそうになりながらリュックを背負った。やっぱり帰るんだ。

「ねえ、山下公園に戻らない？」

「え」

いつもより少し大きな声であいつと言葉を交わした時間が気持ちよかった。

「いや、船代は私が出すよ」

「大丈夫」

あいつは目を赤くして、あまり大丈夫ではなさそうに自分の頬を両手で打った。

「なんか珍しいな。おまえからの誘い」

「誘って」

私は顔が沸騰しそうになって、でも、沸騰する意味が分からない。沸騰したら負けだ。負けとか意味が分からない。あんたが「めっちゃ怖い」とか萎れたこと言ってるから気を使ってやってるだけじゃない

い。鼻をおっぴろげて、眉間にしわを寄せて、私はひどい顔だったろう。あいつはリュックを肩に食い込ませながら私を見下ろす。その唇は細かく震えていた。

「終点ですよ」

船内にアナウンスが流れる。このまま居座っても折り返してはくれないようだ。重い腰を上げると、あいつは逃げるように船から下りた。なんかもう帰ってやろうかって気分になっていたけれど、あいつはチケット売り場へと小走りに駆け上がる。言い出しっぺは私だから仕方がない。溜息をついて渋々感を出しながらあいつの後ろを追いかける。階段を登り切ったところであいつは振り返った。

「ちょっとそこで待ってる。急いで買ってくるから。さっき乗ってきたやつに乗らないと一時間くらい待つぞ」

結局、私たちはシーバスを見送った。傾きはじめて西日が背中を温める。

「すまん。ちょっと迷っちゃってさ」

メジリの手には二枚のチケット。勝手知った風に駆けあがっていったけれど、そうでもなかったらしい。私は欄干に頬杖つきながら口元を隠した。笑いそうだったから。

「怒ってる？」

あいつはオドオドと私の顔を覗き込む。また鼻をおっぴろげて眉間にしわを寄せていると思ったのだろう。私は小さく首を振った。

「帰る？」

もう一度、小さく首を振った。あいつは重たいリュックを下ろして柵に凭れた。

「一時間待ちだな」

あいつはスマホを取り出してカタツムリを眺める。

「あんたカタツムリが好きなの？」

「そうでもないけど」

「ふつうカタツムリ見て、ナントカマイマイとか言わないよ」

「ふつう？」

あいつは柵に寄りかかったまま首を折ってスマホを見下ろしている。首痛そう。

「好きでもないのに観るの？」

「折角撮ったしな。って言うかよ」

メジリは首を回して私に視線を送る。すると、途端にスマホを振りながら不満を決壊させた。今どき四ギガのプランしか契約してもらえない高校生なんているのか。スタートプラン4Gってなんなんだよ。こっちは電話しか使えない爺さんじゃないんだぜ。お陰様で、お天道様の下でユーチューブなんてとても観られない。中学校の時に持たされた一円スマホをずっと使ってるんだぜ。未だに安心フィルターとかかかっていてさ、いつどんなサイトを見てるかなんて絶対親に監視されてるよ。自分で動画撮影してオフラインでユーチューバー気取るくらいしかできないつつうの。中学生の頃だったら、それでも楽しく遊んでたかもしれないよ。こっちはもう大人料金で電車乗ってたんだよ。脛毛だってボーボーで、たまには髭だって剃ってたんだよ。

あいつの怒りはどんどん明後日の方向へと向かっていく。電車料金は中学の頃から大人料金だし。せこいよね、鉄道。シーバスだってそうだけど。私の思考は一昨日に向かいそうで、とりあえずブレーキを踏む。

「私も安心フィルターかかってるよ」

「え、マジ？」

メジリも本当は激辛焼きそばで悶える芸人を観ながら馬鹿笑いしたいのだろう。男子ってそういうの好きだもんね。

「あれって監視されてんの？」

「知らんけど」

スマホから「しゅおお」とあいつの声がする。絶対にチャンネル登録なんかされないタイプ。でも、ほかにどんな動画を撮っているのかちょっと気になる。

「あのマイマイ、まだベンチで這ってるかな」

「もういないだろ。時速四八メートルだぜ」

「変なことよく知ってるよね」

あいつはスマホを切ってお尻のポケットに突っ込んだ。

「宇宙検定に出るぞ」

「出るわけないだろ」

「地球から月まで時速四キロメートルの徒歩で向かったとすると、どのくらいかかるか？」

「あった。四級の過去問でしょ」

「一年だっけ？」

「一〇年じゃなかった？」

多分、私のほうがあっている。四級くらい軽く受かるんじゃないかって、妙な自信が湧いてきた。宇宙検定なんてまったく興味がなくて、そんな受験があることすら知らなかったのに、合格認定証を手にした自分を思い描いている。そして、緑の裏地をあしらったドレスでレッドカーペットを歩くの。

「おまえさ、今、四級の合格認定証を持ってレッドカーペット歩いている自分を妄想してただろう？」

なんて指摘をされる可能性は限りなくゼロ。妄想はどこまでも馬鹿馬鹿しくて、私は愉快。

「おまえさ」メジリの声にドキリと肩が反射応答。「あんまりスマホとか見ないよな」

動揺しながら何度も首を縦に振る。

「四ギガ？」

私は首を傾げた。無制限だったと思う。少なくとも残りのギガ数とか気にしたことない。ギガ喰いそうなのってバアバに写メを送るくらいだし、いつだって妄想の世界で楽しんでいるから。メジリがオフライン動画で楽しんでいるのと同じだよ。

空が薄紫色に変わっていく。船で山下公園まで戻った頃には、ずいぶんと陽が落ちていだろう。「めっちゃ怖い」と書かれたプラカードを掲げて山下本牧磯子線を歩くなんて、そんな気持ちはもうさらさらない。なんであれほどやる気になっていたのだろう。一時間前の自分がまったく理解できない。戦争のことなんて、できるだけ考えたくないじゃない。

なんで山下公園に戻らなきゃならないの。私から言い出したことなのに目的を見失っている。マイマ
イの生存確認でもするか。メジリなんてもつと不思議に思っているはず。それでもあいつは「なんで？」
とは聞いてこない。お陰でなんだか助かっている。

でも、なんで？

「無料で見られるんなら、行かないと勿体ないだろう」

メジリが私と山下公園へ向かった理由はそうだった。ほとんどバラなんて見なかったけれど。枯れて
たし。家に真っ直ぐ帰ったらスマホをWifiにつないで、いくらでも激辛焼きそばの動画が観られた
はずなのに。

ねえ、なんで？

私が聞きたい。なんで山下公園まで一緒に戻ってくれるの。

茶色く焼けた腕に金色のうぶ毛が輝いている。その指先にはチケットが挟まれていた。

「船来たよ」

ふと『命のビザ』を思い返す。その先に望んだのはあるべき日常。そういえばあいつさっき「ケーキで
も食えればいいけど」とか言ってたよね。今からそんなもの食べたら夕ご飯食べられなくなるけど。誘
う理由もないけど。変なこと言ってるまた変な返しされたら面倒だし。あいつが誘ってきたから付き合っ
ているだけ。思考の空回りに、ふたたび私の鼻が膨らみはじめる。

「疲れた？」

シーバスへ視線を送って首を振る。

「おまえ、怒り方が可愛くないから、なんか信頼できるよな」

なにそれ。反射的に振り返れば、メジリは重たいリュックサックを背負いあげる。僅かに重なる視線。
言われても全然嬉しくないあいつの良いところなら私だって幾つとも言える。楽しい船旅になりそうじゃ
ない。笑ったあいつの唇は細かく震えていた。

ほめられたくて文化干し

今日も風呂に潜って46秒息を止める。

「おぼろげながら浮かんできたんです。46という数字が」

風呂から頭を出すと喉を鳴らして大きく息を吸った。温室効果ガス削減に貢献できているとは思えない。
誰の発言だったか覚えてるか？ 俺にはくっきりした姿が見えている。自信たっぷりなイケメン大
臣と呆気にとられた美人キャスター。あの美人はなんて名前だったか。一体なにが「46」だったか。そ
の辺はまるで覚えていない。

それでもあれ以来風呂の中で46秒息を止めるというのが習慣になっている。そして、そいつが自分な
りの正義だと考えている。これさえやっておけば経済活動も風呂上がりの一杯も許される。

知覚過敏は老化の一種だろうか。ビールなんてキンキンに冷えているほど美味しいと思っていた。最近では風呂へ入る前に缶ビールを仏壇に備えておいて、風呂上がりには飲むくらいが丁度いい。

かみさんを亡くしてからの日々はルーティーンになっている。定時には仕事を終えて、家に帰れば冷蔵庫から缶ビールを取り出す。りんを一回打って仏壇に350ml缶を置かせてもらう。風呂に潜って46秒息を止めている時、このまま死んじまったらどうだろうと考える。

「死んじまったよ。困ったな」

なんてことにはならないだろう。先に逝ったかみさんのおかげで墓はある。母親がいなくなった途端に末息子も家を出た。俺の余生はローン残高のためにあるのか。そう考えると残高が愛おしく感じられ、団信というヤツが疎ましい。風呂が冷えてきて追い炊きボタンを押した。

「追い炊きします」

何度も聞いた声。

「どうぞよろしく」

やもめは風呂とだって会話をする。AIだ、IoTだ、風呂がベラベラ喋り出したら俺はいつまでも風呂に入っているのではないだろうか。不健全だよ。エコじゃないよ。

そろそろビールが適温だ。風呂から上がったりんを二回打って缶ビールを開ける。仏壇に写真は置かないようにしている。テレビを付けてサバの文化干しを焼く。レンジフードがこんなに五月蠅いのはファンの軸が歪んでいるからだ。そう業者に指摘された頃、かみさんはまだ生きていた。

米が予約通りに炊き上がり、電子音できらきら星が流れた。

奥付

奥付

Puzzle 文集
12

<https://puboo.jp/book/128205>

著者：puzzle

著者プロフィール： <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/128205>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社

Puzzle文集12

著 者 puzzle

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
